

不義を行ふ盜賊にはあらじ、御身前夜阿波の鳴門にて海賊に出であひ、あやまつて我が漁船へおちいりたるゆゑ、此の隠家へつれかへりしなり。そもいかなる人の妻にや。」など問ひければ、お弓すこし心おちるて、まづ人々の介抱を謝し、さていひけるは、「妾は此の阿波の國司畠山國清の弟、同名多門といへるものの妻にて侍るが、此の度本國へくだる海路にて盜賊に出であひ、かく難儀に及び侍ふなり。此の上の御なさけには、妾を阿波國德島へおくりてたべ、彼の地にいたらば、夫子の安否も知るべし。」とものがたる。十郎兵衛きくごとに打驚き、「我が合壁に住みし弓子、畠山多門といへる貴家の室となりたりと、津の國にて街説に聞きたるが、扱は我がこゝろをかけし女なりけるか。」と、目をとめて見るに、與次右衛門が娘弓子にまがふべうもなければ、心のそこに喜びけり。弓子草賊にむかひ、「さるにてもこの地はなにと申す所なりや。」と問ひければ、兵六答へて、「此の地は阿波國。」といひさすを、十郎兵衛目をもて知らしめ、なかばより物語をひきとり、「此の地は日向國宮崎郡川戸村といふ所なれば、德島へはほどとほし。されど御身をば不日に送りやるべし。」と、口にいつるまゝにたばかり、手下に命じて弓子をいたはらせければ、兵六は更に不審はれざりけり。十郎兵衛手銃の三太をひそかなる處に招きて申しけるは、「我昨夜鳴門において討ちとめたる武人は、畠山多門といへる者なるよし、彼の女が物がたりにて聞きたるが、彼の畠山多門といへるは、當阿波の國司國清が舍弟な

れば、當國に住居せんには、我々が僉議もきびしかるべし。幸ひ汝が故里讚岐國三木郡は、山たかく谷ふかく、身を隠さんには屈強のところなり。畠山の樓船を切りとりて、そくばくの金を得たれば、ひとまづ彼の地に立ちこえ、身をやすうおくるべし。」といひければ、三太も宜なりとうけがひ、次の日雜具をそこくとりかたづけ、お弓には德島へおくりかへすといひあざむき、竹駕にたすけのせ、草賊にかかせ、三木郡八栗山に到りけり。弓子は德島にいたるとのみおもひしに、あらぬ山路の白屋につれゆき、夫れより何地へもおくりゆけはひも見えざれば、心のそこに喜ばず、おそる／＼十郎兵衛に向つていひけるは、「日向國とやらんにてのたまひしは、妾をして德島へおくりかへすときこえしが、さはなくてかかる山路に誘引ひ給ひしは、何なる由縁にや。」と問ひければ、十郎兵衛む、とうち笑ひ、「いかに女、汝に見する一品あり。」と、骨柳をひらきて、一ツのふくさ包をとりいだし、弓子が目さきへつきつくる。弓子は何の心もつかず、手にとりあけておしひらけば、中に木履のかたと別に道のく紙の王章あり。いぶかりつゝ、よみくだすに、

拾ひてはすても置かれじ白波のよるてふあとの戀忘貝

とかいつけて我が手跡にまぎれなし。忽ち往年今市におくりたる木履なる事を思ひ出で、なみならず驚き、此の時初めて十郎兵衛を熟みるに、はるかに年はたけたれども、今市にまぎれなし。こは何

とせんと逃げいづれば、十郎兵衛山刀をぬきもちて、弓子が襜を疊にぬひつけ、柄を握つてうごかせず、「やよ弓子、汝先年此の歌を我におくり、はづかしめしを覚えあるらめ、過日汝が口より多門が妻なりといひたるにて、とくお弓なりとは心づきしが、我が面を見ちがへたるを幸ひ、此の八栗山にいなひたれば、にぐるとも、たはやすく女の足にて徳島へゆかん事思ひもよらず、今はなか／＼戀ひまさりしのみにもあらず、我が種姓を思ひがけなく聞きしより、白波の歌をもて恥辱を與へたるを知り、むねんさやる方なく、再び汝にあひ見し上は、心の儘に横陳して、我が煩惱の胸さへはるれば、それを遺恨の心やりとなし、徳島へ送りかへさんとは、傍に等しき心ならずや。今云ふ如き恨みはあれども、其の艶なる顔色に何とて刃のあてらるべき。我を悪棍とな言ひそ、汝こそ却つて命ぢめる賊なり。」と、後より抱きつかんとす。お弓「あなや。」と叫んで身をふるはし、總身の力を出して十郎兵衛をのけさまに突きたふし、山刀おつとりあけ、自害せんとしければ、十郎兵衛飛びあがつて、手にもつ刀をふみ落し、帯をもつて縁先のはしらく、りあけ、兵六喜佐なんといふ手下にいひつけ、一室の入口に格子をうちつけ、其の内に弓子をこめおき、草賊を番人となし、晝夜おこたりなくつけおきければ、弓子は死ぬことすら心にまかせず、二日三日は食をたちて、餓死しなと思ひしが、此のところは讃岐國三木郡といふ所にて、徳島へは、さまで遠からぬ由を、草賊が語るを聞き、

又心をとりのほし、いかにもして草賊等に、心をゆるさせ此の所をにけのびんと、さま／＼計をめぐらしけれど、十郎兵衛は天性奸佞なる男なれば、いよく就誤はなさざりけり。嗚呼いたましいかなや。弓子は一室におしこめられ、夫子の生死をきかまく思ふのみにて、死にもやらず活きもやらず、憂き命を辛うじて存へ、いたづらに月日をおくりけり。是れよりは別にしるしとむべき物語なし。因にいふ、弓子絶入なして四時をすぎ、忽然として息いで、常の心地となりたるは、畠山の寶物のうち蘇生丹といへる仙藥ありしを、十郎兵衛盗み來り、此の藥を口の中に洒ぎいれし故なり。十郎兵衛大いに喜び、彼の仙藥をば手下の者にさへふかくつ、み、衣櫛の抽斗に納め、かたく肩鐻をさしおきたりとぞ。是れは扱おき、鳴門においてうちもらされし、多門が家來一兩人艇にて津の國に乗り歸り、畠山國清が館にいたり、多門が鳴門のおきにて海賊にいであひ、船中のこりなく討死の趣を告げければ、國清は只一人の舍弟を、ゆるもなく失ひ、怒氣心頭よりおこり、たゞちに阿波國に人はせて、海賊の姓名を問ひきはむるに、阿波の十郎兵衛といへる者なるよしを聞き出し、十郎兵衛が隠家を、收人をもつてとりかこみしが、はや何地へか逃げうせければ、國清が計策にて屈強の兵士を賈船にかくし、西海を乗りめぐれど、元來船路に委しき海賊なれば、容易くはとらへ難く見えにけり。淺茅は多門弓子が非命の死をつたへ聞き、雨しづく泣きて、死にもしなと思へど、次郎九郎

が心をもちりて介抱なすを、ちからぐさとなし、重ねくの薄命をうらみ、髪をおろして尼となり、住吉郡の海へん勝間といふ所に、かたばかりの庵を結び、旦夕あはち島山をうちながめ、弓子が入水なしたるはあのかたにやと、それすら涙もよほすたねとなりぬ。次郎九郎が孝心はむかしに倍し、束のまも淺茅が側をさりやらず、なにくれと心をもちりけり。

お弓我が子としらで順禮を殺す

並軍太十郎兵衛が家に宿る事

さても弓子は十郎兵衛にとらへられ、塵ふかき空屋にこめおかれ、夫子のゆくへを聞かまく思ひ、なかばは亂心となりて、夢のまに六年をおくりけれど、十郎兵衛は心ながくうちすておきけり。漸く心さだまりて、弓子熟思ふやう「所詮かくてあらんには、百年をふるとても、夫子にあひ見ん事思ひもよらず、一度阿波國に歸り、多門君にまみえて後、自害して分説せんと心を定め、しだいに心とけしさまにもてなし、火坑に身を投げ荆棘をいだくるしみをおしかくし、心にそまぬ下紐もいつのほどにかとけそめて、十郎兵衛に身をまかせけるぞくちをしし。十郎兵衛大いによろこび、さながら我が妻がほにもてなせども、奸智ふかき性なれば、かくなして逃げいでんも知るべからずと、みだりに心をゆるさざれば、弓子もせんすべなくて、又いたづらに一年をおくりける。十郎兵衛も今はき

づかふ事なしと思ひけん、弓子にのみ家をあづけ、手下を引きつれ何地へか出でさること生平なれば、弓子大いによろこび、道に迷ひし四國巡路の修行者を家にとめ、もし然るべき者もあらば、身の上を委しく語り、路しるべとなして逃げ出でんと計りしが、大方は老いたる女、愚かなる土民にて、物の用にたつべきとも覺えねば、心ならずも日を重ね、七月も半ばたちて、なき魂まつる夜とはなりにき。此の夜もお弓一人家にありて、心ばかりの香華を佛前へそなへ、庭さきより廻りいで、谷川へおりたち關伽の水汲みとりて、手もたゆげにたちかへるをりしも、樵歌のそれならで、まだ春めかぬ鶯の、舌もまはらぬ谷かけに、うた諷ふ聲ぞきこえける。

ふるさとをはるくこゝに紀三井寺花のみやこも近くなるらん

ふだらくや岸うつ浪は三熊野のなちの御山にひく瀧つせ

とうたひつ、さしも嶮しき山路をたどるくよぢのほり、お弓が門邊にたちとまり、「順禮に御報謝。」と、いふも優しき姿なり。「どれ報謝進らせん。」と、しらけの米を盆にもり、さしだしたつ、熟見るに、十にはたはらず九ツには、遙か背丈も長びし女子、手に竹の小笠と柄杓をもち、いたく道につかれしと見え、ちひさき足も荆棘にさかれて血にまみれ、あまりの事のいたはしさに、「まづこなたへあがりて憩み給へ、其の手桶に水もあり、いざ足そぎて參らせん。朝の雨にて庭先はなめらかに

てありきにくし。妾が手をしかと捕へ、ころびて怪我ばしし給ふな。」と直に我が子をいたはる如く、手づから順禮の足を酒ぎ、怪しき座鋪にもなひて、「茶一ツ参らせん。」と、茶杯に掌をつけ、をさなき者にはわきすぎしと思ひけん。茶をふきさまして側により、「それなる順禮衆には今年何歳になり給ふ。」と問ひければ、兩の掌をさし出し、大指を一ツをりて見するは、九歳といへるをしめすなるべし。お弓うちうなづき、「さきより笈摺小笠を見れば、同行二人としるしあり、と、さまにやは、さまにや。」とねもごろにいふに、小女もいとうれしけに、「いえく、同行は父さま母さまにも侍らず、縁故ありてと、さまも母さまも、御顔もおほえず、御名もしらず、たゞ庶叔さまの世話になりしが、往年よりをぢさまは脚氣とやらにて足たたず、漸う近會こ、ろよき故、妾をつれてみやことやらいふ遠いところへゆき侍るが、さきに草鞋買ふうち、つい庶叔さまを見うしなひたり。おしつけ此の道へたづねてまるり候まで、姑さまのとおにおきてたべ、よその子は爹々さま母さまに、ほしき物ねだるを見れば、何とて妾には雙親のなき事かと、且も夕も泣きあかし、伯父さまの病ひ給ふうちは、よその子のやうにわるさもせず、およばぬ手わざに藥を煎じ、全快をよろこびて、難波とやらいふ太母さまの許へ、おくりやるとの言葉をしたのみに、苦しい山坂こゆるうち、伯父さまをさへ見はぐりて、この身はなにとなるべき。」と、門をのぞきつ座に直り、案じわづらひ涙ぐむ。お弓小女が脊うちなで、

「お、理なりく、なに此の道は一筋なれば、おしつけ伯父様にもそもじを尋ねて見えらるべき、なにぞたべたき物あらば、此の姑に心おきなういひ給へ。」と、小女を膝に抱きあげ、心をつけていたはれば、順禮はなほうち泣きて、「其の様にさけ深き事のたまへば、お前がどうかほんのは、さまの様に思はれて、別れてゆくが妾は悲しい。もう伯父さまもいりませぬ、何卒此の家におきてたべ、おまへの側にある事なら、飯たいてなりと、妾は厭ひは致しませぬ。」と、わつとばかに泣きいだし、お弓にひしといだきつく。道理と思ふ心より、お弓もわつと泣かんとせしが、漸うに涙を隠し、「此の子とした事が、無益きこといひだして、妾までもらひ泣きに、よしなき涙をこぼしたり。父母の名も顔もしらじとは、捨子とやらんも、世になきためしにもあらず。さぞたよりなくおほさんに、妾も側におきたけれど、妾も。」と、いひさして四壁をかへりみ、「一日二日のうちには、此の所を立ちのく者なれば、そなたを此の家におきがたし。」と、あたりの手箱ひきよせて、小金一兩とりいだし、「是れをそなたに與へんほどに、人里に出でてのち、紅き絹買うて髪ゆやれ、但しは又花のつきたる弁買やるか、どうやら妾もほしくなりし。」と、哄しつすかしつ餘念なし。順禮は頭うちふり、「いえく金といふ物は、小判とやらを、こゝに數多もつてをります。」と、首にかけたる財布をとりて、お弓に渡せば、お弓更に實となさず、何心なくひらき見るに、二百兩にあまる小金あり。う

ちおどろきて小女にかへし、縁故あらんと心に推し、「此の小判といふ物をもつてゐるを、盗賊が知る其の時は、そなたの難儀となるほどに、人にばし見せ給ふな、たとひ此の妾が借せといふとも、貸すものにあらず。」といひをしへ、お弓は縁にたちいでて、「日もはや申下刻とおほゆるに、そなたの同行衆はもし針坂越にかゝりはし給はじや、そなたを道に見うしなひ、やすき心もあるまじ。」と、あたりを見廻し、「幸ひなるかな、此の笠を門の柱にかけおかば、屈強の枝折なり。」と、楓葉を紙もて刻みてぬひこみたる竹の小笠を門にかけ、なにくれと介抱なせば、連れに別れし其の憂さも子供心にうちわすれ、お弓が膝を枕として、旅寢の夢をぞむすびけり。お弓は一人うち笑ひ、「をさなきものほど罪なきものはあらず、今あひたる妾をば、實の母と思ふやらん、膝をまくらにうたゝねし、風ばしひきてたもるな。」と、一間の内に蚊帳をたれ、目覚めぬ様に小女を抱き、そひねなすこそ憐れなり。はやくれぬとや告げ渡る、遠寺の鐘の寥々と、響きをさそふ山風に、鉦鼓の聲もすみわたり、めぐる谷をめぐりきて、ゆきくらしたる修行者の、庵の外面にたちとまり、夕陽幽谷に落ち野鳥林中にかへり、ゆふづく星のかけ見えて、くるゝもはやき秋の日の、此の所をゆきすぎなば、いつ人里にいでんとも計り難し。椎夫狩人の住舎ならんなにまれ、一夜の宿りをこうてみると、網戸を喧ひしかくのよしいひいるれば、弓子は小女の同行ならんと、庭におりたち、柴折戸おしひらけば、さにはあら

で日本回國の修行者なり。「いぶせきだにいとひ給はじなら、一夜の御宿まるらせん。まづこなたへきたり給へ。」と縁先にいざなひて、煙茶のもてなしこまやかなり。修行者もうれしけに一禮のべて、草鞋をとり足をそゞぎ、くさくの物語なす間に、彼の修行者元來津の國の産まれなるよしをいひ出でければ、お弓はふるさとなつかしくて、もし此の所をしのびいづる、たよりにもなりなんと、なにくれともてなしければ、修行者又いへりけるは、「我その昔は畠山國清の舍弟多門といへる武士の家臣なりしが、縁故有りて出國なし、國々武者修行を心がくれど、別におそろしき事もなし。」なんどほこりにかにいふ面を、うちおどろきて熟見れば、何とやらん見覚えあり、「こは彼の桃井軍太ならんも知るべからず。」と心によろこび、かくしおきたる中刀を衣櫛のなかよりとり出し、修行者の側により、「もし修行者の姓名は桃井軍太とはいひ給はじや。」と問ふ。修行者うちおどろき、「いかに我は軍太なり、我が姓名をしれる女性、いかなる人にておはすらん。」とふりかへれば、お弓中刀ぬきはなち、親の仇ときりかゝる。軍太身を閃かしてとびさり、「またれよ女性、我非義非道をおこなひて、みだりに人を殺さざれば、かたきといはるゝおほえなし。もしくは人たがへなるらめ。」といふに、お弓聲あら、け、「おほえなしとは、卑怯しごく、汝往年、津の國十三ノ渡にて殺害なしたる、與次右衛門が娘弓子、はるか年へたれば見わすれもしつらん。汝が口よりはからずも、桃井軍太と姓名をなのりし

は、妾に親の仇を討てと天道のひきあはせ、いざたちあがつて勝負なせ。」とつめよれば、軍太聲をはけまし、「數へ見れば十餘年のむかし、津の國において與次右衛門をうつたるは此の軍太なり。」といふに、「さてこそ。」とお弓すかさず切りつくる。閃と右へ身をさけて、「またれよ女性、汝が父與次右衛門は我より百兩の黄金を請けとり、汝を多門君へおくりたてまつらず、彼の黄金もかへさざれば、君への申譯として討ちすてたる與次右衛門は、とりも直さぬ盗賊なり。征伐なしたる盗人の親類血類、敵なりといはんには、數にかぎりもあるべからず。強ち我を討ちえんとなら、所詮用なき雲水の身、いざ討ち殺せ。」と兩手をくみて座になほる。弓子涙をはらくと落し、「父與次右衛門殿に限り、心にくもりなき事は、鏡にかけて明らかなれど、何を證據にいひとくべき、いかゞはせん。」とたゆたひしが、不斗心づき軍太に向ひ、「妾が身の上より父に盗賊の悪名おほせ、討ち得たりとも本意ならず。妾今百兩の黄金をかへしあたへんが、彼の金をもて父の悪名を雪ぎ、その上にて親の仇と名のりあひ尋常に勝負なすべきや。」といひければ、軍太私かに思ふは、かかる白屋に百兩といへる黄金のあらん道理もなく、よしまた黄金あるにもせよ、女の手腕なほどの事あらん、百兩の黄金をうばひ、返討になさんには、大いなる仕合なりと、心に喜び、「いかにも百兩の黄金さへ我にかへさんには、親の敵と名のりもしなん。」とて、「金を與ふべし。」といひければ、お弓大いに喜び、軍太が方に眼をくば

り、一間のうちに他愛なく、ねぶりのたる順禮の小女が黄金をとり、音なき様に忍びいですが、あまりに心せきたちて、首にかけたる財布の紐をはづさざれば、小女は紐にてひき起され、わつといひて泣きいだし、「これ姑さま、さきには金と言ふものは、他人にもかさぬものとのたまひて、妾をねせつけ、盗み給ふか悲しや。」と、紐をたくりてにじりより、小さき手にて財布を握り、はなすけしき見えざれば、お弓いと心いられ、「今危急の事有つて百兩の黄金なければ、姑は生きてはゐられぬ程に、少時の内貸してたも、是れ手をあはせをがむぞ。」と、思はず聲をあけるが、軍太の方にもれ聞えんと心づきて、聲をひそめ、「なさけと思ひて貸したも。」と、さましくといひ和むれど、小女は更に聞きいれず、財布を持つて逃げ出づれば、引留めんとする財布の紐、後に隠せし中刀にひき纏はれて、ふつと切れ小女は後居に控とたふれ、小判四方にとびちりけり。小女は白刃を見るよりも、「あれ姑さまは妾を殺し給ふに、他人ぞきてはやく妾をたすけてたべ。」と、聲の限りによばはれば、お弓は軍太に知らせじと、袖をもて少女が口をおさふれば、なほも聲をあけ泣かんとせしが、まだ九ツなる女子の、氣をせるうちに息つまり、控とばかりに倒れふす。うち驚きて抱きおこし、心をつけて介抱なせど、はや息絶えて死にうせければ、「こは何とせん。」と、彼方もきづかひ此方もきづかひ、身をわけまくもおもほへて、悲歎の涙にくれけるが、「親の仇にはかへられじ、首尾よく軍太をうちおほせ、此の

金をもてあとねもごろにとむらはん、許させ給へ。」と、心のうちに唱名し、おち散る小判を拾ひあげ、軍太が前に投げやれば、軍太は金を數へ見て懐中にしかと納め、笈の内より刀とりいで、かへり討になさんずものと、お弓をめがけ切りかゝる。のぞむところとわたりあひ、半時ばかり闘ひしが、弓子は立田にまなび得て、劍法を熟練なせし上なれば、軍太はお弓に切りたてられ、かなはじと思ひけん、おもてをさして逃げいづれば、弓子つゞいておひかけいで、肩尖深く切りこみて、返す刀に首うち落し、喜び勇むそのをりしも、六十ばかりの旅の僧、門の柱にかけおきたる、竹の小笠を月かけにすかし見て、「扱は孫鶴子は此の家の内に宿りしならん。夕暮より見失ひ、心も心ならざりしが、よろこばしや。」と一人ごち、網戸をひらきて内に入り、此の光景を見るよりも、大いにおどろき、小女が亡骸抱きあけ、「こは孫は何人が殺せしぞ。」と、狂氣の如く泣きまどひ、忽ちお弓が軍太をうちとめたるを見るよりも、「孫の仇も此の賊婦なるらめ。」と、落ちたる刀拾ひあけ、お弓を目がけて切りかかる。弓子忙はしく身をさけて、「やれまぢ給へ分説あり。」といふ顔熟うちまもり、「女性には、お弓の方にて渡らせられずや。」といふ。弓子おどろき何人なる事を知らず。旅僧白刃を傍に投げすて、弓子が手をとりにて上座になほし、はるかさがつて兩手をつかへ、「御見わすれは宜なり、貧道は君の侍女たりし立田が兄橋平なり。」といふに、弓子旅僧をつぐみ見れば、いかにも其の人なりければ、只

呆れるるばかりなり。橋平お弓に向ひ、「君には鳴門の洋中にて入水なし給ひしと聞きたるが、いかにしてか此の所にかくれすみ給ひ、また何等由縁有つて孫にて候小女。」軍太が亡骸を指さし、「あれなる修行者と見ゆる男を殺害なし給ひし。」と問ふに、弓子答へて、「妾此の所に隠れ住むは、一席に盡しがたき物がたりあり。」と、身に暗き事の有るなればや、頼に言ひもいせず。親の仇たる桃井軍太にめぐりあひ、あやまつて小女を殺したるまで、涙ながらにかたりければ、橋平も涙にくれ、「親の仇を討ち給はん爲となれば、我が孫の五人三人命をおとし候とも、争でか恨みたてまつらんが、實はわが孫にても侍らす。我往年四國遍路とこゝろざし、賈船に便りをもとめ、阿波の鳴門を過るをりしも、小舟にのりたる女一人二歳ばかりの女子をいだし、數ヶ所の矢疵にくるしむ有様、見捨ててすぎんも桑門の本意ならずと、禪杖を彼の小舟に投げかけひきあけみれば、豈料らんや妹立田なり。我を見るより、さも嬉しけに笑みをふくみ、只一言の言葉もかはさず、そのま、相果て候が、さるにても此の女子は、畠山家の御身よりならんも知るべからずと、賈船の事なれば、直に津の國には歸りがたく、我がゆかりある土佐國高岡郡中島といふ所におもむき、なさけある家の軒にたち、乳をもらひてそだつるうち、往年より、我は脚氣とやらん病におかされ、足なへぎて立つことあたはず、人をして音信せんにも邊土といひ、戰國の刻なれば、おもひを空しく年をつみ、漸く病も癒えたるゆゑ、阿河國に

いたりしが、今は彼の地に畠山の御一族も住み給はねば、せんすべなう我が孫と假によび、順禮とすがたをやつさせ、此の所まで誘引ひしに、露の命のきえはてしも、みな宿世のやくそくならん。いかなる由縁にや、立田が乗りたる小舟の中に、二百兩に餘る小金あり。拾ひあつめて持ち返りしが、出所もたしかならざれば、かく貧苦にせまれども、一兩もつかひすてず、此の子に持たせおきたるは、我が一點の赤心と思ひし事も仇となり、此の金故に死にうせしは、いかなる前世の報いぞや。」と、雨雫と泣きまどふ。お弓は過刻よりの物語、何とやらん胸にこたへ、「もし此の小女に守袋はなかりしや。」と問ひければ、橋平答へて、「いかに赤地の錦の守袋に、某年某月某日誕生の女子鶴子としるせし臍帯あり。」ときくより、お弓は正體なく、「さては我が子か娘か。」と亡骸を抱きあげ、身もうくばかり泣きさけぶ。橋平も打ちおどろき、「扱は姫君にてありけるか、七年をへてめぐりあひ、親子の名乗もしたまはず、はかなきわかれとなりゆきし、御心ねのいたはしや。」と、少時涙にくれてけり。お弓はおつるが亡骸に、生けるがごとくくりごととして、「さきにそなたが此の弓を、實の母とおもひしとは、むしが知らせて言ひたるならん。あひたい見たいと憂き年月、こがれしかひも波の上に、きえなばかかる苦しきは、あるまじもの。」といだきあぐる、亡骸の笈摺金具にかゝり、錠前さしたる衣櫛の抽篋、ひくにつれて開きければ、お弓は何の心もつかず、ふりかへり見る抽篋に、畠山の家系と、

蘇生丹と言へる仙藥あり。弓子な、めならず喜び、鶴子が口に藥をとりてそゝぎ入るゝに、忽然として息いで、常のさまになりたるは、奇なりといふもあまりあり。鶴子橋平を見るよりも、うれしけにかけよれば、橋平もよろこびにたへず、弓子ともくさきのあらまじものがたれば、鶴子はお弓にいだきつき、「さては實の母さまか。」娘にてありけるか。」と、互に手に手をとり交し、うれし涙にくれにけり。橋平不斗、「多門が十郎兵衛といふ海賊にうたれたる由、徳島にて聞きたり。」と語りいでければ、お弓大いにおどろき、「努々知らざる事ながら、良人の敵に身を任せ、生きながらへて何かせん、そがゆる蘇生丹も此の家にありしは必定せり、死して良人にいひわけせん。」と、橋平鶴子には、「あとより妾は追ひつかんに、高松といふ所にてまちあはすべし。」と、云ひ賺きておとしやり、はるかに見やる後かけ、これが此のよの別れかと、思へば氣もきえ眼もくらみ、其の儘そこに泣きふせしが、かくてははてじと心をはけまし、「おのれ阿波の十郎兵衛、今におもひしらせん。」と、白刃の錠口に銜へ、はるかの谷に眞逆さま、花の顔岩にくだき、微塵となりて死にうせしは、あはれはかなき身のはてなり。さても十郎兵衛は、八栗やまを立ちいで、直に阿波國にいたり、例のごとく船をうかめ、一日鳴門を過る賈船に込みいりしに、元來此の船は國清が家臣をかくしおきたる官船なれば、おもひもかけず、手銃の三太鹿越兵六をはじめ、手下のこりなくからめとられ、既に十郎兵衛もとらへら

れんとなしけるが、例のごとく海中へとびこみ、浪を漕りて時の間に十餘町をおよぎぬけ、辛うじて一艘の大船を見あたり、彼の船に乗り見れば、是れもおなじき海賊船なり、「西海の賊は我のみとおもひしに、別に海賊の首領あるは、是れ我々が大きいなるさまたけなり。彼の首領さへ討ちすてなば、残りし草賊等は何ほどの事あらん」と、心ふとくも思ひきはめ、此の船にたすけのせられしを一禮のぶるさまにもてなし、側ちかくすりより、刀をぬいて切つて懸る。かの賊も身ををどらして、「心得たり。」とぬき合はせ、二合三合打ちあひければ、十郎兵衛聲を勵まし、「まづ待たれよ、尊客の佩刀に男龍の彫あり、我が劔に女龍の彫あり。其の刀は津の國長柄の里において盗みとり給ひしならん。」と問ひければ、彼の賊も刀をひき、「我ちかごろ海賊となりしが、むかしはみやこ方の盗賊、小濱の次郎といふ者にて、往年長柄の里にて盗みとり、きれあぢよければ佩刀となす、いかにしてか汝是れを知れりや。」といふ。十郎兵衛懐中より、二五作が與へたる洗水帛の袈裟とり出し、小濱の次郎にみせければ、手にとりあけてうち驚き、「是れこそ我が所持なせし洗水帛といふ織物なるが、往年長柄の里の大戸にこみいり、小女にたはむれ取落せしに、さては彼の大戸の血類なりけるか。」と言ふに、十郎兵衛涙をはらくとながし、此の袈裟のぬしこそ、我が父なり。」と、祖父二五作が物がたりを、おち／＼かたりにいでければ、小濱の次郎大いにおどろき、「扱はその夜我がたはぶれし手弱女に出生なせし男

なるや、こは思ひがけなき父子の對面なりける。」と、手をとりはして喜びける。時にふしぎや、冷風俄に波上におこつて、お弓が怨鬼かけのごとくあらはれ出で、眞帆十分にひきあけて、矢よりもはやき大船の、楫をとつてつきかへせば、狂浪逆波左右にわかり、忽然として十餘町を、艦の方につき戻し、さきに切りぬけたる畠山の官船まぢかくなれば、十郎兵衛大いに氣をいらめ、弓子が怨鬼に切りかゝる。弓子さらにおそれもやらず、白刃を口にひきくはへ、冷笑をなすと見えしが、見る／＼白骨となつて波上の風にきえうせけり。畠山の官船は此の船めあてに漕ぎ來り、捕手の多勢海賊船へのり移れど、小濱の次郎十郎兵衛をはじめ、足なへぎて立つことあたはず、無念とは思へども、手をつかねて繩を待つぞこ、ちよし。畠山の家臣は力をも用はず、數多の賊をからめとり、大いに喜び津の國さして歸船なしけり。是れは扱おき、淺茅は津の國住吉郡の庵室にこもりて、後世のいとなみおこたりなかりしが、ある夜夢むらく、弓子此の世にありし姿にて、淺茅が枕邊にきたり、顔をもあけえず泣きたり。淺茅夢心にうちおどろき、こは亡魂のうかれまよひて、又もこのよに來りけるかと、只管念佛となへければ、弓子漸く顔うちあけ、十郎兵衛にとらへられし事より、橘平鶴子にめぐりあひし一伍一什を、おろ／＼語りいで、重ねていひけるは、「明日は橘平鶴子を誘引ひて、此の庵室にきたるべし。まつた彼の阿波の十郎兵衛、小濱の次郎といふ兩賊を初め、あまたの盗賊、我怨鬼

となつて、國清君の家臣に捕へさせければ、日あらずして此の津の國淺香山の麓、大和川原において刑罰におこなはれん。其の折娘鶴子に刑罪の太刀とりをさせ給はば、我が怨鬼かけ身につきそひ、鶴子に討たせ申すべし。夜あけて後海邊にいで、龍の彫りたる佩刀あるをもつて、正夢なることを知り給ひぬ。」と言ふかと思へば、猛然として夢さめけり。淺茅奇異の事に思ひ、次郎九郎に夢のあらまし物がたり、よよとばかりに泣きふしけるが、かくては果てじと、海邊にいでそこ、とたづねめぐれど、それと思はんものもなし。かかるをりしも、常にめなれぬ大浪、裾をひたすばかりによせ來り、果して一腰の劔をうちあけけり。とりあけ見るに、髪ながやかにおひたる觸體、白刃を唾へてありければ、是れなん弓子が觸體なるべしと、いとゞなみだをもよほしける。をりしも橋平は鶴子をいざなひ、此の庵室にたづねきたりければ、淺茅はかけより鶴子をいだし、「これば、なるぞ、よくも無事きたりし。」と喜ぶに、橋平大いにおどろき、「僅か二歳の時わかれ給ひし鶴子君を、よくも見覚え給ふものかな。」と訝れば、淺茅は漸く涙をさめ、「弓子が夢の告げをもつて、今日この庵室へ、兩人が來ることをはやくも知りしをはじめとして、白刃を觸體の唾へてうちあけしまで、おちもなくかたりければ、橋平は涙にくれ、「さては八栗山にてあひまらせしが、この世にての御別れにてありけるか。」と、桃井軍太が修行者となりて來りしことより、蘇生丹といへる仙藥にて、再び鶴子の蘇生りし事、

高松といふ所にて弓子をまちあはせけれど、あまりに音信なきゆゑ、また八栗山にたちかへりしが、遂に行方も知れざりしことまで語りいで、四人ひとしくなけきけり。淺茅白刃をとりて、佛前になほし、一七日があひだ念佛おこたりなく唱へけるに、觸體は雪霜の如く消えうせけれど、なほ白刃に齒の形は鮮やかに残りければ、當國川邊郡今福の常光寺へをさめけり。彼の御寺に今もなほ、齒形の劔とてありとなん。かくて一日淺茅は孫鶴子を誘ひて、島山の館に到り、國清にあひて一伍一什をものがたれば、國清なみならずおどろき、「いかにも、汝がことはにたがはす、小濱の次郎、阿波の十郎兵衛をはじめ、あまたの海賊をとらへきて、ちかきほどに大和川原において、首をはねんとおもひしが、我がためにも姪たる鶴子、かく健かにて此の世にあれば、海賊阿波の十郎兵衛は、則ち父多門が敵なり。ことに弓子が怨鬼つきそへば、討ち得ざる事はよもあらじ。」と大いに喜び、其の當日になりければ、國清鶴子を誘いて、大和川原にたちいでけるに、鶴子は恐る、氣色もなく、明光々たる劔を眞向にかざし、十郎兵衛が後に廻ると見えしが、首は前にぞ落ちにけり。次郎九郎も、側にながめると、「鶴子一人にてはこゝろもとなし、我も共に太刀どりせん。」とたち上り、小濱の次郎をはじめ、あまた海賊の首を刎ねにける。日ごろ愚かなるには似氣なく、太刀のかまへ聲さままで、何とやらん島山多門に似たりければ、鶴子には弓子が怨鬼かけ身にそひ、次郎九郎には多門が靈の力をそふるな

らんと、みな人奇異ひとまがいの事におもひける。しかりしより次郎九郎も、桑門さうもんと姿すがたをかへ、いよいよく孝行かうかうおこたりなく、愚直ぐちよくなる性さがなれば、後のちにはかへつて大徳だいとくのきこえありけりとなん。鶴子つるこは國清くにきよが養女やうぢよとなり、吉見知武よしみとらたけの舍弟おと・せうみやう同名知利とらたけといふものを壻むことなし、畠山はたけの家いへいとめでたく、とみ榮さかえけりとなん語りつたへたるとなり。

阿波之鳴門五之卷 大尾

浅閒嶽面影草紙

田種歌

苗代にか、り、早苗をひきて篠簣になふ、禾擔を聞いて荷ひつ、田づらに行きて配り渡す、早少
女の受取りて植うる田歌ぞ面白き。中略。歌は國により、言葉は所によるとかや。近江の國風に、「あ
めは降るともなよいぞく、燕笠もなよいぞく、君にだに逢ふといふならばいそく、手にとる早
苗も捨てて行かましいそく、穂に穂重なれいそく、目出たしく千歳樂や萬歳樂。」とうたひて、
田は道わたしよろこぶとかや。丹波國の風の歌に、「春のころより我が閨に、通ふ殿子のあれどなよ、
人に忍べば隠し、隠して語らぬよな。中略。」日は照りに照らして、暑さに堪へがたき、蛭といふ蟲の
田の中において、人の足にとりつき、血をすひくらふ。そのかたち覆盆子のごとく、中略。このくる
しみの中よりも面白き歌うたふこと、籠の鳥の色音おもしろくさへづるに譬ふべし。

此の田植歌は、淨瑠璃作者の祖小野於通が作とて、洛東某寺に藏する所なり。淨瑠璃にもとづき此の物語を書け
るより、思ひ出で、録して序とはなしぬ。

于時文化五戊辰年夏六月

東都柳亭種彦

此ノ書ハ淨瑠璃本ヲ翻案シ、更ニ一點ノ實ナシ
 トイヘドモ、唯善ナルハ榮エ、惡ナルハ亡ブルノ
 天理ヲ洩ラサズ。サレバ書ヲ披クノ兒女、其ノ善
 ナルヲ好シ、惡ナルヲ惡マバ、勸善懲惡ノ素意、空
 言ノ中ニコモルベシ。

維時文化五年戊辰夏六月、一二ノ卷書果シ、同冬

十月草稿完クヲハル

柳亭主人種彦誌

事のはじめ

淀の邊は歌にも詠み、古き書にも見えぬれど、古より船には便りよき所なりけん。むかしく丹波國氷上郡柏原といふ所に、木の瀬といふ鏡師あり。津の國より都の方へ行くべきことありければ、四歳になる宇の葉と言ふ娘を將て、まづ津の國へ赴き、なすべき事畢てて、いざや京へ行かんと、淀の船に乗りけり。爰に年の頃は四十にすぎ、五十に傾きたる男、六歳許りと四歳ばかりの娘を連れ、木の瀬よりは先に此の船に乗り居たるが、彼の四歳許りの娘は、宇の葉と姿形も唯同じ様なり。木の瀬は彼の男の側にありて、さまざまの物語なす間に、馴るゝも速きをさあひどちの打向ひ、手に絲をかけて綾取をなし、餘念なく遊び居ければ、こは思ひかけずをさあひの友だちを得たりと、斜ならずよろこびぬ。此の頃又希有の愚者あり、其の扮装いと異様なり。まづ四尺八寸もあるべき刀の、鐙は八寸ばかり銀にてそぎつぎ、柄は一尺八寸に造り、細繩にて捲きたるを佩び、或は編笠をかぶり、或は黒革の脚絆をはき、又は熊手鉄をかつぎ、湯麻衣の肩のあたりへ、劔と櫻と舟さす械を染出したるは、劔花械といふ隠語なるべし。斯く異類異形の光景にて、堺大小路天満を始めとし、人だち繁き所を擇び、喧嘩買はうく。」とよびありき、衣裳兩腰など物數寄に拵へたる人を見ては、猥り

に空賞をなし、又は悪口などいひて、機を起てせんとさまんになぶりあなづり、別に人なきが如く振舞へど、さばかりの狼藉ものなれば、誰ありて相手になるべき者もなく、茨組と異名なし、道を譲りて通しけり。彼の悪棍者ども此の舟に乗り居て、「酒くらはすや牛蒡くらへ。」と賣り來るを、錢をも出さず奪ひとり、「喰らへといふ故くらふなり。」と、腹ふくる、まで打ちくらひ、果ては同子喧嘩をし出し、拳をもつて打ちあひ、遂に刀を抜くよと見えしが、一箇の悪棍を茶臼切にぞきつたりける。かかりしかば乗合の男女周章てふためき、歩みの板をはね渡し、東西に逃去りぬ。木の瀬も大きに狼狽へ惑ひ、行燈はうち消しつ、夕月さへ雲に隠れて、墨を洒ぎしが如き暗の夜なれば、綾を取りて遊び居たる、彼の男の娘を宇の葉とおもひ、小脇にいだきて走り去る。彼の男は宇の葉を己が娘とこそえ、「爹にしかと抱きつけ。」と脊におひ、姉娘の手をひきて、是れも又逃げ去りぬ。

此の物語は何某なる僧、此の船に乗り居て、旅日記のうちに留め置きしを、さる方より索め出し、後の物語に符合なせば、書い誌して發端とはなしぬ。

柳亭主人

淺間嶽面影草紙目錄

卷之一

- 第一 淺間の後室遠山尼袖の渡の花遊覽
- 第二 一齋末期に茶事の奥儀を傳ふ

卷之二

- 第三 忘貝寄居蟲修行者が物語を聞きて羽黒山に赴く
- 第四 辛崎の社にて巴之丞初めて罹麥に逢ふ
- 第五 星影土右衛門幻術を以て巴之丞が矢を免る

卷之三

- 第六 忘貝寄居蟲に代りて花街に身を賣る
- 第七 月夜に罹麥時鳥を迎へて恥辱を與ふ
- 第八 巴之丞再度皇都に旅だつ

淺間嶽面影草紙一之卷

編者 柳亭種彦

第一 淺間の後室遠山尼袖の渡の花遊覽

説話京都將軍義滿公と申すは、尊氏の三男義詮が長子なり。貞治六丁未年四月二十六日、義詮薨逝ありければ、寶篋院と號す、南無二年未だ幼なく坐すを將軍とあふぎ、管領職細川武藏守頼之輔佐し奉り魏々として忠心を盡し、邪曲奸佞の臣を遠ざけ、教因といへる南都の側に住む遁世者を招きて、御學問師にまゐらせ、日を逐つて將軍賢々しくなり給ひければ、萬民怖れ謹むこと故將軍に超え、遂に西國の菊池を退治し、攝州河州の殘黨をたひらけ、武威四夷をてらし、四海を掌に握れども、政務に親疎のわたくしなく、春風春雨の庶物をうるほすに似たりと、司馬溫公が言葉も、かかる君をさしてやいふなるべく、貴賤高枕にねぶる御代とはなりぬ。此のころ淺間巴之丞良治といふ者あり。父は淺間由利之進良久とて、往年將軍義滿公菊池征伐の刻、軍功數度に及び、陸奥にて五千貫の知行

を給ひけるが、程もあらず死去なしけり。巴之丞が歎きはん方なく、同じ道にも赴くべきこゝちなりしが、父良久が武功によりて彼の五千貫の知行を巴之丞に給ひければ、君恩の辱きと、母遠山尼が健かなるとを力として、陸奥國牡鹿郡眞野莊につうり住みぬ。此の眞野莊といへるは、萬葉集第三卷に、笠女郎が歌に、「みちのくのまのの茅原遠けれど、佛にして見ゆといふものを。」此の歌新千載詠みたる名所にて、元亨、正中のあひだは、後醍醐天皇八の皇子、義仁親王の住ませたまひし舊跡なれば、昔忍ばしく、金銀珠玉を鏤めたる館を造り、榮華なにかにつけて、不足なくあかし暮しけり。かくて永和三年の事なりしが、淺間家の祖たる源師房、三百年の遠忌に當りしかば、同郡石の卷牧山の長福寺にて法養あり。當日は淺間の後室遠山尼參詣なし給ひぬ。そもく此の遠山尼と申すは、近藤平治兵衛盛正が娘にて、十四歳のとき良久に嫁し、十六歳にて巴之丞をまうけぬれば、未だ年は三十ばかりと見え、黒髪は束ねし儘にて切りはらひ、色ある桂にいや黒き袈裟かけたるは、實にこのよの人とも思はれず、侍女左右をかこみ、静やかに御寺に詣で給ひしが、頃しも春三月の事なれば、北上川袖のわたり櫻さき亂れけるを、あだに見過さんも本意なく、日の本の風俗にて、魚をもて祭るとかいふ遠忌なるに、まいて佛事果てて後は、櫻狩り暮しぬとも深き罪もあるまじと、未の上刻許りに長福寺を立ち去でつ、彼方此方を追遙なせば、水は淺く流れて清く、山は低く連なつて綠なり。欄

漫たる花の梢は、羅綺を刻むかとおどろかれ、渺々たる海水は、瑠璃を敷けりともいひつべし。近く住吉の神殿いよやかにと、のひ、遠く金華の奇峯霞のうちにあらはれ、眺望背に及べる所、歌人思ひを勞し、騷人筆を惱まさぬはなし。や、時うつれば、程なく開きし櫻のもとに暮うちまはし、破子小竹筒とり出でて、酒もや、たけなはならんとす折、侍女杜鵑花というて、琴ひきの上手を呼び給ひ、彼を琴の役と定め、須崎角彌とて未だ角なる門子に、鼓弓をすらせて合調なさしめ、大きやかなる女童の手ぶりよきを、二人まで選びて白拍子に打扮たせ憂世忘れといふ今様を舞ひ奏でければ、頭には翠翹金雀玉の搔頭あり。羅綺のうすもの白粉とまがひ、丹青蹕蹕といろどり、裾翻つて蘭麝を散らし、鶯の囀る如き聲して、「まづ春は花のもと、夏は涼しき川ぞひに、夜よし月よし秋たちて、雪のあさけのなよ竹に、とまる雀のちよとなく、憂世忘れておもしろや、うき世忘れておもしろや。」と唄ひければ、花見んと欲して、却つて花にや羨まれなんと、聞くもえならぬ調べに屬耳け、見もなれぬ舞ひぶりに眼かれせすうちまもり、一座鳴りをひそめて居たりけり。かくて日も西山に傾き今様もはて、角彌杜鵑花は幕の外にすべり出でつ。杯少時めぐりて後、星影土右衛門といへる家老後室に向ひ、はや御歸館を催し申すべし。」と、御前を立ちけるが、白紙にて封じたる、書に挟む柴折のかたちしたるものを、袂より取落しぬ。遠山尼何心なく披き給へば、幾多の文字あり。彼は鬚き

男とのみ思ひしに、さはなくて花に對せし詩歌にや、書い記せしならんと讀み給へば、土右衛門より侍女さつきに贈れる艶書なり。去る頃より數多く玉章を寄せぬれど、ふつに答へなき趣にて、人知らず袖は涙に朽ちなんと、阿武隈川の埋木にたとへ、空しく門に待ちあかしぬるは、立ちくされたる錦木に比し、狭布の細布胸あはずとも、一夜の情かけてよと、強ちに掻口説きたる消息なれば、わが身の上にはあらねど、胸は轟きのはしなくも、人や見咎めなんと懷中に深く納め、土右衛門が日黒みたる面して、嬋きさつきを戀慕ふは、山鴉とかいふ鳥の、此の花の枝を栖となすに等しかるべしと、心の底に笑ひもしつ、家の束ねともなるべき身をもて、猥りがはしき行狀を怒りもしつ、衣紋かい繕ひ、靜かに歩を従し給ふをり、土右衛門が聲して、「不義の曲者一寸も動くまじ、君に告げ奉り絞首を刎ねん。」などと、いらなくも呼びたてて、角彌さつきが髻をつかんで後室の御前にひき据うれば、二人が面は夕映の、花よりもなほ紅にて、鱈の脣にのる思ひしつ、さし俯向きて言葉なし。土右衛門かねていふ、「此の兩人過刻に琴鼓弓を合奏なすをり、眉去り眼來つて、稍情意相通するの面持、心得ずと思ひ侍ひしに、案に違はず御供乗物の裏にて、潛かに相語らふを某とくと見極めぬ。いか計らひ申すべし。」と、息まきていひければ、遠山尼打聞き給ひ、「妾世を捨てたる身にて、男女の情を述べんは、佛の御前におそれあれど、戀に三の差別あり、一は女の方よりかき口説き、一は男の方

より云ひ寄り、一は互に思ひそむる、是れを相愛といふ。譬へば落花心ありて、流水に氣色をそふれば、流水又情あり、落花を浮めて春の餘波を惜しむ、問ふべく落花流水のおもむきとなるや、流水落花のおもむきとなるや。されば互にいひ出づるとしもなく、深き中らひとなる。是れ三の別ちなり。其がうち女のかたより云ひ寄るはまれにて、男の方より強ちにかき口説き、近くは日本の神、遠くは三世の佛を誓ひにたて、あるは文して云ひ寄り、あるは言葉をとちめ、よしなき義理に絡まれて、女の心狭きより、思はぬ男に逢ひ見る事なきにあらず。若し此の兩人も今云ふ如くならんには、角彌にのみ咎ありて、さつきには深き罪もなし、夫れをして同罪に行ふは、縦ひ扱にもせよ僻事なり。いよいよ角彌が方より云ひ出でしにきはまらば、角彌をば首を刎ね、侍女さつきは其方に預けつかはすべし。」と宣へば、土右衛門大きに喜び、「やよ角彌、汝が方より侍女さつきに云ひ寄り、若し承引かぬに於ては、命をたつべしなんと掻口説きしならん、包ます白狀なすべし。」と責め問へば、角彌漸く顔うちあけ、「かくなる上は包み隠すも無益、某若氣の至りにて、さつきに不義をいひかけ、密通に紛れなし、今君の宣ひし如く、疾く某が首を刎ね、さつき殿の命助け給はらば、死しても御恩は忘れ申すまじ。」といふに、土右衛門さもありなんといふ面持して、角彌が頂髪引摺み、荒けなくも引きたつる。杜鵑花は何と云ひ解く言葉もなく、兩袖を顔におしあて、よ、と許りに泣き居たるが、斯くと見

るより恥かはしき事をも忘れ、脛あらはに走りより、纖弱き腕に角彌を圍ひ、遠山尼に對つていひけるは、「さ宣ふは妾が命助け給はんと、御慈悲にて侍るべけれど、人こそ知らね心のうちに、良人とさだめし角彌どの、罪科に逢ふを他眼に見て、後に阿容々々存命ふべき妾が心と思ひたまふや。そは御情なき御心なり。近曾月見の折柄に、不圖角彌どのを思ひそめ、所有神を誓ひにたて、書き送りし玉章は、數の羊の腹にもみち、牛の車につみてんばかり多なれど、館の法度に背かじと、にべなき答へに力なく、一夕廊の暗まぎれ、角彌どのの袖をひかへ、女子の口より恥かはしき事いひ出し、「いよ、承引き給はじとなら、潔く刃に伏し、蓮臺に待ち進らせん。」と、おどしの懐劍胸元につきつくるを、「やをれ短氣なる振舞せ。」とおし止め、元來實死ぬべき心ならねば、見かはす顔も互に春の心を包み、わりなき中となりてければ、妾にこの答はあり、角彌どのの命助け給ひ、妾を意の任に罪なはし給はば、三途川の水をむすび、死出の山の月も朗かにながむべし。」と、おくれの髪を搔きはらひ袷くつろけ、雪なす項をさし延ぶれば、遠山尼懷中より、過刻の玉章をとり出し、「兩人かくの如く死を争ふを見れば、いづれをいづれと分ちがたし、一定此の艶書を開かんには、事分明に知るべし。」と、土右衛門に渡し給ふ。土右衛門何心なく取上げしが、忽地面土の如く變じ、物をも云はず引裂かんとするを、後室手早に取上げ給ひ、金地の小やかなる扇をふりあけ、土右衛門が面を丁々と打ち給

ふに、角彌さつきを初め數多の侍女は、其の緣由を知らざれば、「こは重ねくの珍事なり。」と掌に汗を握り、空しくまもり居たりけり。後室なほ腹立たしき面持して、柳の眉梢をひきあけつ、聲振りたてて宣ふは、「一口に語ふを聞けば、善人ならぬはなく、眼に行状を見れば、悪人ならぬはなしとの常言宜なるかな。過刻に不意此の艶書を得て披き見れば、汝こそ却つて杜鵑花を搔口説き、承引かざるを遺恨となし、兩人が不義を見出し、角彌を罪に陥れんと計る事は、妾とくに心づき、汝に杜鵑花を預けんなど言ひしは、其方の心をひき見ん爲なり。思ふに違はぬ言葉のはしく、家の束ねともなるべき身をもて、かく猥りがはしき行状は、二人にまさりて汝に咎あり、分説あらば疾くいへ聞かん。」と、息まき荒く宣へど、土右衛門は唯頭をたれ、一言半句の答へだになさざれば、後室猶焦だち給ひ、「己土右衛門切腹申し付くべき奴なれども、佛詣の歸りといひ、櫻狩り暮す折柄、かかる珍事の出で來し事、街に洩れ、公に聞えなば、淺間の家の恥辱となれば、命ばかりは助けくれん、兩腰のみ彼に與へ、衣類上下引剥ぎて、早とく追放つべし。」と宣ふに、御供の若侍みな土右衛門を惡しと思ふ輩なれば、只小袖一重となし、手々に木の枝折り持ちて、「とく出でよ去れよ。」と追立つる。土右衛門はあなかまやといふ面持して塵うち拂ひ、若侍を睨み廻し、悠々と出で行くを、惡まぬ者はなかりけり。後室重ねて宣ふは、「角彌杜鵑花も家の法度を背きたれば、不便には思へども術なし、親兄

弟の許しをも待たで密通なし、主にさへ恥辱を與へしは、人面獸心とやいふべき、犬にひとしき行狀なれば、是れを汝が鏡にせよ。」と、侍女を呼びて料紙とり出さしめ、落散りたる乗物の戸に、墨黒く犬といふ字をかいつけ、靜々と立ち歸り給へば、二人は御跡にひき残り惘然として居たりしが、角彌倍と心づき、眉を擧めていへりけるは、「今御心ありけに此の乗物の戸に、犬といふ字を記したまひしは、彼の弓の末梢を以て、三韓の王の額に書きたる故事にもあらず、思ふに戸に犬をかけば戻るとよむ、たつ、たちも戸に因める言葉なれば、一度たち戻れといへる隱語にて、俗間に用ゐる文字なれど、機に臨みて我々に、知らしめ給ひしならん。」と、杜鵑花と手を携へつ、跡を慕ひて追行けば、遠山尼はとある松原に駕籠を止め、春の夜には似氣なくて、五けき月を眺めつ、物思はしき形勢に見え給へば、流石二人は面なくて、御前に行きもやらず、松の樹林に月の小闇きを便り、うち潛みて居たるを、遠山尼かくと見そなはし給ひ、潛かに腰元を走らせ、二人を乗物の前に招き、涙と共に宣ふは、「星影土右衛門が奸惡にて、兩人が不義分明しき事におよびしは、歎きてもせんなし、殊に侍女さつきは、幼き時より妾が側にありて、十種香具覆は手なれたらんが、耕し草きり苦しき鄙のたづきをば、屏風の丹青繪に見しのみにて、賤の小手巻くりかへすは、星へ手向の絲なりしも、今日はわが身の上となり、さぞ便りなう思ふならん。角彌とても弓射太刀あはする術は熟くすべけれど、活計の道

には疎かるべし。縦ひ幾多の辛苦なし、往來の人の袂にすがり、賤がふせやの軒に傍徨み、一錢二錢を乞ひてなりと、夫婦なかよく添ひ遂げよ。孟子とかいふ書に、和したるを琴瑟とほめ、不和なるを易には反目ときらへり。古代の涙をもつて竹をそめ、異朝にゆく船を慕ひて、領巾塵山に石となりしも、外に男のなきにあらす、わが思ふ人しなればなり。其方ゆるに、角彌は武士の道さへすたりにたれば、一點も貞操をなそこなひそ。過刻に此の一條いひ聞かさんとは思ひしが、日暮れて潜かに妾が心をあかさんと、其の折は態と情なくもてなして、一度立戻れといふ隱語をおくりしも、解けてぞぬる、薄氷の、薄き縁と思ひなせそ。よき一對の夫婦なるに、土右衛門が眼にふれざるさき、妾仲立なさざるこそ後悔なり。僅かなれども是れを活計の本錢となし、又くる春の花を待ちてよ。」と小判百兩餘りもあらん、服紗包を兩人が前へ投げやり、乗物いそがしたて、館をさして歸り給へば、二人はなかく言葉はなくて、御後を伏拜むをりしも、初更の鐘聲殷々と響き、松間の花霏々としてふりかゝり、再び故郷へ歸るべき、錦の衣となりつと心に祝ぎ、互にしどけなき帯ひきしめ、何方ともなく落ち行きたり。これは扱置き爰に又、眞野の莊より一里ばかり東南、蛇田村といふ所に、團一齋といへる茶人あり。若年の時より茶事を好み、はや年も五十にかたぶきて、彌近郷の若人、彼が茶法に熟したるを聞き及び、茶を嗜む者一齋が門に入らざるはなかりけり。淺間巴之丞良治も彼を師

とたのみ、一齋はしばく、淺間の館に交加ひ、此の日も後室遠山尼、もの詣でなし給ひければ、良治徒然を慰めんと、消息して一齋をまねき、一日茶會を催し、漸く夜も初更のころほひ、一齋に暇をたびてけり。かかりしかば一齋は、巴之丞が從者二人を將て、常よりは足の運びもせはしく、宿所をさして急ぎしに、蛇田の村口、子育地藏の前を過るをりしも、俄に東風烈しくおとし來り、豚の形したる狂雲頭上におほひ、春雨一とほり降りいでしが、遠方の山の端には、なほ月の光さへさして、小止むに程もなきおもむきなれば、彼の地藏堂に憩ひぬ。此の時おくり來りし從者のいへらく、「一齋主には夜更けて一人、館より歸り給ふ事數多なるに、今宵に限り我々を、俱し給ふは何等故ぞ。」と問ふ。一齋莞爾み、「家君かねて折木根の建水を尋ね給ひしが、此度不意きかたにて、彼の器を賣拂ふ者あれば、今日その事を申し上げしに、「則ち贈ひ來よ。」とて金百兩たまひぬ。さるからに夜も更けぬれば、「供人を將て參れ。」とや仰せしならん。」と、物がたりなす間に、雲は四方に吹きちり、弧月半天にあつて、五けさは眞晝の如く、森知る鳥、栖を迷ひ、花の梢に勻やかなる露を含めるさま、心ゆく眺めなりければ、二人の從者に對ひ、「夜も既に更開けたり、我が家も早ほど近ければ、とく歸りね。」と暇とらせければ、下奴の習ひにて僅かの道ながら、強ひて一齋を送らんとはいひも出さず、大きに喜べる様して一人がいふ、「われ火爐に除醜醜をかけ置きたるが、爛や徹りけん。」と吐てば、一人がいふ、

「我も干鯛と萩華を、小架の小隅に置きたるを、近曾來る野良猫の、唾へ去りけん。」と吐き、足早に歸り去りぬ。一齋ひとりごちていふは、「夜は四更に向々とす。多の金を持ち人なき道を走らんは、火を懐にして、薄氷を踏む心はあれど、かく寒々しき姿にて百枚の金あらんとは、神佛も知り給ふまじ。されば後安きは常にしも變らじ。」と思はず地藏堂を顧み、呵々とうち笑ひ、「無益自問自答に、佛は早知り給ひき。南無地藏大薩、必ずしも此の事、人にばし語り給ふな。」と戯るれば、忽地石佛に聲あり、「我は云はざれども汝云ふ事なかれ。」と、微妙の聲にひきかへて、だみたる聲様にて宣へば、一齋は呆れはて、軒もれ月に、熟堂内を透し見れば、一箇の惡漢船後光のうしろに隠ろひ居て、腰刀ぬくよと見えしが、物をもいはず一齋に切つて蒐る。一齋もゆるある武士の果てなれば、心得たりと腰刀を抜合はせ、少時が程は戦ひしに、嗚呼奇なるかな妙なるかな、曲者が姿は煙の如く消えうせ、只刀のみ空中をひらめき、或は車にとり青眼に構へ、其の自在なる事人あるよりも速かなり。一齋此の爲體に呆れ果て、劍法や、亂れければ、いつの間にか肩の尖に切りつけられ、鮮血さつと迸り、尻居に撞と倒れふす。時に懷中の財布、自ら空中を飛び行けば、一齋周章てて追はんとせど、初度の痛癢にたつもたち得ず、刀を杖ににじり出でしが、苦痛に堪へずやありけん、叫苦と一聲叫ぶとそのまゝ、俛しにこそ仆れけり。こゝに又一齋が下奴切平といふ者、主人の歸りを待ちわびつ、門首

までたち出で、思はず月の近かなるに漫行きしつ、蛇田村をたち離れければ、遙かをちかたに主人の聲して、「曲者やらじ。」と叫び、又は刀をうちあはする音、幽に聞えしかば、喘ぎく驅け來たれど、はや一齋は朱にそみて倒れ伏し、側に幻の如く人影あり。這奴曲者と切りつくれば、地藏堂の因果車を刀尖さがりに切割つたり。此の時何方ともなく、「やよ下郎、汝も殺すは輒けれど、金なければ殺すも益なし。我を仇人となひこそ、金こそ却つて離人なれ。」と、いふ聲は耳近く聞ゆれども、曾て姿は見えず。なほ彼方此方逍遙なすとおほしく聲はりあけつ、「君をまつ夜は夜さへながき、髪のおぶらを八皿たてぬ。」と曲子をうたひ、板金剛ふみならず音のみ聞ゆれば、それを便りに切りつくれど、絶えて刃にさはるものはなかりけり。

第二 一齋末期に茶事の奥義を傳ふ

團一齋が妻宿木といひしは、往年身まかり、家に二人の女子あり。今茲姉忘貝十三歳にて、妹寄居蟲は十一歳なり。窮巷の中に生まれ、蓬草のもとに成長ると雖も、容姿いと艶妖にて、心さま伶俐しく、そのうへ孝順更に比なかりければ、一齋も一方ならず愛で慈しみ、彼等に回僻める心やいできなんと、後妻をば娶らず、此の年頃寡住にてくらしけり。此の夜も姉妹の少女は、一齋が常ならず、辰

りの遅きを氣遣ひ、門に望み巷にたちて待ちわびしが、はや真夜中も過ぎぬれば、今宵は淺間の御館に宿し、明の日やかへり給ふならんと思ひとり、漸く枕をとりて眠み、半時ならざるに起き出でつ、牀を拂ひ爐火を扇ぎ、やをら障子をおしひらけば、半ばは天明けなんとして、半ばははまだ明らかならず。花影残月をとめては、紅錦に明鏡を包めるがごとく、曉星まれにして數あるは、暗き夜に螢の光を見るに似たり。蝶やどりて花粉をとめて、鶯眠りて柳金を借る、紫だちし横雲に、三つ四つ二つ明烏の飛びゆくは、清女が筆すさを思ひ出で、鶏鳴いて曙光寒きは、岑參が詩もかかる光景や作りしならんと、漫ろにながむる折しも、狂風颯然としていたり、庭木の櫻吹きちらし、忽ち地上に錦茵をはり、軒端近く羣鴉咬々と鳴きて、單ら悲しみを訴ふるが如く聞ゆるに、姉妹は何とやらん胸うち騒ぎ、外の方を見れば、一齋が従子奈古平といへる者と、下奴切平兩人にて、手負ひたる一齋を地藏堂の扉に乗せ、縁の端に昇きもて來たれば、未通女姉妹は此の形勢を見るよりも、夢とも現ともわきかねて、一齋にすがりつき、「扱もうたてき御姿や、かくむごたらしく何者が切りたるぞ。やよ切平、泣いて居たとてわかるにあらず、はや疾く容子を語るべし。父上心をたしかに持ち給へ、さのみ深痕といふにはあらず。」と、言葉は健氣に聞ゆれど、年端もゆかぬ姉妹、右と左に立廻り、手負の脊を撫でさすり、忍び涙にむせ返るは、哀れといふも餘りあり。切平も涙かき拂ひ、初め

終りを聞ゆれば、奈古平暇しばた、き、「我も渡場の長平太が許に賭して居たりしが。」と失口らし、側をかへり見て大きにおどろき、「否さにあらず、賭なせと長平太がす、めしが、日頃仲父者の意見と思ひて、さまんぐにいひ賺きて其の場を逃げ、村はづれの地藏堂の前を通りしに、仲父うへには此の爲體、切平は腹きらんず、趣なれば、漸うにいひ和め立ち歸りは歸りしが、はや其の深痕にては、臨終に間もあるまじ。貯へ置きたる金あらば、われ等に譲る遺言をよく聞き置きて給はれ。」と、しばく、噎りあけつれど、涙さらに出づべう様もなければ、手拭にて兩眼を確とおさへ、聲のみ大きやかになし、只管歎く趣にもてなせば、二人の少女は實と思ひ、「日頃は只邪見とのみ思ひたるに、奈古平どのさへあの如く泣き給ふに、爹さま死んで下さるな。」と、かよわき力に抱き起せば、一齋は二人が肩を杖となし、悪びれもせず座敷に居なほり、苦しき息をほつとつき、「過刻には我すでに人事を忘れ、其のま、死ぬべく思ひしが、今又心清々しくはなりたれども、免ても角ても此の痕にては、存命ふ事は思ひもよらず、一通り云ひ置く事、姉も妹もよう聞くべし。二人ともいと幼き時なれど、朦朧に覚えあるらめ、往んじ應安三年、われ皇都に赴きし折柄、淀の渡の夜船にて、喧嘩かひとやらん悪棍同子喧嘩を仕出し、われは二人の娘を連れ、漸くその場を逃れ出で、心づきてよく見れば、一人は我が娘にあらず、宿所を問へど片言のみにてわかちがたく、仕術なう此の奥州に連れかへり、姉

忘貝が名にゆかり、しばし此の家を宿かりの、立ちかへる事もあれかしと、すぐに呼びたる妹のやどかり、其の時尺なし帯に結び居たる、笹鶴錦の守袋、貞治六年三月三日誕生の女子、宇の葉と記せし躰帯と、一寸八分の正觀音、此の二品を證據となし、實の父母に再會の期をまつべし。」と、懐中よりとり出さんと、心涸れば手しびれて、思ふが儘ならざるを、忘貝見る目もいぶせく、手を取添へて出さするに、一齋又いひけるは、「われ過刻に曲者と切りむすびしが、忽地形の消え亡せしは、これ隱形の術とおほし。さすれば彼の妖術をほどこすものは、わが仇人の餘類なり、かく聞ゆるとも若し年を経て回會はば、女のかよわき小腕にて、みだりに親の仇人などといひて、返討にな討たれそ。われ會て聞ける事あり、彼の幻術を行ふとき、鏡をもつて其の人を照らせば、妖術忽地くじて本形を現はす、夫れ鏡は元無心にして明らかなれば、鬼魅妖怪も正體をつゝみ難し。昔偶豪成、張蓋踊の二人、蜀の雲臺山の石室に思ひをこらす。忽地黃絹葛巾の道士あり、壁上にかけたる鏡中を見れば二匹の鹿なり。又伯夷といふもの、林慮山の下の野亭に宿す、前面に十餘の人來る、鏡をもつてこれを見れば則ち羣犬なりと。事は援神記抱朴子に詳かなれど、我危急に及びて此のものなければ如何にとも術なく、斯くやみくと深痕を負ひぬる事の口惜しさよ。」と、いふ言毎に息きれて、既に命も終るべう見えつるが、慨然として眼を見ひらき、二人が顔をまもりつめ、潸然と涙をおとし、「わがな

からん後の心が、りは、二人の少女の事のみなり、是れより彼等の力となすは、奈古平切平兩人なれども、切平が誠心に引きかへて、奈古平が行状宜しからず、とくく心をいれかへて、二人の娘を世に出し、人がましきものの妻ともなさば、縦ひ我野外の古墳となつて、舊苦をはらはず一華を手向くる人なくとも、夫れにこしたる法養あらじ。焼野の雉子夜の鶴、まして萬物の靈たる人と生まれ、子を思はぬ者のあるべきか。女めかしき周諄ながら、我が老いの來るをば知らず、早く月日もたてかしな、二人の娘を成長させ、似合はしき婿取つて、初孫の顔見んと、思ひし事も夢の夢、縫ひかけて居る結目の小袖、著せて喜ぶ顔さへも、見ずに死ぬるが淺ましや。」と、はや目も見えずなりければ、苦痛を忍びて撈りより、右と左に抱きよせて、「姉よ妹よ、やがて婿とり嫁いりせば、貧しき富めるに關らず、心に叶ひし夫を持つて。えては黄金に目がくれて、見にくき男を夫となし、年を経るに従ひて、他の夫の見めよきを傾羨める心より、不良事の出で來るなり。斯くなる事と知るならば、近曾ねだりし摺箔の、帯をも買つてやるべきに、賤しきものには似氣なしと、叱りしを腹をもたてず、莞爾笑うて居た時は、口へこそ出さねど、心に賞めて居たりしぞ。其の手函に金あり、同じ様なを二筋買ひ、又それ彼と姉妹してばひあふな。」と、涙と共にいひ諭せば、二人はいと悲しくて、「どうぞ死んで下さるな、痛ましの父上や」と、聲も惜しまず泣きにけり。一齋漸く顔うちあけ、「嗚呼歎くは愚癡の至

りなり。無益事を語らんより、息ある中に言はで叶はぬ大事あり。淺間巴之丞良治君より、預け給ひつる金百兩を失ひたるは、悔いてもせんなきわが過ちなり。彼の君ふかく茶事に心を委ね給へど、未だ奥義を傳へ申さず、土藏に納めおきし、唐木の手函の裏なるは、則ち茶事の傳書なり。彼の二卷の巻物を汝等に傳へ置けば、せめてもの分説に折を見て、良治君に差上ぐべし、はや我も終焉の期と覺ゆれば、此の世の餘波姉忘員が手前にて、薄茶一服所望せん。」と、いへども答へなき居たり。一齋はなほ氣をいらち、「我も元來は武士なり。武士の娘とよばる、者が、小兒の如く泣いて居て、人にばし笑はれな。早疾くく。」とせりたてられ、せん術なげに爐に向ひ、とり出す服紗の紫は、佛の迎ふ雲のいろ、末期の水の建水を、見るに照れ心きえ、茶酌とる手もふるはれて、たぎるや釜の夫れよりも、涙の玉のちりまさり、何ぞと人の問ひし時、露と答へてきえなまし。その生親男の言葉は、背かじものと漸うに、薄茶一服たて終れば、一齋は撈りより莞爾として茶椀をとりあけ、一口呑むと見えつるに、卒然として息たえぬ。嗚呼これいかなる日ぞや、于時永和三年春三月某日なりけり。二人の少女は亡骸にとりすがり、「爹々なう、妾もともに黄泉とやらに連れてたへ。」と、聲のかぎり泣きければ、心弱くてかなはじと、切平は涙をかくし、さまざまにいひ慰むるに、奈古平も欠伸の涙を幸ひと、周諄めかしく何やら喃々とつぶやき、かくてあるべき事ならねば、かたばかりの野邊送り

いとなみ、往年世を去りし一齋が妻、宿木が墓のかたはらに葬り、極浦新月居士と法號し、姉妹はいと信だちて、七日々々の佛事も懇に弔ひけり。二人の少女の心の中、悲歎いばかりならん、推し量り知り給ひね。

浅間嶽面影草紙一之卷 終

浅間嶽面影草紙二之卷

編者 柳亭種彦

第三 忘貝寄居蟲修行者が物語を聞きて羽黒山に赴く

其ののちは事なく過ぎぬれば、記すべき事なし。かくて永和五年改元ありて、康曆にうつさる。此年春三月某日は、一齋が三回忌に當りしかば、忘貝寄居蟲は、速夜より父母の墓にまうで、苔を拂ひ華を供じ、徹夜塚の前を去りやらず、靈前に細々許なる燈籠をかけ、いまそかりし時嗜める品を机上にそなへ、香をたきて身をきよめ、念佛唱へ居たりしかば、鉦鼓の音も澄み渡り、いと悽々しく聞えけり。春宵短を苦しむと、詩にもつくりし如く、春の夜の明けやすく、程なく東方白みわたり、清風吹き來つて新柳をはらひ、一聲の鶯鳥高枝にありて、花さへ雪とふりかゝれば、又も見んと詠みし古歌にはひきかへて、今頃は斯くなりし斯うなりしと、父の最期を思ひやり、不慮に物悲しく、袖の涙は夜の間に置き添ふ露よりも繁く、かき曇る聲はりあけて、一心不亂に南無佛々々と唱名し、

妹は關伽の清きを汲み來らんと、花桶を手にさけつ、庫裏のかたへ行きなるとなす折しも、家に留め
おきつる下奴切平、あわたしく馳せ來り、一封の書簡をとり出で、涙さしぐみて言葉さへいださね
ば、忘貝は何事やらんと打驚き、佛前の燈籠をとりて讀み下せば、故郷に残し置きたる切平が老母、
病に臥して死に向々とせせば、早く身のいとまを申し乞ひ、國元にたち歸るべしといふ消息なり。忘
貝はわが身の上にたくらべつ、彼が心づかひを思ひやり、涙はふり落ちていふ事をしも知らず。切平
漸くいへりけるは、「君達もしろしめす如く、我が故郷は河内國高安といふ所にて、いとはるけき旅な
れば、頼には立ちかへり難く、未だ年も若うるます君達を残し置き、覺束なくは候へど、老いたる母
の病急しと告げこせしに、赴かざるも不孝なり、此の所思ひ分けられ、暫しの暇たびてんや。」とい
ひければ、忘貝寄居蟲は、心細さのいや増せど、止むるにも止めがたく、彼が心にまかせぬ。切平は
大きによろこび、行装もそこくに調へ、急ぎ故郷に赴きけり。かくて姉妹の少女は、其の夜も塚
のかたはらに通夜なし、いと信やかに見えければ、近郷の農夫、其の子の不孝なるを誠むるには、ま
づ彼等が身の上をかたりいで、姉妹の孝順を詈りたる曲子につり、苗植うるの折は、かならずこ
れを唄ひけるが、其の歌は今もなほ村翁の唇上にありとなん。さても其の後姉妹は、ひたすら父の横
死をなけき、何卒仇人を探し出し、最期の無念を晴らさんと、神と佛に祈れども、夫れにひきかへ一

齋が甥奈古平は、酒に酒れ色に耽り、夜は夜もすがら賭して、半時も家にあらず、其がうへ此の頃
は打續きて幸なく、金あまた失ひ、己が家をば賭の本錢に賣りなしかれど、それさへ朝日向ふ春
の雪の、數日ならざるに消え失せ、忘貝が許に食客となりて居たりしが、身に半錢をも留めざれば、
鬱々として更に樂しまず、斯くてはいつか春めかしき事もなかるまじと、一日同子の悪棍を語らひ、
鄰村なる稻荷の社に掛け置きたる、神樂の面を盗みきたり、如此々々計らふべしと點頭き合ひ、日暮
る、をまちにけり。此の夜姉妹の少女は燈火の下に、古き物語の書を披きて居たりしに、めりくと
音して板戸をこち放ち、小山の如き大の男つと入るを見れば、面は正しく鬼女なりけり。呵と叫んで
逃げいだせば、異類異形の者ども、行くさきに立ちふさがり、會釋もなく二人の少女を、高手小手に
いましめ置き、衣類茶器雜器臥具のわかちなく、有りとあらゆる物を土藏より運び出すに、二人は淺
ましくも悲しくて、恐る／＼その人を見るに、身には袖なき羽織をうがち、泥にまみれる草鞋をはき
たるは、顔に似氣なき鉦目命なり。又破れし紙雨衣を身に纏ひ、葛籠を背負ひて立ち出づるは、猿田
彦の面に似たり。狼狽へまはる鐘馗大臣を、然かせよ斯くせよと叱るは、却つて一角三眼の鬼なり。
蛭子は縁よりふみはづして腰をぬき、白髪翁の肩にかかり、あるは眼鼻のゆがみたるもあり、或は
鍋の炭をもて、面をそめ畫きたる崑崙奴の如きもあり。すべて山海經にも洩れ、萬國の圖にも見えざ

る盜賊等、半時ばかりに塵も残さず盗み去れば、二人は活きたる心地もなく、聲たてまく思へども、手巾をもて口を包みたれば、それさへ心にまかせず、只涙のあるかぎり、泣き居るばかりなり。かくて奈古平は神樂の面にて顔をかくし、心のまゝに姉妹が、衣類雜器を盗みさり、知音のかたに預け置き、何氣なきおももちして、曉頃立ちかへり、此の光景を見るよりも、大きに驚きたるおもむきにて、急ぎ縛めをひき解き、忘貝が泣くくものがたりなす初め終りを聞き果て、拳を握り齒がみをなし、「われ今宵家にあらば、縦ひ百萬の強盗込みいるとも、よも活けては歸すまじ」と、立つつ居つ身もだえなし、少時ありて涙ををさめ、「嗚呼これ皆御身等が、宿世つたなき故なるべし、命さへあらんには、又世に出づる事もあるべきに、深く歎きて病にな臥し給ひそ」と、様々にいひ慰むれば、二人の少女は奈古平が所業とも夢知らず、漸うに鼻うちかみ、取り散らしたる雜器の裏に、茶道傳授の巻物を入れ置きつる匣を取り落して、盗み去らざりしかば大きに喜び、折を見て良治君にさし上げんと、一卷づつ、姉妹が守袋に納め、夫れを頼みに數日か過ぎぬれど、今年巴之丞良治は、皇都守護の在番に赴き、此の國にあらざれば夫れさへ心にまかせず、只旦暮過ぎゆきたる父母の戀しくて、袖につゝ、む涙より外に、慰む方もなかりけり。斯くてある夕暮の事なりしが、一箇の修行者忘貝が軒に傍徨み、「これは金華山に赴く修行者にて候が、思はず道に踏み迷ひぬ、何れの方を望みてや、旅店

ある大路に出づべき、教へ給はれ。」といひければ、忘貝答へて、「此の所は蛇田村と申して、街道といふにもあらねば、はかしくしき旅店も候はず、參らす物もむさくろしく、夜の衣は薄けれど、今宵は此の家にて明させ給へ。」といひければ、修行者は大きに喜び、笈をおろし草鞋をとり、まづ佛壇に向つて廻向なし、座定まりて様々の物語なす序に、修行者のいへるは、「われ此のごろ出羽國に赴き、月山湯殿山に參詣なし、羽黒山に登山せんと、田川郡鶴が岡の西南、手向村にやどりしに、土人我を止めていへらく、「近曾此の羽黒山に強盜山寨をかまへ、財寶を奪ひ人民を害し、日暮るれば怪有の幻術をほどこし、霧をふらし雲を起し、危急に臨めばわが姿を隠すを以て、國司も制する事能はず。」と物語りし故、思ひを空しく麓より立歸りぬ、これわが目のあたり見聞せし所にて、臆氣なる事にはあらず。」といひければ、姉妹は眼と眼を見合はせ、心の中に大いに喜び、見佛間法の思ひをなし、夜明けぬれば厚く布施して修行者を歸し、忘貝寄居蟲に向つていひけるは、「妾兼て父の怨讎を討たまく思へど、その手が、りを得ざれば、月日を徒らに過せしに、昨夜の修行者がいひし、羽黒山の盜賊こそ父が最後の物語に、恰も符契を合はすが如く、彼の隱形の術を行ひて、父を討つたる曲者ならん。女のかよわき力なれど、猛き心はなど武夫にも劣るべき、そなたとともに彼の山寨に赴き、諸國をめぐる修行者の、道に迷ひし體にもてなし、色をもつてたぶらかさば、討ち得ざる事はよもあらじ。よし

仕損じて殺されなば、一念怨鬼となつて、共に冥途へ連れ行かん、かかる際に及びては、命をもなにかせん。」と、小棲けしくひきあぐれば、寄居蟲は答へもなさず、側にありあふ脇差おつとり、鞘ながら討つてかゝる。忘貝いそがはしく身を轉らせ、火爐にかけたる自在の竹にて丁とうけとめ、「寄居蟲そなたは狂氣なしたるや。」といふに、寄居蟲莞爾とうちゑみ、「姉上には兼てより忍びく／＼に稽古なし給ひたる、手槍の手練を試み侍るになん。」と答へければ、忘貝いふ、「こは新好らしき其方の言葉、いでや互に手槍小太刀の術を比べんといふより早く、妹の太刀を跳ね返し、自在の竹を假の竹刀、手早く抜いて、立ち對へば、妹も太刀を青眼に構へ、すきを討たんとつけ廻す。姉がいらつて突き出す竹刀、危く妹が肩をかすり、妹が切り込む太刀先を、沈んで拂へば又つけいり、蹴かへす裾は秋の紅葉に異ならず。花の顔ばせ朱に變じ、少時争ふ其の光景、花に小蝶の狂ふが如く、柳の風にもまる、に似たり。かかる所へ日毎午時には、必ず来る花ひさぐ老婆、門首に傍徨み、「花めせく／＼。」の聲に驚き、二人は笑ひに紛らして、忘貝は帯をとつて塵かいはらひ、寄居蟲は火爐に柴を折りくべつ、空知らざる面持なして居たりけり。

第四 辛崎の社にて巴之丞初めて瞿麥に逢ふ

忘貝寄居蟲は、奈古平をさ許りの悪棍と努知らねば、「事の顛末を聞えあけ、羽州とやらんに俱して行き給へ。」といひければ、奈古平は仕果せぬと心に喜び、家財を賣りなして路金に宛て、姉妹を將て出羽國へと志し、遠田玉造を経て中山龜割山に到る。此の所は奥羽の境なり。夫れより尾花澤舟方をも打過ぎ、最上川にそひ乾へと行きぬ。是れなん否にはあらぬ稻舟と詠みたる名所なれど、大望ある身はかかる詠めも徒らに見なし、猿鬮峠を越えなんとすれば、右に鳥海山綿々と連なり、左に月山巍々と聳えて見え渡るに、我が尋ぬる仇人は、彼方ならめと心嬉しく、ゆき／＼と鶴が岡に到る。此の所は出羽國田川郡羽黒山の麓なり。幸ひ手向村といふわたりに、奈古平が些との知方ありければ、彼の者を頼みて膝をいるべきばかりの空房を買ひ求め、二五日すまひけるが、一夕忘貝寄居蟲に對つていひけるは、「我々蓄へも多からぬ身をもて、いつまでか斯くてあるべき、畢竟此の國に徙りしも、仇人を探ね求めん爲にしあれば、女ながらもいでや武夫の、心より起してよ。」といひ諭すに、「妾もさこそ思ひ侍る。」と答へして、次の日未旦に起き出でつ。奈古平をば家に残し、心強くも唯二人、いづこを夫れとしら雲の、山また山にわけのほるは、危くも健氣なる未通女なりけり。抑羽黒山と聞えしは、人皇三十三代崇峻天皇の御母、蘇我の稻目の娘小姉君の開基にて、祭る所の御神は、伊弉諾伊弉册尊二柱の御神とも、又は羽州九神のうちなる、伊須波明神を羽黒権現と崇めたてまつるとも、又

は稻倉魂とも申す。夫れ當山は羽州三高山の其の一にて、月山湯殿山並び立つて鼎の如く、麓より本社に至る山路六十二町、本社より絶頂まで十九町五間一尺、未だ此の頃は登山なすもの稀なれば、靈場徒らに鬼魅魍魎の栖となり、煙翠色を埋みて千里に連なり、日晴嵐を射て一方に聳ゆ。危嶺は箕を學んで風木の葉を簸、懸泉は布をたれて水聲礮を打つ。峯崎嶇しくして劍をたてたる如く、道廻りて羊の腸に似たり。且に牧笛雲を穿つて過ぐれば、夕に樵歌月を帯びて行く。或は塊石頭の上にありて、蹲る虎かと驚かれ、又は老松足もとに横はりて、蟠る龍ともいひつべし。頭をめぐらせば山嶂遠うして重疊、耳をそばだつれば猿猴鳴いて寂寞、數株の松柏森々と茂り、晝も日影をもらさねば、苔滑かにして常に雨の如く、暗き事月なき夜に似たり。かく崎嶇しく怖ろしき道を厭はず、櫻谷もうち越え絶頂に至れる折しも、樵夫の翁遠くめぐれる谷陰より、恣に歌をうたひ、頓て二人が前にすゝみ來り、莞爾として笑つていへらく、「よいかな姉妹の孝女、かく千辛萬苦して、父の仇人をたづぬる事。さりながら汝等は宿世いと拙く、薄命しき事たとへば桃の花の如し、後に實を結びて美味人を喜ばすといへども、花王と盛り一時ければ、詠むるもの少なし。當山は稻魂神の跡垂れ給ふ靈場にて、かりそめにも盜賊の籠るべき山ならず。汝等が尋ぬる仇人といふは、今津の國にあり、東國は疾くに立ち去りたり。さりながら彼隱形の術をほどこし、女の手腕にてたやすく討たるべき者に

あらず。今都に赴きたりとも無益なり、三年は此の地に足を留め、時いたるを待つべし。」と、いふ聲は松風に残り、谷川の水音幽に響くのみにて、何處に往きけん翁の姿は、かいくれに見えやらず。二人は大いにおどろき、夢かと思へば夢にもあらず、現と思へど現にあらず。しばしあつて忘貝のいふは、「もしや彼の翁も盜賊の餘類なりやと思へども、我々が胸中を指したる事、恰も鏡に物のうつるが如し。察する所當山の神靈現じ給ひ、われくくに力を添へ給ふなるべし。」と思ひとり、手向村にくだり、數月此の所に住ひて、よりく仇人の在所をさがし索むるといへども、元來彼の修行者は奈古平が同子にて、先頃奈古平が盗み取りつるものを、大勢に分ちあたへず、此の地へ逃げ來る序、一人の悪棍を修行者に打扮たせ、羽黒山に隱形の術を施す者ありと言ひ聞かせ、姉妹を當地に俱してきたりしは、頓て遊女に賣渡し、金を得んとの下心にて、皆あとなき空言なれば、羽黒山に盜賊こもり居るよしは、誰あつて知れる人もなく、いよく彼の山にて見えつる翁は、神靈にうたがひなしと心に敬ひ、彼の翁が言葉にまかせ都へは登らず、ひたすら切平が歸りをこそは待ちわびけり。却説淺間巴之丞良治は、康曆二年彌生ばかりに、京都在番も果てければ、いざや奥州にくだるべしと近江路にさし蒐り、名にしおふ湖水に連なる、八つの景色も見まほしく、まづ辛崎の神社へ詣で、湖水の汀にたちいでて、遠近を詠むれば、遠水漠々として天に連なり、滿浦の楊柳綠を吐き、風起つて細浪魚鱗を刻

む。蒼々たる老松は、青き傘を開きし如く、「是れなん一ツ松てふ、奥州の果てまでも聞えたる、松ならめ。」と言ひ合ふ中、菊が濱の方よりも、下仕走孀など附き従うたる女車、静やかに櫟らせ來り、神前に榻をすゑさせ、立ち出づる女を見るに、年正に二八ばかり、そのいでたち如何になれば、淡く粧ひ強ちに粧はざれども、天性の顔色玉の如く、眼には秋の水を湛へ、口には春の花を開かせ、柳の髪丈と等しく、櫻襲のうすらかなるを、つほをらすうちかけたれば、裾はあるまゝ、にうちひろがり、もえたつばかりの緋の袴をふみく、み、蝶鳥の要うちたる杉横目のひあふぎ、のどやかに打挿し、豫て設け置きたる筵道を、静やかに歩行める容、もし此の人に比べんには、花も却つて色なく、雪も却つて黒しとやらん。彼の小野小町が再び此の世に來りしにあらすんば、天津少女の假に下界へ下りしにやあらん。實に花に言葉ありて、柳の活きて働ける様なり。巴之丞が侍ども彼の人を見るより、魂飛んで人事を知らず、「扱も艶なる女性かな。」と、袖引合ひて姦しきまでいひ合ふに、巴之丞侍を制し、「こははしたなし。何れの姫君ならんも知るべからざるに、吾妻人は口賢なしと、都の者にな笑はれそ。若し無禮なる事あれば、淺間家の越度なり。」と、道を弓方に避けて立ち歸らんとすに、元來巴之丞も花車風流の男にて、顔形嫺雅なれば、彼の女性も過刻よりの、立振舞を憎からず思ひけん、女童を走らせて、巴之丞を神前に招きぬ。巴之丞怖るく、階をうち登るに女性巴

之丞が側近く居より「察するに吾妻男都がたの在番果て、故郷へ赴き給ふ道ゆきぶりに、當社へ參詣なし給ふと見るは、妾が僻目なりや。いざ酒一つ聞しめして、旅のうさをも忘れ給へ。」と、偏提掬子とり出でさせ、只管酒を勧めければ、巴之丞大いに驚き、「こは畏し、僕は無位無官の暴夷、天上雲の上人と、筵を連ぬべき者にあらず。許させ給へ。」と退出となすを、「少時。」と押しとめ、「君御名を名乗り給はずとも、淺間巴之丞良治君といふ事は、妾よくも知り侍り。御跡慕ひて参りしなり。」と、女童に銚子とらせ、一獻ほして巴之丞にさしぬ。巴之丞は不審しながら、杯をとりあけて酒半ばを飲みほして、膝の傍へ置きつるをり、彼の女性、「いで御看まらせん。」と、檜あふぎをつまをりて、香はしき墨すりながし、何やらん書きて巴之丞に贈る。巴之丞とりあけて吟ずれば、

勿念跡君雖者言相時

かの女かさねて、「君は此の歌を知召すや。」と問ひければ、巴之丞少時ありて、「勿念跡君者雖言相時何時知而加君不戀有牟。」此の歌は拾遺集に、題しらす人丸とて載せられたれども、其の元は萬葉集第二卷、柿本朝臣人麿が妻依羅の娘子、人麿と相別るゝの歌と覚え候なり。「といひければ、彼の女性扇をもつて、欄を丁とうち、「扱は思ふに違はず、和歌の道をも嗜み給ふと思ひ侍る。妾は或家の娘夏草と申す物なるが、恥かはしき事なれど、いつぞや清水詣での折から、不圖君を戀ひそめて、露忘

る、隙もなく、折を見て媒の端もがなと、一日二日と送る中、はや君には都を立ち出で給ふと聞くよりも、恥かはしき事をも忘れ、うつ、心に漸うと、御あと慕ひて参りしぞや、心やりに些か許りは答へ給へ、疎き人にもなけの言葉は云ふなれ。」と、強ちにかき口説き給ひければ、巴之丞も白地なるうちつけ懸想に、何と答ふべき言葉もなく、さし俯向きて居たりしが、少時ありて顔ふりあけ、「暴夷のむくつけき某へ、厚き心の仰言は、身にも餘りて不慮におほえ侍れども、我にも一人の母あり、君にも雙親ましますべし。されば互にたらちねに聞えて後、都をば霞と共に立つとも、秋かぜ吹かぬそのひまに、白川の關のあなたに御答へ申すべし。はや羣鴉塙にかへり、夕陽斜ならんとなせば、いざや御歸館を催されしかるべうもや。われも旅館に赴かん。」と、西東に相別れぬ。

第五 星影土右衛門幻術を以て巴之丞が矢をまぬがる

是れはさておき星影土右衛門は、奥州を追放たれてより、下總常陸を横行なし、さまざまの姦悪を行ひ、今は彼の地にも住みがたく、一先づ都へ赴かんと、廻國の修行者にいでたち、武藏相模のあひだなる、あすだ川原に行き暮れて、とある松の樹だちに紙帳をたれ、野宿して居たりしをり、外面のかたに何やらんさわがしきを、紙帳をか、けて五けき月に熟く見れば、坂東順禮と見えて、十四五歳

ばかりなる姦き女を、川ごしの悪棍ども十餘人、真中にとり圍み、一人がいふ、「所詮われくがつけ來りては、蛇に見いれられしも同じ事なり、かよわき力にあらがはずと、我と共に來るべし。大磯小磯なんどいふ、賑はしき花巷といふ所へ遊女に賣渡し、此の木綿の著るものも、錦の袂にひきかへて、油つけすのわら束ね、髪も艶ようなる上に、耳に早歌というて面白き唄を聞き、口に美味を食らひ、女童を二人三人ひき連れて、此の上の榮華はなし。はや疾く答へをなすべし。」と責め問ひ、「やよ白藏、我は先よりの長談義にて、口のすがなくなりつ。斯く事をわけて言ひ聞かせど、此の女ふつに答へなきは、若し啞子か聾ならんも計り難し、いで汝とかはるべし。」といひければ、一人がいふ、「今黒藏のいふ如く、此の艶なる顔ばせにては、花主にうけ出され、妨々とかしづかれんは忽地なり。まづ此方々向きて美麗しき顔見せよ。」と、飽くまでに嘲弄なすを、「少女は只頭をたれ、何と答へもなさざりしが、すつくと立つて二人が腕くびかい掴み、何の苦もなく投げ退けたり。」小女郎と思ひあなどりそ。」と、割木を以て打つてか、れば、柄杓おつ取り丁とうけとめ、裾を拂へば足をちどりに踏み違へ、水に閃く月影の、目に見えつれど手にとる事あたはず。さしもの大勢あしらひかね、無二無三に割木をとりあけ打ち蒐るを、はずみをうつて川へ投げこみ、或は松が根にて頭を碎きたるもあり。只一人の未通女に敵する事かたく、四方に颯と逃げ散りたり。星影土右衛門は少女が爲體を、面もふら

守り居しが、竊かに錫杖を引提けて、少女が後に立ちよるに、少女は先よりの働きに、身體や、
 勞れたれば、少時息をやすめんと、落ちちりたる柄杓とりあけ、川水を汲みとりて、咽をうるほさん
 となしけるが、後にうかふ土右衛門が姿、彷彿として水面にうつるに驚き、竹杖にしこみたる短刀
 を抜放ち、土右衛門に切つてかゝる。土右衛門は身を閃かし、錫杖を以てはつしと受けとめ、「やれ
 待たれよ少女、われは修行者の行きくれて、野宿なしたるにて、先の悪棍とひとしからず。まづ心を
 しづめ短刀を納め給へ。」といひければ、彼の女は、笑み、「實徳ある修行者にて坐さば、妾悪棍に圍ま
 れたる、危急を救ひ給はらん、其のをりは餘所目に見て、身體勞れし油断を見すまし、打ちかゝら
 んず光景は、一定汝も盜賊ならん。女ながらも力量を憑みての一人旅、斬らるゝものなら斬つて見
 よ。」と、又土右衛門にうつてかゝる。土右衛門莞爾と打笑み、「我も諸國武者修行を志す者なれば、
 汝如き小女郎相手には不足なれど、いで劍法を試みん。」と、錫杖に仕こみし刀ぬきもち、少時が程
 は切り結ぶ。時に向うの木陰より矢一つ來つて、土右衛門が肩の尖へぐさとなつ。土右衛門大にお
 どろき、向ひを估とうち見やれば、數多の武士眞一文字に走り來り、土右衛門をとり圍むありさまな
 れば、土右衛門は兼て設け置きつる、紙帳の内に潜り入り、悠々と鐘鼓打ちならし、念佛の聲高やか
 にこそ聞えけり。數多の武士紙帳のめぐりをとり圍み、手々に紙帳をひきさけば、奇なるかな鐘鼓一

つあるのみにて、今まで念佛の聲なしたる土右衛門が姿は、何地へ行きけんかいくれに見えやらす、
 唯惘然たるばかりなり。乗物かきすするさせ、半弓もちて立出づるは、是れ別人にあらず巴之丞良治な
 り。良治は牀几にかゝり少女に向つて言ひけるは、「今汝が戦ひし修行者は、元某が家臣星影土右衛
 門といふものなり。由縁ありて館をば、四年已前追放なす。然るになほ東國にありて、さまざまの悪
 逆なすよし、彼は殊に怪有の幻術をほどこし、姿をかくす事自在なりと聞き及びしが、巷説に違はぬ
 此の爲體、一定御身も彼か毒手に害されんが不便さに、乗物の裏より半弓を射かけし所、弓矢の徳に
 は彼も妖術を行ふ事あたはず、逃げ去りしと覺えたり。心得ざるは御身少女に似氣なき力量、これも
 不思議の一つなり、何處いかなる者なりや。」と、深切に問ひければ、少女答へて、「妾は丹波國の者な
 るが、由縁ありて實の父母は、いかなる者といふ事をしも知らず、まゝ子よすて子と疎みはてられ、
 辛うじて成長なせしが、其の父母さへも不幸にして、去年の冬一時に世を去り、孤の寄邊なう奥州
 の方に尋ねべき事ありて、僅かなる力をたのみ、女の身の恐ろしとは思ひながら、漸う此の處まで來
 りしが、計らずも悪棍に出で會ひ、斯かる品に及び候なり。」と言ひければ、良治かさねて、「我は淺
 間巴之丞といふ者にて、都がたより奥州へ下るものなるが、汝も彼の國に赴くとあれば、これ幸ひな
 り。共に俱して行くべきに、名は何といふやらん。」と問ひぬ。少女答へて、「初めにも聞え候如く、

まゝ子よすて子と異名のやうに言ひしのみ、定まれる名も候はずといひければ、良治うち笑ひ、「海士の子なれば宿も定めずといへる、古歌は聞きつれど、名のなき女は珍らかなり。はて何と呼ぶべき。」といふ折しも、雲間遙かに時鳥、一聲鳴き渡りければ、「幸ひなるかな今より汝をば時鳥とよぶべし。」と、侍に命じて厚く勞らせ、奥州さして下りける。

浅閒嶽面影草紙二之卷 終

浅閒嶽面影草紙 三之卷

編者 柳 亭 種 彦

第六 忘貝寄居蟲にかはりて花巷に身を賣る

喜びあり又悲しみありの古語に引きかへ、忘貝寄居蟲の姉妹は、憂への上に憂へを添へ、歎きの上に歎きを重ね、忘貝は康暦二年夏の頃より、病におかされ起臥さへ心にまかせず、食も一切す、まざれば、寄居蟲が歎き大方ならず、枕邊を離れず看病いとこまやかにて、神佛を心に念じ、若し姉が死すべき定業ならば、妾が命をかかりにたて、是非一度本復なさしめ給へと祈りしが、其の赤心や通じけん、九月末の頃より、些か病怠りぬれど、はかなくしく全快かるべき様も見えやらず。去るとし盗賊の奪ひ残せし雑器すら、悉く薬の料に賣代なし、まいて貯へつる金は、太陽にてらせる氷のごとく、木枯はしたなく吹きすすむ且にも、薄らかなる拾一重にて、鳥を追ひ柴をかり、細き煙の代となし、雪なす足も荆棘に破られ、土に塗れし筍の如く、盆に顔をてらし、水を油にかへてくしげづ

れば、いとめでたき黒髪も、枯野の薄に異ならず。されど姉姉が天性の艶しきは、煙中の玉にも比すべく、清きものはこゝろばせと、顔かたちのみなりけり。或時は寄居蟲、忘貝が病の怠りし間をうかがひ、往來の人の袖に縫り、一錢二錢を乞ひて、姉が心に叶ふべき食物を調へ、心遣ひのやるかたなさは、先に大人たちの著はし給へる物がたりに譲りて、詳には記さず。是れにひきかへ奈古平は、計策を施すべき期來りぬと大いに喜び、忘貝に藥を與へし醫師を、密かに語らひけるに、彼の醫師も金に眼なき愚者なれば、一日忘貝が病を訪ひ、寄居蟲を密かにまねき、さて言ひけるは、「姉上の病やうやく快き方に赴けども、多年の辛苦五臟を損ひ、氣より發せし病なれば、唯あるべき通りの藥にては、急に全快こそ、ろもとなし。人參犀角すべて高金の藥を用るなば、急度二十日の内には、心清々しくなるべし。」と語りけるに、寄居蟲は心やすからす思ひ、奈古平にしかくのよし物語りければ、奈古平は計策なりぬと心に喜び、「そは心やすき事なり、此の頃都方の花街に、遊女の口入なす男と、われ不圖相識となりぬ。御身彼の花街に身をうり、其の金をもて藥の料となすときには、姉が本復疑ひあるべからず。さはいへ幼き時より、束間側を放れやらす、姉は妹を憐み、妹は姉を敬ひ、杖柱とも頼みしものを、其方が身の代と聞くなれば、何として姉は藥を飲むべきぞ。こは御身と密かに語らふのみ、忘貝には露漏らし給ふな。われ人に倍して飯をくらひ、力はなみくの丈人ながら、金につま

るは世の習ひとて、言甲斐なき男なりと、御身が笑ひ給ふ所も面なし。」と、只管歎く聲音にもてなせば、寄居蟲は淺ましくも悲しくて、顔をさへ擡けざりしが、稍ありて言ひけるは、「姉上の病氣本復さへなす事なれば、そは妾も望める所なり。さりながら妾花巷とやらんに行くならば、看病なす者あるべからず、快くなり給ふ姉さまの御顔を、一目見る其上は、縦ひ命に及ぶとも、など此の上の喜びやあるべき。」と言ひければ、奈古平呵々と打笑ひ、「そは何より心やすし、御身遊女とさへならんら、餘所ながら彼の國戸の男にあひ、其の後身の代の中半ばの金をかりうけ、姉の本復なすまでは、心靜かに看病なすべし。人に鬼はなき物を、御身が赤心物語らば、縦ひ五十日が百日なりとも、暇得させぬものやあるべき、われ宜しく計らふべし。」とて、密かに寄居蟲を誘ひ、彼の國戸に引合はせ、金を借り得て寄居蟲に渡しければ、急ぎ醫師を迎へて忘貝が藥調合を頼みけり。元來此の一條は、奈古平醫師と計りし奸計にて、強ち高金の藥ならねど、寄居蟲が赤心を神佛も哀れとや、憐しけん、幾日もあらざるに忘貝が病全く愈え、常の心地にひきかへりける。寄居蟲は斯かる喜びのうちにも、又姉に別る、事の悲しく、人しらぬ袖に涙の露を添へぬ。かくて忘貝が病本復なしければ、寄居蟲を買ひ得し男、忘貝には絹鬚く者なりと言ひ欺き、殘金をもて寄居蟲を誘ひ行かんと來りければ、兼て思ひ設けし事ながら、寄居蟲は今更のやうに悲しくて、はふり落つる涙を隠し、唯さらぬ物語のみな

し居たり。彼の男何おもひけん、奈古平を垣の外面に呼び出し、密かに言ひけるは、「先日は病はけしく髪も亂れ、垢つきし姿ゆゑ、姉には更に眼も留めざりしが、今快き體を見れば、妹に勝りて顔うるはしく、殊に年も十六歳許りと見ゆるなれば、直に花魁と呼ばれんさまあり、若し妹の方を變改なし、姉をわれに渡し給はば、定め金五十兩のうへに、二十兩を増すべし。」といひければ、奈古平暫時思案をなし、大きやかに一聲呵々と笑ひ、己が手にて口を塞ぎ、「わが胸中に妙計あり、明日午時に來り給はば、首尾よく忘貝を渡すべし。」と、彼の男を歸しけり。寄居蟲は今宵此の家の餘波なりと、夫れとはなしに只浮世物語によそへ、姉へは夜と共に暇ごひなし、悲歎をかくす胸のうち、苦しきは言ひ盡すべうもなかりけり。夜も明けぬれば寄居蟲は、何時までかくて有るべき、思ひ放れて都に赴かんと、忘貝が病の中に願ごめなしたる、此の地の生土神に詣でければ、奈古平は折よしと忘貝に向ひ、「御身には病の障りになりもやせんと、深くも包みぬれど、我を後にて恨むるは必定せりと、是非に及ばず言ひ聞かす、一條の物語あり。」と言ひければ、忘貝はなみならず驚き、「奈古平ぬしの常にかはり、斯く宣ふは心が、りにぞ侍る。何等由縁や聞かせてたべ。」と、膝をす、めぬれば、奈古平眼をしばた、き、「丈夫の我すら思ひ出せば、涙にむせて言ひかぬる、其の仔細といふは、日頃仲よきあの寄居蟲は、今日より此の家に在らずして、遠き都に赴くなり。」と、聞くより忘貝大いに驚き、「そは何

と宣ふぞ、妹は妾とひき離れ、遠き都に旅だつとや。よも實とは思はれじ、早とく其の由縁を語り給へ。」と、狂氣のごとく奈古平に取縋れば、空涙を手拭にてのぐひ、「此のたび御身の病氣は、心氣を深くいためしなれば、常の藥種にては本復も心もとなしと、醫師の言葉に力なく、寄居蟲は遊女に身を賣り、此のごろ飲みたる御身の藥は、彼が身の代にて調へたる、みな高金の藥なり。」と語るうちに、忘貝は何と思ひ辨ふ方もなく、唯ひた泣きに泣きて、顔をさへあけざりしが、涙の裏に周諄して、姉を思つて遊女に身をうり、得がたき藥を調へて、本復させてくれたる赤心、禮は言葉に盡しがたし。さりながらなぜに其の事一言なりと、此の姉に語りては聞かせぬぞ、縦ひ命を存へたりとも、憂きも辛苦も共にせし、妹を遊女あそびとなし、おめく活きて居らるべきか、慈悲に情に奈古平どの、妹を花巷に遣らぬ思案、とくくしてたべ。」と泣き惑ふ。奈古平は計策なりぬと心に喜び、「寄居蟲が身の代は、はや借り受けて藥の料に失ひたれば、御身彼に代りて花巷に行き給ふより、別に寄居蟲を遊女となさぬ、良き計らひはあらじ。」と咄くに、歎きの内にも忘貝は喜び思ひ、「妾死すべき命を助かりたれば、遊女となるとも更に人を恨むべき事なし。此の上の情に如此計らひたび給へ。」と、いふ折しも國戸の男、竹轎をつらせて來りければ、奈古平彼の男の袖を引き、又垣の外面に廻り出で、「昨日契約なしつる如く、姉を渡し申すべきに、まづ金を與へ給へ。」といひければ、彼の男も喜び、後金の上

又二十兩を渡しける。奈古平は半面に笑ひ半面に憂へ、忘貝が側に来り、「先に語りたる如く、寄居蟲を買ひたる男は則ち此の人なり。愈寄居蟲が代りに、花巷に行きなんや。」と言ひければ、涙にくれて答へだになさず。少時ありて、「今も妾がいへる如く、身の代の金は妾が薬の料となしつるなれば覺悟なれど、寄居蟲が歸りをまち、言ひ残す事も様々あれば、明日は花巷に赴くべし、今日一日は暇たび給へ。」とうち泣くに、奈古平呵々と打笑ひ、「御身いと幼き事をいふものかな、寄居蟲が歸りなば、などか御身を花巷にやるべきぞや、初めより覺悟なりと彼が行くは必定せり、さすれば御身が志も反古になる理ならずや、百日百夜暇乞なしつるとも、別れは同じ悲しみなるに、彼が戻らぬこそ幸ひなれ、われ御身が赤心をば、宜しく彼に傳へん。」と、泣き居る忘貝を引立て、無理に竹轎に押込めば、只泣呃して奈古平が袖を控へ、「寄居蟲が今朝物詣に出でゆくをり、姉様輕はずみして、病み返して給はるな、薬も今に煎じ出で来ん。快きとて忘れば、肥立も遅しといふ事ぞや。飯たうべ給ふなら、鮎の魚も爰にありと、いつに變らず信々しく、心を添へて給はりしが、此の世の別れといふ事は、神ならぬ身の努しらず、斯くなる事と知るならば、とくと顔見ておかんもの、春丈は姉より大きけれど、まだ仇なき性ありて、臥具をふみはぐが癖なるに、目覺め給はば引掛けて、風ひかしてばし給はるな。今宵よりは石弄とり、歌がるたの相手がなうて、嘸や寂しく思ふらめ。落著く花巷も知れ

しなら、人を以て告げこさんに、必ず逢はせに連れてたべ、寵愛の猫が首たまは、針箱の抽斗へ昨夜縫ひて入れ置きし、忘れずやりて給はれ。」と、いふ間に早乗りたる竹轎は、門邊まで昇き出す。折しも寄居蟲は生土神より立ちかへり、此の光景を見るよりも、周章てふためきかけより、「こは姉上を何地に連れ行き給ふぞ。」と、竹轎にとりつき泣き惑ふ。姉も涙にくれながら、「やよ妹、其方が花巷に身をうりし、一條の物がたりは、奈古平殿より聞きたるぞや、妾其方の代りとなり、花巷とやらんに行く程に、何卒して父の仇人を尋ね出し、一太刀なりと恨みてくれ。頼み置は是れのみなり。」と、疾竹轎を急がしたて、別れんとする袖にすがり、「宣ふ所は理に似つれども、奈古平どのと密かにかたらひ、花巷とやらんに行く事は、思ひ定めし上なれば、妾は露悲しとも思ひ侍らず。姉さまには其の上、肥だち給ふも昨日今日、まだ全快しといふにもあらず、さらぬだに旅は物憂き物なるに、水がはりにて勞きの、昔に返るは著きぞや、妾を將て行き給へ、姉上をば渡さじ。」と取りつき歎けば、忘貝は言ひ和め、「同じ事を繰返しはいはんもいと憂けれど、妾が身の代にて妾が命を買ひたるなれば、遊女となるとも恨むべき事更になし。他に漏らすもうたてけれど、淀の夜船の暗まぎれ、取違へたる御身なれば、妾が肉身の妹ならざるは、父の末期のもの語、其方も熟く聞きつらめ、血を分けぬ淺ましさは、妹を薬の料に賣り、姉はよき衣著たりなど、世の人口は如何ともせん術なし。情と思つて

妾をば、花巷とやらんにやりてたべ。」と、よ、と許りに泣き伏せば、妹は涙をおし拭ひ、「妾とても宣ふ所に變りはなく、實の姉さまならぬ故、遊女となるを餘所目に見しと、人の手前も後めたし、慈悲と申うて妾を代りにやりてたべ。」「い、や妾こそ行くべきぞ。」「いや妾こそ行くべきぞ。」と、互に争ひ果つべくも見えざれば、忘貝懷劔ぬきもち、「南無阿彌陀佛。」と自害せんとなしけるを、寄居蟲周章て押しとむれば、「い、や放ちて殺してよ、妹を遊女傀儡となし、おめく活きて居らるべきや、姉が命を助けんと思ふなら、花巷に行くを許してくれ。」と、濟々と泣きければ、妹も懷劔抜き放ち、「姉上には後れ侍らじ、花巷に行くを止め給はば、妾も共に自害せん。」と、死を争へる姉妹が赤心を、囀戸の男も感じ思ひ、漸く兩人をいひ和め、「不良事と知りつ、も、活計は是非もなく、あまたの女子を買ひありき、或は夫に別る、の悲しみ、或は子に離る、の歎き、幾度か見つれども、是れはそれには引きかへて、死をあらそへる姉妹の心、見るにすら涙をとゞめがたし。いや奈古平どのとやらん、先頃與へつる金は、藥調へし由なれば、今日の殘金はた二十兩の金をば、我へ返し給へ。半ばの金を損となし、姉も妹も連れゆくまじ。妹の方を變改し、姉を遊女に賣るならば、二十兩の金を増すべしといひつるは、妹にも由縁を聞え、姉とも熱く語りての上の事なり。察するに足下は妹を賺き、姉を渡さんとなしつるゆゑ、かかる歎きを引出し、鬼にも増りて恐ろしき、活計のわれなれど、斯く悲歎

にせまる姉妹を、引放ちて行くべきぞや。いざ疾く金を返し給へ。」と、只管に奈古平を責めければ、奈古平ももて餘し、二十兩の金を財布より投げ出し、「妹は初めよりの契約なれば、連れ行き給ふとも異議あらじ。姉を渡さんと計りしゆゑ、斯かる事も出で來しなり。此の金さへ返しなば、言ふべき事はあるまじ。」と、云ふより早く何方ともなく逃げ行きければ、姉妹は呆れ果て少時言葉も出でざりしが、姉は漸く心をしづめ、「やよ妹今聞く如く、其方に代りて此の姉が、花巷とやらに行く時は、此の二十兩は此方の金となる由なり。さすれば是れを路用として、遙々の道ながら河内國高安、切平が在所をたづね、力を合はせて父上の仇人を討つてくれ、落著く所も知れしなら、妾も彼所に消息せん。強ひて御身が遊女となれば、此の金も得る事ならず、路用なければ如何にもせん術なく、妾此の所に留まらば、又奈古平が立ち歸り、何等憂目にあはんも知れず。されば兩人が爲なれば、妾を花巷にやりてよ。」と、事を分けて言ひ聞かすれば、辭むにも辭み難く、答へは只涙なりけり。囀戸の男もいと哀れなる事に思ひ、「姉の言ひつる如く此の金は御身のなれば、心置きなく是れをもて、河内とやらん其の便宜の地に赴き給へ。」と、二十兩の上に五兩の小判を増し、財布に入れて寄居蟲が首にかけ、「事を熟くも聞きわけつれば、竹轎をとく急がせてん。」と催したつる。姉は涙を押隠し、彼の茶道の傳書をとり出し、父の形見の巻物二卷、一卷は妾が方に留め置き、一卷を其方へ與へ置く程に、何方

ともあれ巴之丞良治君に、廻りあひ奉らば、此の傳書をさしあけて、父の赤心物語れよ。」と、寄居蟲がとり継り、泣き居る姉が振袖を、先の懐劍抜き放ち、ふつつと切れば寄居蟲は、大地に墜と轉びつ、「是れ喃姉さま、いま一言いふ事あり。」と、歎き叫ぶも餘所ごとくに、聞きなす姉は猶悲しく、泣く聲聞かせじ洩らさじと、袂を口に押しふくみ、竹轎を早めて急ぎ行きぬ。寄居蟲は只夢路をたどる心持して、其の儘そこに泣き伏したりしが、斯くては果てじと思ひ直し、心細くも唯一人、何地をあてと定めもなく、道の程十町あまり歩みしに、時雨さへ降り出でて、はや日も暮に向々とし、ほとほと道に勞れければ、とある樹の根に尻打ちかけ、少時憩らひ居たる折しも、奈古平は寄居蟲が跡を慕ひて走せ來り、物をば言はず袴首をかい掴み、既に引きたて行かんとす。寄居蟲は悲しくて、纖弱き小腕に突き退けて、「こは非道なり妾を何地に連れ行くにや。」と、發憤きて言ひければ、奈古平呵々と笑ひ、御身等二人を多年養ひ置きたるも、遊女に賣りて金を得んと思へばなり。斯くなる上は包むも無益、我が姦計を二伍一仕に語り聞かさん、先づ初め怪しき面を被りて、己が家へ盜賊に入り、彼の地に住み難き事ある故に、同子者を修行者に打扮させ、御身等を此の地に誘ひ、又羽黒山にて神靈の告げと思はせしも、皆わが聞者にて、長く當地に足を繋ぎ、御身等が成長をまつて、多なる金に暖まらんす計策なり。」と、聞く度毎に寄居蟲は怒りに堪へ兼ね、畢竟彼を欺き殺し、此の場を逃れ去らん

には如かじと思案を定め、泣き居る面持して密かに懐劍抜き隠し、奈古平が膝をめぐけ突込めば、奈古平は狼狽へ惑ひ、女子と侮り不覺をとりしと、又打ちかゝる懐劍を、落ちたる笠にて丁と受け留め手負ながらも元來強氣の曲者なれば、遂に寄居蟲が懐劍もぎ放ち、ほと／＼危く見えつる折、寄居蟲よりは先に、樹深き森の茂みに憩ひ、時雨の小止を待ちたる旅人、かくと見るより走せよつて、思ひもかけぬ後より、奈古平めがけ切りつくれば、何かはもつて堪るべき、兩段となりて死しけるは、心持よかりし光景なり。彼の旅人寄居蟲を勦りたすけ、笠とるを見れば是れ則ち切平なり。寄居蟲はあまりの事の喜ばしさに、切平にとり継り、中々に言葉はなくて、只先だつものは涙なり。切平は不審し、只一人にて他國をさまよひ給ふといひ、奈古平どのの爲體、小子ふつに應允ゆかず、泣き給ふのみにては其の由縁も知れ難し。先づ一條の物語きかせ給へ。」と、信だちて問ひければ、寄居蟲漸く鼻打ちかみ、首尾を物がたれば、切平も唯呆れにあきれ、涙さへ出でやらず。や、ありて己が膝を丁とうち、「夫れにて思ひ合はする事あり、母の病氣に是非もなく、本國へたち歸れば、母はいと健かにて、かへつて我が安否を問はんと、去る頃人に言傳てて、消息せし由語りし故、不審しとは思へども、彼の地に數月勞れを休め、母に又もや暇を乞ひ、蛇田村に來り見れば、君達彼處にましまさず、夫れより漫にたづね廻り、今計らずも危急を救ひ申せしも、我が忠義を神佛の守り給ひしならん。思

ふに我が母の病氣と僞りし書簡も、皆奈古平が姦計にて、我を本國へ歸して後、君たちを遊女に賣らんと巧みならめ。今一月早く逢ひ奉らば、姉上も遊女とはなさせまじを。」と涙にくれ、「こはいうて歸らぬ周諄なり。都の花巷に尋ね行き、頼て目出度う逢はせ奉らん。」と、力を添へつ勦りて、都の空に旅だちけり。是れは扱おき同じ康曆二年四月上旬に、淺間巴之丞良治は、奥州に歸國なし、其の後は事なく過ぎ往きたるが、嗚呼樂しみ盡きて憂へ更に來るの語、悲しいかな無常の悪鬼は鐵城にこもれども、防ぐべき計策なく、七月の頃より巴之丞の北堂遠山尼、風の心地と打臥し給ひ、醫師百計を施すと雖も、其の驗更になく、未だ定過ぎて程もなき花の姿を、えならぬ風に吹きちらし、遂に亡人の數に入り給ひけり。巴之丞の悲しび家臣の歎き、事々に記さんには瑣々しきを厭ひ、用なきは漏らしつ。斯くてあるべき事ならねば、御亡骸をば牧山の長福寺にをさめ奉り、七日々の御業には、近郷の僧を集へ、誦經懇に行ひける。かかる歎きの裏にも、月日更に止まる事なく、夢の間に忌も果て、冬もいつしか過ぎゆきて、次の年の春にもなりけり。彼の去る年巴之丞が、相模國あすだ川より將て來りし、賤の小女時鳥も此の館にとゞまり、常に巴之丞が側において、信々しく仕へけるが、顔色美しく心さま優しく、はや情心つく年ともなりぬれば、いと婀娜きたるを巴之丞も憎からず思ひ、獨寢の閑寂しきに、雨そほ降るの夜密かに時鳥を枕近く招きけるが、まだ世になれぬ小女な

れど、媚く姿のいとつ、ましくて、強ち辭むともあらねど、鼻しろみて物も一切いひ出でざるが、巴之丞はなほ得粧所心地して、今宵なん深閨に花の紐とけそめつ、襄王の夢を結びけり。初めの程は唯假初の契りと思ひしも、さるべき縁にやありけん、しかりし日より日にく愛しみいやまし、花をたづぬる胡蝶、池をめぐる鴛鴦の、須臾も離る、時なく、手を携へ袂を連ね、いつとなく水魚の中となりにけり。此の頃御宇は畏くも人皇一百代、後園融院にてわたらせ給ふ。時の大臣たる師良公に、翟麥と申す女子一人いまそかりける。深窓に成長り、詩歌はいふもさらなり、絲竹の道にさへ暗からず、生平に雲上を好みて、車ならざれば假にも、大路を歩く事なく、されど天性色このみなりければ、何なる漫行きの隙にや、巴之丞を見そめてより、露忘る、聞なく、去る年辛崎の神前にて、端なくも回り會ひ、流石に名は夫れと言ひ兼ねて、夏草と聞え檜扇を端をりて、古歌一首書いつけて贈りしは、則ち此の姫子なり。強ちのうちつけ懸想に、巴之丞はよき程に答へて、奥州に歸りて後、巴之丞の音信を待ちかね、遂に病の牀に打臥しければ、御母の歎き大方ならず。御父師良公にも、此の由縁畧聞えあけ、「堂上武家と隔つるといへども、急ぎ翟麥を淺間の館に送るべし。姫が命なからん後、悔ゆるとも甲斐あるべからず。」と宣ひければ、子を思ふの切なるは、貴き賤しきの變りなく、御父も、「此の儀尤もなり。」と承引き給ひ、さるべき求人をして、遙々奥州まで斯くと聞えければ、淺間

の家臣打集ひて商議なし、「當時上にも御覺え目出度き師良公の姫君を、武家の身にて室とせんは、面目是れにしくべからず、急ぎ御答へあるべし。」と、一定の勧めに仕術なく、此の儀承引き給へども、侍女時鳥と深閨の契り心實なれば、鬱結として心更に樂します。待たざる月日は往くる事常よりも急く、程なく春すぎ夏さりて、瞿麥姫の輿いれあるべき期來りければ、時鳥をば別館に移し、姻婭の規式いと儼かにて、紅閨の私語には、往年扇に歌書いつけて贈りし折は、斯くなりし、しかなりしと語りいで、彼の扇をかへて春夢婆に逢ふと作りし詩、臘月夜の内侍の事など思ひ出でぬらんと、是は愚が推し量りて言ふ事になん。

第七 月夜に瞿麥時鳥を迎へて恥辱をあたふ

空炷物は仄かなるが、心には女も異所に据ゑ置き、折に觸れて通はんこそ却つて契りも深く、互に愛しみも彌増すべし。先にもいふ如く彼の瞿麥姫は、顔色玉の如く膚は雪を欺き、花も妬み月も恨む美人にてあれど、春を思ふの情飽くまで深く、色好みなる性なりければ、紅粉を粧ふ事のみ一日の業となし、只管媚を以て巴之丞が心を蕩し、己權勢をとらんとのみ計りける。巴之丞は憂き事に思ひ、時鳥を忍ばせ置きつる、別館にのみありけり。さなきだに寵を妬んで勢ひを得まく思ひ、妍を争うて

愛に誇るは婦女の常なるを、まいて斯くの如き瞿麥が性なれば、胸中燃ゆるが如く思へど、如何ともせん術なく、折もがな時鳥とやらん側女に、恥辱を與へ心やりにせんものと、胸わろき侍女奴婢をかたらひ、時鳥が素性を密かに搜り聞き置きけり。斯くて程なく八月十五日にもなりければ、月見の酒宴をうながすべしと、瞿麥、巴之丞に言ひけるは、「君には時鳥とやらん側室を、別館に居る置き給ふ由、侍女等が問はず語りに、妾も豫て聞き侍りぬ。折もがな打解けて語らんと思ふに、幸ひ今宵は此の館に招き、望の夜の月を賞し侍るべし。」と強ちに勧めければ、巴之丞は心の底に喜びざれど、分説くに言葉なく、夜にいりて時鳥を迎へけり。時鳥はいと面頼くて、惶るく左右の光景を見るに、よろづ雲上をまねぶ瞿麥が好みにまかせ、新たに造り設けたる館なれば、竹芝寺の故事にはあらで、雲の上もかくやあらんと思ふ許り、母屋の廂長押の上に、大和むしろを敷き満て、晴のがたの翠簾は鎮子ヲモをおかず、鉤をかけて高らかに捲きあけたるは、月を見んと料なるべし。後の方には蘇芳濃きうちの紐つけたる、唐織の壁代ひき廻し、二階厨子には火取、白銀の籠箸、匙鉢、泔杯、唾壺の箱、打亂の筥、いま一装の厨子には、梅花、荷葉、侍従、黒方の類にや、香合の筥、合、冊子の筥、櫛の筥、なんど、所せく飾りたて、唐匣には八花形の鏡、錦の守汗巾まで、常に目馴れぬもの多く、遙か向ひに紫檀の手の枕几帳をたて、蒔繪の脇息に打ちもたれたる婦人こそ、瞿麥の方なるべしと、いと心

おくれせられて、頭を低れて立ちも得あがらざるに、瞿麥はかうと見るより座をたちて、自ら時鳥が
手を取り、「疾くにも此の館に招くべきを、折なければ互に面をさへ知らず、過せし事の本意なさよ。
けふよりしては姉とも思ひ給へ、妾も又無禮ながら妹と思ひて、憂きも樂しきも俱にすべし。」と、隔
意なく語らふ言葉に、時鳥はなほ恥ぢりて、唯口の裏に答ふるのみなり。瞿麥は笑ひを含み、「年い
と若ければ、さ惶るゝも宜なれど、別に客人も坐さねば、心置き給ふ事更になし、かかる折打ちとけ
んには、酒にしく物あるべからず。」と、自ら玉杯をとり時鳥に數杯をすゝむるうち、はや眞夜中と覺
しく、月は南にめぐりきて、影いと近しく興更に盡きざれば、瞿麥侍女をよびて、錦木と號ける琴
をとりよせ、時鳥が前に押しやり、「御身は美人そのうへに、心ばへも優しと聞き、一定琴は名手なら
め。常陸うた東屋にても、菅攪して興を添へ給ひね。」といひければ、時鳥は打驚き、「こは思ひもかけ
ぬ仰せにぞ侍る、土生の小家にて成長りし妾、いかで琴ひく事をようすべきぞ。此の儀ばかりは許さ
せ給へ。」とさしうつぶけば、瞿麥うち笑ひ、業を誇かにあらはすものは、其の業の熟せざればなり。
常言にも能く鳥とる鷹は、爪を隠すとかいふなる、包むほど尙奥ゆかし、其の琴の氣にいらで、手を
くださざると覺え侍る、松風のかたや勝らめ、瀧の絲やよからん。」と、琴五六面とりよせ、只管に勸
むるに、時鳥は實に琴弾く事を習ひ得ざれば、顔赤うなりて答ふべき言葉もなく、少時ありて、「先に

もいふ如く、僅かにても弾き覺え侍らば、上の仰せを露いなみ侍るべき、恥かしながら丹波國の田舎
に生まれ、絲繰り機織り賤が營む業ならで、覺え侍ること更になし。」と、白狀に其の身の恥を聞ゆる
に、瞿麥は腹だたしき顔もちして、「唐土の伯牙とやらんは、聞く人なしとて絲を斷ちしと傳へ聞く。
妾琴弾く事の幼ければ、妙手をいかで聞き得る事のあたはんやと、謾りて調べざるや。侍女の其中
には、少しは琴に熟したる者もあれば疾く弾くべし。梁の塵をうごかし、池の魚の躍るをもても、
御身の妙手は知るべきぞ。大名の側室たる身が、幼くとも琴掻いならし、腰折歌の一首二首、詠み出
でざる者やあるべき。」と、飽くまで嘲哂なせば、侍女の悪さけなるがいふは、「時鳥の御方には、琴調
べ給ふか給はざるかは知らねど、歌はよく物し給ふよし、豫て風説に聞きはべりぬ。」と聞ゆるに、瞿
麥も微笑みて、「さればよ先よりの辭退は、實ならずとこそ思ひつれ。今宵の月を題として、歌よみて
聞かせよ。」と仰すれば、侍女は打笑ひ、「奶々には何宣ふや、時鳥の御方は三十一字の歌にはあらず。
田舎同者の諷ひ歩く、順禮歌といふ物を、よくも諷ひ給ふなり。」と散動きて笑ひぬ。瞿麥は不審しき
面ふりして、催馬樂早歌は耳なれたれど、其の順禮うたとやらんは、名を聞くさへ初めてなり。いと
興ある事にこそ、時鳥うたひてよ。」と言ひければ、時鳥は消えもいらたき思ひにて、はふり落つる涙
を兩袖に包みかね、答へも更になき居るを、侍女等はすゝめたて、水盤の柄杓もち來り、時鳥が手に

わたし、「これをもちて諷ひ給へ、笈摺といふ衣は、此の御館にあらざれば仕術なし。」と、よ、とばかりに泣き居るを、彼方へ突きやり此方へ押しやり、種々に責めさいなめば、時鳥は堪へかねて、中にも悪さけにつぶくと肥えたる侍女が、とりたる手を振り放ち、更に力を用ゐるやうすもなく、衿首つかんで五六間廣庭に投げ退けたり。残りの侍女大きにおどろき、左右より取りつくを莞爾みつ、楊の枝にも比ふべき、かよわき腕をさしのばし、或は帯をつかみ、或は胸さかを取りて、須臾の間に皆庭先に投げつけければ、何方ともなく皆ちりちりに逃れゆき、唯翟麥一人のみとなりぬ。時鳥は塵うちはらひ、翟麥が側へ心しづかに歩みより、「賤の女の妾をあなどり、琴弾けよ歌よめよと責め給ふは、樵夫に海の路を問ひ、海士に深山の案内を聞く、非道とやいふべき。夫れ愚か者にも必ず一徳ありとかや、女といへども武家に仕ふる妾なれば、些しは武の道を心がけ侍れば、見給ふ如く多勢の侍女を相手となせど、手にたつ者一人もなし。以前は雲の上人にもせよ、今は淺間家の切々なれば、長刀小太刀はいふも更なり、弓馬の道さへ心がけ給ふと覺え侍る。何にもあれ無禮なれど、御相手になり進らせん。先づ酒一つきこしめせ。」と、ありあふ茶盤に杯を乗せ、左りの手の大指と、食指にてすみをおさへ、いと軽々と翟麥が、目さきへ突きつくれば、此の力にやおそれけん、翟麥更に言葉をも出さざれば、時鳥うち笑ひ、「今にもあれ敵此の館に寄せ来る其の時は、良人に代りて討死せん

こそ、武士の妻の本意なり。姦しく口立には似氣なく、力なき侍女等、今時鳥が歸館るなり、何人にもあれ出で合ひて止めて見よ、愚かなる唐人は知らず、琴調べて敵を防ぐ計策あらば聞かせよ、時鳥が竹轎もて。」と家來を呼びいれ、翟麥に會釋なし、徐々と立ち歸りしが、華やきたる酒宴にて、かくまで恥辱を與へられ、一時の怒りに乗じ切々を罵りたれば、自害して死に亡せんと覺悟を極め、病なる由いひて、己が閨房に引籠り、めぐりに屏風引廻し、ありし事ども書置し、心を静めて懐劍ぬきもち、自害せんとす折しも、巴之丞は走りいで、懐劍もちし其の手にすがり、「かくあらんと思ひしゆゑ、御身よりさきに此の所に忍び來り、さきよりの一二は紙門のあなたに聞きたるぞ。奥翟麥が不良きふるまひ、われも後堂にありて、今や出でんくとおもひしが、却つて我彼處にあらば、御身がためにも悪しかりなんと、眼をふたぎて忍びしぞや。自害せんとす心根、理には似つれども、去る頃より月水もとまり、酔きものを嗜むと聞く。若し懐胎も計りがたし、腹なる子は不便とは思はぬにや。」と、さまざまに言ひ和むれど、時鳥は唯涙にくれ、頭をふりて承引かざる面もちなりしが、不思議なるかな持ちたる懐劍とり落し、五體俄に顫ひ出し、惡寒發熱甚しく、更に人事をしも知らず、其のまゝに倒れ伏す。巴之丞初め侍女の介抱にて、漸く五三日を経て、正氣はつきぬれど、腫物總身に聞なくいでき、紫だちて腫れ上れば、巴之丞は並ならず驚き、醫を招きて見せしむるに、「何

等病なるや正には知れ難けれど、是れ俗に言へる疥癩なるべし。」と答へければ、巴之丞は物憂き事に思ひ、時鳥にかくと聞えば、自害せんは必定せりと、唯「疾毒より發せし腫物なれば、近きには愈ゆべし。」といひ教へ、金を厭はず醫療手を盡しけり。

第八 巴之丞再度皇都に旅だつ

程なく春にもなりぬ。かくて後時鳥が病日夜にいやまし、花の顔色松皮の如く爛れ腐れ、臭氣室内に満ちぬれば、青蠅集まつて膿汁を嘔り、薬まゐらす侍女さへ、袖にて鼻をおほへる許りなれど、巴之丞はかく穢れたるも厭はず、日毎枕近く來り、看病の侍女に何くれと心を添へぬ。時鳥が心の中には淺ましき事かぎりなく、自害して死なんとは思へども、巴之丞が情深きを思ひかへし、夢の間に二月にもなりければ、再度都在番に登るべき由、公の命黙止し難く、巴之丞は心ならずも旅装を整へ、既に其の日も近づきて、時鳥が病牀を訪ひ、涙ながらに別れを告げ「わがなきとて必ずしも心短く持ち給ふな、頓て歸り來らんに至快して待ち給へ。」などと、切心に聞えければ、時鳥も涙にくれ、「所詮妾が業病は、本復なすべくも思ひ侍らず、是れこそ今生の別れならめ。妾言ひ置く事一條心憂くおほさんが、聞き置きてたび給へ。妾が養親は丹波國氷上郡 柏原といふ所に住みたる、鏡師

木の瀬といふ者なるが、應安三年某の月某の日、木の瀬が實の娘宇の葉といふ、四歳になれる愛子を將て、淀川の夜船に乗りしが、妾もその時父にいざなはれ、同じ船に乗合の、彼の娘と遊び居る折しも、如此々々の騒動に燈も消えたれば、善悪もしらず、妾を娘宇の葉とこゝろえ、其の場をいざなひ逃けのびて、心おちるて熟く見れば、木の瀬はじめ娘ならざるに驚き、妾も又父ならざるを見て、悲しかりし事は今によく覺えて侍る。僅かに四歳の年なれば、父の名も所もしらず、仕術なう彼の木の瀬が養女となり、名をもそのまゝ、宇の葉とつき、成長はなしたれど、父は程なく此の世を去り、母は邪見の性にて、繼子棄子と疎み果てられ、遂に遊女に賣られんは必定せり。疾く此の家を逃れ去れと、近隣の者の言葉にしたがひ、道ならぬことと知りつゝも、唯一人丹波國をたち出でて、かねて木の瀬が語りしは、淀川の夜船にて、我が父のものというたる様、奥州の訛りありと聞きしをたのみ、奥州へ下るうち、不圖も君に逢ひまらせ、名をばつゝみて聞えざりしが、時鳥の鳴く音を聞き、妾が名と呼び給ひしも、鶯の子で子にあらぬ時鳥、深き因縁のこもり侍るもいと不思議なり、百萬歳も御壽のそのうちに、妾が父にめぐり逢ひ給ふ事もあらば、よしなに語り聞かせ給へ、妾の方には證據となるべき品もなければ、彼の實の宇の葉が所持なす守は、世に稀なる笹蔓錦、一寸八分の正觀音、此の二品をもち居る女の養親こそ、妾が實の父にておはずや、母はいと幼き時にかくれ給ひ、

一人の姉うへありし事のみ、臙氣に覚え侍る。かかる業病うけつるも、義理ある母の目を掠めて亡命なし、剩へ賤の身をも顧みず、御褥をけがし侍る罪ならめ。」と、臙汁に穢れたる手にしあれば、取りすぎる事さへ心に任せず、枕にうちもたれ身を涙に浮きぬ許りに歎きけり。巴之丞は時鳥が便りなき物語を聞く毎に、いと不便もいやましぬれど、かくては果てじと心をはけまし、「御身が實の父姉は、奥州の者とあれば、尋ね得ぬ事はよもあらじ。頓て對面なさせん間、力を落さず養生なすべし。」と、さまざまに心を添へ、都の空へと急ぎけり。

後編發端

此の末置麥時鳥を殺し、時鳥の怨鬼置麥を苦しむる事わけは既に書きはてつれど、劊削師の工未だ成らず、書房しきりに發兌のときをいそげば、後編にゆづりぬ。後編發販のときを待ちて、首尾まつたきを見給ふべし。

かくて淺間巴之丞良治は、都在番に赴きぬれど、心更におだやかならず、我當國に來りて後、罹麥が妒心にて側女時鳥の、いかなる憂目や見つらんなど思ひめぐらし、只管古郷のみ案じ患ひ、學窓にのみ潛まり居ければ、心氣結ほれて人と對語りを嫌ひ、唯いねがてにて五月も末になりぬ。家臣は巴之丞が物思はしき顔付を、且夕心やすからず思ひ、「かくては頓て勞きとなりなんは必定せり。かかる

期淫酒の毒たるも、却つて氣を保養の藥ともなるべし。」と、密かに心ききたる白齒者を語らひ、それの納涼にかこつけ、忍びやかに館を夕暮より立ち出で、從者をばその所より歸らしめ、五條坂の花街に到りけり。巴之丞は常に歩みなれざる大路なれば、往來の人も目なれざる事のみ多く、足もいと軽らかに覺えて、堤を下り大きな娼門を過ぐれば、あまたの遊女の客まぢ顔なるが、茶屋が牀几に腰うちかけ、或は門首におくり出でつ、只管に別れを惜しみ、又の逢ふ夜を契るもあり、或は稀の見參をよろこび、手を携へて樓に登るあり。巴之丞は今宵初めてかかる光景を見るより、古今の人情かはりなく、彼の客にならましかば、樂しからんなど思ひつ、心も浮きたつばかり、彼方をながめ此方を顧み、漫行く折しも、此の地の惡棍巴之丞が佩刀の柄に袖を引きかけ、會釋もなくかなぐりて行き過ぐれば、巴之丞白齒者に向ひ、「其奴慮外者なり。切りすてよ。」と言ひければ、彼の惡棍が袷首つかみ、投げ退けんと闕く折、惡棍同子と見えつる男、四方より走せあつまり、巴之丞主從を中にとりこみ、無二無三に打つてかゝる。始めにも言ふ如く、忍びての夜行なれば、從者をばかへしつ、只三五人の白齒者、惡棍の多勢に敵しがたく、既に危く見えける所へ、一箇の俠客韋駄天の如く走け來り、片端より惡棍を取つて投げ退け、巴之丞を後に圍ひ、「是れこそ止事なき淺間某の君なるぞ。此の後無禮働く奴等は、一人も活けて歸すまじ。」と言ひければ、惡棍等も彼の俠客が力量は、兼て恐れ

居る事と覺しく、猫を見し鼠の如く、皆散りくりに逃げ行きけり。爰に又忘貝は、此の花街に賣渡され、今は逢州といふ全盛の大夫なりしが、此の處を通りあはせ、淺間の君なるよし聞くよりも、若しや良治公ならんも知るべからずと、自ら巴之丞が手を取り、「此方へ來り給へ。」と、とある茶屋に誘引ひければ、彼の俠客も巴之丞が白齒者と打連れ、同じ茶屋に到りける。此の俠客は御所の五郎藏といふ者なり。巴之丞に何等縁あるや、詳なる事は後編の端首にあり。發兌の期を待ち得て見給ひね。

淺間嶽面影草紙三之卷 終

おもかげざうし後編

巴之丞逢州が許へかよひ、五郎藏人違へにて逢州を殺し、言譯なうして切腹なす事、および星影土右衛門が姦惡、寄居蟲袖乞となりて花都に來り、逢州が殺されつるを街説に聞き、我が姊とは夢知らで、哀れなる曲子につり、四ッだけ合はせて花街をうたひありき、實の母にめぐりあふ事、又逢州が桂に亡魂とままりて、香のけぶりに再びすがたをあらはすは、富本常磐津のじやうるり本をもととして編めり、是れを戯場の狂言に比せば、前編は大序より、第一番め大づめにて、後へんは第二番め序幕より、大切に至るがごとし。

淺間嶽面影草紙後帙
逢州執著譚

執著譚序

鏡花問^{ニツテ}水月^ニ曰ク。汝有耶無耶。水月曰ク。子是乎非乎。相契共^ニ成^レス歡^ヲ。且贊稱^{シテ}曰ク。我儕勝乎。人以^テ爲^レス有我諾々。爲^レス無我諾々。故^ニ假我發起^{スモ}煩惱^ヲ。我以^テ不^レ管^ラ。假我得^ルモ入^ニルヲ菩提^ニ。我以^テ不^レ誇^ラ。冥々混々。仕人之所^レ捨^{ツル}焉。儒之一貫^ノ道。佛之一切^ノ智。口而唱^ハ之^ヲ。書而傳^フ之^ヲ。何^ゾ嗷々噴々也。我儕勝乎。功成^{リテ}而不^レ居^ラ。與^{ヘテ}而不^レ奪^ハ。德執^如レ^シ焉。無相子飄然^至リ。厲^{シテ}聲^ヲ曰ク。已^シヌル矣^{々々}。今都下有^ニ柳亭主^{ナル}者。能以^テ無^ヲ爲^レ有^ト。以^テ有^ヲ爲^レ無^ト。神變自在。不^レ可^ニ言^ス也。近來所^レ著^ス有^ニ執著譚^五卷。其^ノ化功非^ズ汝輩所^レ及^フ。汝輩誤^{ツテ}而過^レレ^バ言^ヲ。輒^チ受^ケン後^ニ屈^之斃^{如何}。一^ニ容相顧^{ミテ}而不^レ知^ラ所^レ爲^ス。愕然^{トシテ}而自失^シ。忽爾^{トシテ}而消散^ス也。余假寐朦朧^{之間}。聞^ニ此^ノ談^ヲ。如^レ有^ルガ所^ニ語認^{スル}。時^ニ偶友人種彦排^{シテ}扉^ヲ來^リ。出^シ稿本數卷^ヲ。託^ニ序^ヲ於^余ニ。余開^レイテ卷^ヲ熟^ラ觀^レルニ之^ヲ。無相子之所^レ稱^{スル}。歷^ニ々^{タリ}于篇中^ニ。因^テ不^レ煩^ハサ^ハ僉語^ヲ。以^テ所^レ聞^ク書^ニ於^卷端^ニ。以^テ充^ニツ^ク乞^責之科^ニ云^フ。

壬申孟春

烹茶道人題^ニ於松亭之西窗下^ニ

占けに天竺にてなつかしき、思ひの山をかさねては、けいせき山によぢのほり、驛路の鈴を振ると
 かや、わが里ゆめ唐土の物語、それは煙の中よりぞ、かをりゆかしく立昇る、あふ州がたち姿ありし
 にかはらず、道中を歩むが如く見えたるは、さながら爰も郭にて、くるは誰ゆる其様ゆる。
 二上り「恨みも戀も残らねど、もしも心のかはりやせんと、思ふ疑ひはらさん爲の、誓昏をばなせ煙
 となしたまふ。

中畧

「遊女の地獄さりとては、二六時中にはやひきかくる三味線の、さても君とはよい中々よあいとかん
 酒のすさまじさ、たゞ熱鐵をのむ如く、其の日の酒宴敵はたれ、相手はたぞ、あら物々し、かねて手
 くだはしつゝらん、いで物見せんそこひくなと名のりかけ、小づまかいとり袖うちかさし、
 歌「一振袖の花に見まがふそのおもはくを。」

下畧

右は外記節の逢州淺間が嶽懺悔の段なり、こゝをもて古くよりもてはやしたる狂言なるをしり給
 へ。

逢州執著譚 淺間後編

一名本朝長恨歌

作者 柳亭種彦

五卷總目錄

- 第一 巴之丞花街に到る夜團一齋がむすめ
 忘貝に廻り逢ひ茶道の傳書を得る事
- 第二 田字草が長にて逢州時鳥姉妹の
 名のりをなす 竹器の瞿麥恨みの風に散る事
- 第三 瞿麥の方深夜に時鳥を殺害なす
 男波の笛鬼火に順つて飛びさる事
- 第四 時鳥の亡靈種々の奇怪をあらはし
 瞿麥狂死 まほろしぎぬたの事

逢州執著譚目錄

第五 巴之丞菊が淵の山莊に遊君を集會め

細太丸に命せて猿樂俳伎を興行なす事

第六 五郎藏杜鵑花と思ひ違へて逢州を殺す

土右衛門再び隠形の術をほどこす事

寄居蟲袖をして四ツ竹の曲子を唄ふ

第七 於杉が懺悔物語暗に母子再會の事

非人の家に良治雨の小止を待つ

第八 袖乞の娘茶をたてて良治にまゐらす事

第九 逢州が幽魂巴之丞を清涼山に誘引ふ

石橋の物語 金色の獅子王牡丹の花に狂ふ事

第十 寄居蟲父の仇をうつ古鏡の

威徳土右衛門が妖術をくじく事

淺間嶽 後編 逢州執著譚五冊總目錄 畢

淺間嶽面影 草紙後帙 逢州執著譚 簫卷

柳亭種彦著

第一 巴之丞花街に到る夜團一齋がむすめ 忘貝に廻り逢ひ茶道の傳書を得る事

夫れ務めて厭離しつべき事、愛欲に軼ぎたるはなし、人は愛慾のうちに、獨來獨去し善惡變化し、殃福異所なりと、佛經にも説かれたり。されば愛慾に執著するの迷ひは、如何なる事よりや生ずる、目注て想ひをなし、おもひ熾んにして愛をなし、愛感じては遂に躬を摩で體をまじへ、戀通つて色迷し、迷ひきはまつて畏れをなす、こゝに至つては死すれども、なほ愛執の冥路に迷ひ、魂魄中宇にさまよふが故に、假に姿を現するもありとなん。かの古くより言ひもて囃したる、遊君逢州も斯かる類にやありけん。さても京都將軍義満公は、往んじ永和三年戊午の三月、室町の新館に移徙ありてよ、花の御所とも室町殿とも稱しけり。于時管領武藏守頼之を始め、聰明叡敏聖賢の矩に叶ふ近臣營中にみち、頼に四海昇平し、たえて弓箭の塵を拂はず、其の上一莖九穗の登歳なりければ、花にめで

月にうかれ、花車風流を好むもの多く、田樂白拍子早歌催馬樂など、もてはやす代とはなりけり。されば都五條坂の曲は、熱鬧昔に倍し、歌樓妓館十字街にたちつき、絲をしらべ竹をならし、娼妓舞女袖をつらねて、西に東にゆきかひつ、花にたぐふべき容なるも、飄客のあらしにさそはれ、月と見なす貌は、玉簾の雲にかくる、紅の日傘は、絳き雪の積るかとうたがひ、黒漆の駒下駄は、立き霜を踏むかと驚く、是れ仙境に似たるの慾界、玉と欺く白露の、あくれば消ゆる契りともしらで、霜を被き月をおび、頻波のしけくより來る遊人は、氷を擔ひて井を填むるが如く金玉盡くる期あり、愛情つくる期なし、遂に樂所愁怨を生じ、身を亡ぼすのさかひにやいたらん、畏るべく慎むべし。爰に淺間巴之丞良治は、永徳二年三月のころ、陸奥牡鹿郡をうち立ち、都在番に赴きぬれど、愛妾時鳥が病のうちといひ、何くれと古郷の空のみしたはしく、鬱結として心更に樂しまず、斯くては所勞とやなりなんと、家臣のすゝめにまかせ、納涼にかこつけ、此の夜花街にいたり、かかる光景を見廻りて、や、積鬱を散じけるに、漫行の悪棍等、巴之丞が太刀の柄に袖をひきかけ、會釋もなく搜り、其上同子の悪棍をよび集へ、飽くまで悪口なしけれど、忍びての夜行なれば、只三二人の白齒者のみにて、かかる多勢に當り難く、ほとく危く見えたる折しも、御所の五郎藏といふ一人の俠客、六方が、りに歩み來り、悪棍を取つて投げのけ、巴之丞を背に圍ひ、金剛立に立隔たり、「是れこそ淺間

ながしの君にて、止事なき御方なり、此の上に無禮はたらく奴等あらば、一人も活けて歸さじ。」と罵りければ、悪棍等は猫を見たる鼠の如く、何地ともなく逃げ行きけり。時に此の花街に雙びなき、逢州といふ全盛の遊君あり、思はずも今の騒動にて、揚屋に通ふ路をふさがれ、側に傍徨み、敢て驚くけはひもなく、眞紅の總角結びさけし、緞張の團扇にて、面にかゝる土埃をうち扇ぎて居たりしに、今御所の五郎藏が、淺間の君なる由いひつるを、聞くと等しく蓮歩軽く徒して、自ら巴之丞が手をとり、「最危き事に侍る。」など、慇懃に勞り、落ちちりし扇疊帯を、禿をして取り上げさせ、五郎藏と打連れだち、とある茶亭の樓にのほり逢州いひけるは、「過刻に五郎藏主のいひ給ひしを聞き侍るに、君は正しく淺間巴之丞良治公にて在すべし、そも何等由縁ありて、輕々しくも此の處に、到り給ひし。」と聞ゆるに、巴之丞も竝ならず驚き、「御身いかにしてや我が名をしりけん。」と、なほ詳かに問ひ明らかとなす折、花車一人走り來り、「逢州主はや暮近きに、とく急がせ給へ。」と催しければ、逢州は残り多けに座を立ち上り、此の花街の風俗にて、大夫主戀たちうち集ひ、揚屋いりといふ事の侍ふ。今は心せき侍れば、暮れなば妾が座敷に請じ、寛やかに語り申さん。年頃會ひ參らせたく、且夕心にたえざりしに、いかなる風が君を柳の巷になびけんと微笑み、事なれし様に裾をあつめて、いそがはしく梯子をくだりければ、巴之丞さらに不審はれず、「遊女といひ汝といひ、我を深く敬ふ面

ぶりなるが、何等縁故ある者にや、其の事はやく語りてよ。」と問ひ給へば、五郎藏は涙を流し、「前髪はらひて面がはり、斯く寢しき姿となつて、名をも御所の五郎藏とあらためれば、御見たがへも宜なり。若年の刻は君の御側に侍ひし、須崎角彌にて候。」といひければ、巴之丞再びおどろき、「さればこそ何とやらん、面貌に見おほえありとは思へども、其の人なりとはしらざりし。互に丫角のころなりしが、よくも我を見違へず、過刻に酔興の奴等を追退け、危急を忽ちすくひしも、三世の機縁盡きざる故にやあらんずらん。」と、隔てなき言葉に、五郎藏は女めかしくも涙とゞめかね、「若氣の花のあだし心より、御母君遠山尼公の御侍女、杜鵑花どのと密通し、既に縛首も刎ねらるべきところ、思ひかけずも遠山尼公の御計らひにて、不思議に命たすかるのみか、金まで給はりし鴻恩、報い奉るをりもがなと、思ふに甲斐なく疾くも無常風吹きて、此の世を去り給ひしと聞く悲しさ。斯く今は國を隔てつれば、御墓にさへ詣で奉らず、朝な夕な思ひ煩ひし折に、幸ひ京都にいたり給ひしよし夙かに聞き、露大恩を報ぜん」と、餘所ながら守護いたせしに、一點の赤心を神佛も哀れとやみそなはしけん、計らずもめぐりあひ奉り、某が喜び此の上や候へき。」と、はじめをはりを物がたり、美酒鮮魚をとこ狭く持ち出でて、なほ三五人の歌妓をむかへ、琴を弾らし今様の早歌など、こゑおもしろく唄はせ、其の實義面にあらはれければ、巴之丞も彼が志の切なるを深くよろこび、か

さねて言ひけるは、「いかに五郎藏、世をしのぶ身のうへなれば、名を改めしは宜なれど、御所といへる姓は、地名ともおもはれじ、是れには一定因縁あらめ、語りてよ。」と宣ふに、五郎藏うち笑ひ、「申し出すも徑庭しくは侍へど、往年五月二十八日、雨風のはけしき夜、鞘當言葉とがめよりや事おこりけん、酔狂の客手に白刃をひつ提げ、大わらはにて走り巡り、めざす敵を取逃せしが無念とて、知るしらぬ分ちなく、往來の客を三五人、淺疵をおはせし愚者あり。小人彼の酔狂人をくみとめて、柳巷の騒動を静めしが、時に五月二十八日、善悪もしれぬ五月暗、其の昔富士の裾野にて、曾我五郎時宗を、御所の五郎丸が抱き止めしに鬘髻たりと、誰いふとなく異名とはなり侍ふ。又御所といふに因み新開荒藏、二宮太郎兵衛、梶原平平、秩父重すけなど、鎌倉武士の名をかたどり、大一大萬、二瓶子、三瓶子、龜甲、或は花靨のたぐひを染めし、湯帷子を著なしたる俠客は、悉小子にしたがふ者共なれば、若しや御夜歩行のをりもあらば、御供に俱せらるべし。夫れはとまれ君を此の茶亭に誘ひまゐらせしは、田字草の長が許に名だかき、逢州と申す全盛の花魁なるが、君にかねて逢ひ参らせたきななど聞えしは、小子更に不審はれず、御心當りも侍ふや。」と問ふ。巴之丞頭をふり、「否我も其の事未詳しと思へども、彼が言葉に今宵我をむかへて、物がたらんと言ひつれば、後には自來事のやうは知るべし。」と、仔細に語りふ間に、遊君一人何心なく樓にのほり、巴之丞をとみかうみ、居るも

はしたなく去くもはしたなく、眞白なる面さへも氣のほりて、紅梅つゝむ春の雪の、きえもいりたき面ぶりなりしが、せん術なう五郎藏が側に止まり居れり。巴之丞は是れにも心をとめず、杯にうつれる顔を熟とうち眺め、「いかに五郎藏、汝館にありし其のころは、母君もいと健かに在し、我も汝も前髪ありしが、斯く二人とも面替るは、箆投ぐる間より疾かなり。其の日は我家にありて、詳のことは知らざりしが、袖の渡の花見のとき、家臣星影土右衛門といふ愚者、我が戀のかなはざるを遺恨に思ひ、汝と杜鵑花が密通を視明はし、常言にいふ毛を吹いて劍にふるれば、己疵をうくるの理、杜鵑花に送る艶書を落し、三人齊しく其の席より追ひ拂はれしとやらん。母君の宣はするは、『まだ角彌に妻もなく、況んや杜鵑花はゆひなづけし夫さへなければ、不義にして不義にあらず、互に思ふ中といひ、天のなせる良縁ならんに、斯く分明き事に及びつれば爲便なし、折もあらば往方を尋ね、勘氣をゆるし得させよ。』と、密かに我に宣ひしが、はや徒らに六年あまりの春秋を過しつ。』と懐舊の涙つゝみかねて見えければ、五郎藏も漫にも悲しく、頭をたれて回答さへなしやらす。巴之丞潸然たる涙を止め、「やよ五郎藏さな歎きそ、今日はからずも廻りあひつるこそ幸ひ、都在番果ててのち、國の老臣にも聞えあけ、陸奥によび迎へ、元の武士にとりたて得させん。』と言ひつゝも、何事やらんおもひ出でてうちほ、笑み「我ながらいと愚かなる物のいひさまや、此の事は今語らずともお

そうなし。さきより事に紛れて問ひ洩らせし、杜鵑花もいと健かなるか、愛子にても儲けしや。』と問ひ給へば、五郎藏側に屈みをる遊君の手をとり、巴之丞が前に誘ひ、「申し出づるも面伏なる事にはあれど、小子往ぬる年病に罹り、貯祿つきて仕方なく、彼の逢州主と同じ長、田字草のものと遊女に賣り、僅かの金に身をかへて、我が妻にして妻ならぬ、此の遊女こそ杜鵑花がなれる果てに候。』と、語る中より彼の遊女を熟見るに、果して杜鵑花なりければ、「こは思ひかけず。』とて、巴之丞なみならず打驚き、それも彼も涙をそふる種なりけり。杜鵑花は只面を根らめ、却退りのみしていふ事をしもしらず。や、ありて「君かかる所に居給はんとは思ひもつかず、漫に此の樓に登り来て、かく婀娜めきたる姿にて、あひまゐらす事面なくぞ侍る。噫今さらに思ひ出せば、はてしなき涙に絞る、袖のわたりの櫻どき、戀風故にちりてゆく、身は春ながら秋さびし、白河の關うちこへて、遙けき都におもむきつ、御母君より多なる金は賜ひしかど、女夫とも活計のみちに疎く、譬へにも坐して汲めば滄海もつくるの期あり、一葩づゝに落る花の、梢は早く青葉となり、知方のもとにをる田鶴の、ともしくなりし其のうへに、五郎藏が長の病苦、首の飾りや側調度さへ、皆賣盡して仕方なく、つい歸るべき鳥の卵の、すもりが長に身を委ね、晝くに懶き眉墨の、似氣なき年に恥ぢもせぬ、鹿子目結のひきしごき、面にはわらひ心には、泣いて待つ間をまたぬ間と、見すれば長し曉の、鐘は怨みて湯

となるとも、煩惱の汗れ洗ふによしなく、穢土の中の穢土とや言はん、苦しき海の中に苦しき、實に
 遊女ほど甘身ものは侍るまじ。」と物語るを、五郎藏は目をもて言葉を止めれば、はやくも其の心を
 えて、涙搔拂ひ笑ひに紛らし、「君には氣の結ほれをひらかんと、遊里にいたり給ひしならんに、心な
 くもしめりがちなる事聞えしは、我ながら鈍ましや。」と、歌妓もるとも琴を調べ、朗詠など唄ひけれ
 ば、巴之丞も漸く心うきたち、「かかる事なん心を勞する事なけれ、我國に歸りて後は免も角も計らひ
 杜鵑花をも贖ひ出さん。」と宣ふに、二人も斜ならず喜び、杜鵑花は疊帯より鬘櫛取出でて、巴之丞が
 髪の亂れを搔きあけなんとする間に、金鳥は西山に傾き、清水寺の晚鐘、鐘々と音互えて、是れなん
 解語花を催す羯鼓ともいふべく、數の遊君我劣らじと粧ひをこらし、天飛ぶ鴈の連なるが如く、大略
 を裔々とゆく様は、心言葉も及ばれず。杜鵑花は元より里馴れし女なれば、何くれと心をそへ、蒲筵
 敷きみて、巴之丞を高欄近く移し、あれ見たまへや艶々として、唐綾の袿にかゝる黒髪は、尾花のす
 るとうちみだし、堰崩しに水車、蹴出樓にそめたるは、河隈の長に名高き、經寫大夫に侍るなり、茶巾
 帯の紋をつけ、笠と鷺と橋をそめしは、鶺鴒の隠語、遠波の長の如意の君とか覺え侍る。梯子の棊
 局の鹿子いり、小栗くづしの今様染、白野の長こそ孔雀の君と申すなり。摺箔の團扇にぐる／＼の上
 繪いりは、おなじ長の河菰姫、亂菊そめしは力命大夫、甲乙の丸は孤蘇の君、大小の丸、うねすぢは

石船屋の小馬、白女、横菖蒲に物の本は、珠藻の長の中君觀音、次なるは字男、香爐、小兒とか號し
 侍る。これらは悉蟹島、江口、神崎などに、名高かりし遊君を慕ひ、其の名をよびつるとか承り
 侍る。」と覺えしまゝに、物語りければ、巴之丞も殆ど興にいら、又杯を廻らしける。此の時逢州は
 少しく後にひきさがり、一しほ粧ひをこらし出てしが、鶺鴒に見つるよりは艶色彌まさり、鶺鴒の
 鶏の羣にたてるに似て、今まで花と見つるも、此の花に匂ひを氣壓され、數の遊女は唯常磐木の色
 なきが如し。良ありて逢州再び茶亭に來り、「しばしそれにて待ちねかし。」と老女と禿はすだれの外に
 残り、さら／＼と衣のおとなひして、樓に登り巴之丞が側近く居より、「過刻には心せかれて、事の
 やうを聞えあけず、先づ是れ見給へ。」と、手把につゝめる巻物とおほしき物を差出せば、繰返し熟
 見て、巴之丞おほいにおどろき、「是れこそ我多年懇望するところの、茶道傳授の祕書にして、奥書に
 團一齋とするせしは、則ち我が茶道の師なり、御身いかにしてかかかる品を持てりや。」と問ふに、逢
 州は雙眼に涙をうかめ、「妾は一齋の娘、忘貝と申す者にぞはべる、父一齋君より大なる金をあづかり
 參らせ、御館より歸りがけ、盜賊に出會ひ、彼の金を残りなく奪ひとられ、剩へ手疵をかゝむり、
 其の曉の星もろともきえゆく身にも、君の事心にやか、りけん、「せめて茶道の祕書なりとさ、けま
 るらせ、少しは罪を贖へ。」と、遺言はありながら、未だ吾が身はをさなくて、御館にまるらん心もな

く、冤や角思ひ屈したるうち、心ねぢけたる仲父故に、様々の辛き目見て、遂にはかかる憂き身にぞなり侍る。」と、涙とともに語りければ、巴之丞も睨しげた、き、「我も一齋が非命の死を畧聞けり、國を立ち退かざる其の昔、斯くと聞えば爲さん方もあるべきに。」と、情ある言葉に逢州は「唯悲し。」とて泣く。杜鵑花五郎藏も、「こは思ひがけぬ事なり。」と、或は歎き或は喜び、共に奇縁を感じける。さて杜鵑花巴之丞に向ひ、「逢州主とは姉妹の如くかたらひまうせど、一齋主の娘にてあらんとは、妾さへしらざりし。」と言ふに、五郎藏も側より、「杜鵑花の心づかざるも宜なり。我は若年の刻君の使として、一齋どのの家にいたりしかば、幼なきをりは逢州主を見参らせし事もあらんが、今まで露それとも知らざりし、思ひ出づればいと幼き女子、昏にて雑造りて居給ひしが、それにてやあらん。」と打笑ふに、逢州は歎きの裏にも恥ぢ思ひ、「其の後はいひ給ふな。」と、漸くうち微笑み、「無益き周諄して、さぞ心な女とや思すらん、先にも申す如くなれば、其の祕書は君の方にとめおき給へ。」といふを、杜鵑花はよき折からと杯をとりあけ、「逢州主にも竹葉過し給ひて、憂へを拂ひ給ひね。」とす、めつ、少時めぐる杯に、巴之丞も大いに酔ひを發し、逢州が艶なるに心や移りけん、眉去り眼きたり、屢顔打ちまもるを、杜鵑花は疾くその心を推し、逢州が連れ來りし杉といへる老女に、「かくこそいへ。」と私かに語りひければ、杉は頓て樓にのほり、「君にはいづこの花にもあれ、一夜あかさん

とていたり給ひしならん、夫れ彼といはんより、縁深き逢州主のもとにいたり給はば、我がともがらこよなき幸ひならん、杜鵑花ぬしいかに思すや。」と、己が心より出でつる如く言ひけるに、巴之丞は早くも意中を言ひ的てられ、流石面なくや火かけに顔をそむけ、「よきに計らひてよ。」と他の事はいはず。杜鵑花は心に喜び、「いざ逢州ぬし君を誘ひ参らせ、なほ言ひ洩らしつる事共を語り給へ。」といへど、逢州は顔さと赤うなし、「禮なき事ないひ給ひそ、賤しき身にして争で君の縛をとるべき。」と、辭む様にもてなせど、是れも満面に笑みを含み、心春めきて見ゆるに、「あなをさなきふるまひや、冤まれ角まれ田字草の家にゆき給へ。」と、杜鵑花は心輕けに、先に進みて立ち出でければ、「五郎藏は明日來りて、又もや會ひ参らせん。」と、己が家にかへりける。扱も巴之丞は二人の遊君とうちつれ、程なく田字草が長の家に到り見るに、すこし奥まりたる處あり、是れなん逢州が物ずきにて、經營りまうけし座敷とおほしく、前に透垣のひめぐらし、はては廣々と限りなき庭につくりなし、むづかしけなる大路のさまは、ものふりたる木立に隔たりて見えす、今まで闇はしきには引きかへ、閑窓深々に輝き、異國にありといふなる夜明簾かとおもはれ、高麗百濟のにしきにや、衣桁にかけわたしたる桂は、九花帳ともいひつべし。牀違棚には唐匣薰籠香棚をはじめ、棊盤雙六盤貝桶追松、歌ぐさり文

字ぐさり花結の類、もてあそびのくさくさへ、漏るゝところもなくおきならべ、側に大きやかなる竹器をする、最とうるはしき唐羅麥を活けたりける。ほどなく屋廊に人のけはひして、女童歌女など、數多酒肴を持ちいでければ、再び爰に酒宴をひらき、目馴れざる歌妓が舞ひぶりに、おもはずも杯の數を重ね、酒宴も闌と見えけるを、杜鵑花それと心づき、ありあふ人々とうち連れ、此の席を退出ける。

第二

田字草が長にて逢州時鳥姉妹の

名のりをなす 竹器の瞿麥恨みの風に散る事

其の夜も既に更けわたり、雷公遠く響き、雲のた、すまひ例ならず、雨少しうちそ、ぎけるが、程なく雨やみ雲散りしと思しく、月光窗をうがち、ねぶたけなる曲子の聲さへ、物がなしく聞えけり。斯くて巴之丞は須臾鴛鴦の衾にまどろみ、眼をひらいて枕邊を見れば、逢州は鶺鴒に起きたち、野風呂やうの物、手づから打扇ぎて居たりしが、巴之丞が目ざめしを見て、「最早三更も過ぎ、四更にも近かるべきに、煎茶一碗きこしめされ、竹葉の酔ひを醒し給ひね。」と差出せば、心地よけに飲み終り、何くれと物語なす序に、巴之丞言ひけるは、「我年來不便の者に思ひつる側女あり、名は時鳥と呼びぬ。然るに御身の容貌、彼の女によくも似たり、縦ひ姉妹なりといふとも、誰か空言なりと言はん、御身

にも妹ありや。」といひければ、逢州心えぬ面振して、「宣ふ如く一人妹も侍ひしが、由縁ありて胤腹とも異なれば、妾には似もやらず、其の時鳥の方とやらんは、何等の家の姫君にて坐すや。」と問ふ。巴之丞答へて、「彼は高貴の深窓に成長りしといふにもあらず、丹波國木の瀬といふ鏡師の娘なれど、彼四歳のとし淀の夜船の暗紛れ、とり違へたる糺子にて、實の父母は何なる人といふ事をしらす、其のむかし母は病ふのひまもなく、姉と寢臥を共にせしを、子心に覚えし。」と、語るを聞いて逢州は膝をすゝめ、「その事にしあらば、妾もおもひ出す事の侍る、妹は糺し中なりと糺に聞え侍りしも、淀の夜船の取替子、宣ふに露たがはず、妾が實の妹の方には、證據となるべき品もなければ、とりちがへたる後の妹の守袋は、笹蔓錦。」といふを抑へて、「その中にいれありしは、一寸八分の觀音にやあらん。」といへば、逢州忙はしく、「君それを如何にして知召すや。」「こは淺き問ひごとや、その二品を所持する女の養親こそ、時鳥が實の父母と、木の瀬が彼に物がたり。さては御身の妹にてありけるか、こはくいかにかに。」となみならず打ちおどろき、夢現ともわきかねて、逢州は聲くもり、「絶えて程へし實の妹、今は何地に住む事と、旦夕おもひ出せしが、君の御側に侍ひしか、歸らせ給ふ其のをりは、妾も國へ俱し給ひ、顔見せて給はれ。」とうち泣けど、巴之丞吻と吐息して、「われもさこそ思へども、爰に二つの難儀あり、御身に聞ゆるも便なけれど、我が室羅麥と言ふは、原雲の上にも立交らひし女

藤なるが、天性心かたましく、時鳥を愛するすら妬くおもひ、去年の秋三五の夜、時鳥を月見る筵に招き、彼原来田舎に成長ち、雅言をしらざるを聞き出し、佞けたる侍女と示し合はせ、琴をしらべよ歌を詠めよと、さまざまに責め苛み、飽くまでに恥辱を與へし事あり、御身も國へ連れゆかば、又いかなる憂目や見ん、われ罹麥を退けんとはおもへども、時の大臣たる師良公の女なれば、容易くは計らひ難し。其のうへ時鳥も良夜に嘲せられ、心氣をや勞しけん、遂に病の牀に臥し、面上に惡瘡を發し、風の燈花草の露、消ゆるに程なき命とはしりながら、公の命默止し難く、心づよくも華洛にはおもむきぬ。今ははや冥途の鬼とやなりつらんが、我も心清々しからねば、告げしらすざるとはおほゆるなれ。」と、仔細に物がたれば、逢州は猶はふり落つる、涙の間にいひけるは、「一世に妾ほど寔しきものは侍るまじ、後の妹の寄居蟲も、今は行方をしらなみの、離れくの磯ちどり、色の水巷に水馴棹、なみだの雫したりて、袖はかわかぬ楫まくら、蘆の一夜の假臥に、前の妹の行方は、夫れとしれども陸奥の、ちかの鹽竈近からぬ、雲居にへだつ時鳥、冥途の鳥となつたりとは、妾に泣けといふにやあらん、言うてかへらぬ周諄ながら、花街に來たるそのときより、花をむすび琴をしらべ、總て客をむかふるに、興となるべき遊藝は、をさなきながら覺え侍る。姉が琴を調ふるは、賤しき活計のたねとなり、妹が琴をしらべえざるは、面なくて病となる。しらするも恥ならん、調べえざるも

辱ならん。三人の姉妹かくまでも、辛き目見つるは前世に、いかなる罪や作りけん。」と、涙袖にあまり、泣きみ悲しきみいつ果つべうも見えざれば、由なき事を言ひ出でしと、巴之丞は悔い思ひ、「さ歎き給ひそ、一定死せりといふにはあらず。全快なれば御身を國によび迎へ、めでたく對面なすべし。」と、漸う言ひ和め、左右を顧みれば、一面の玉琴あり。長磯には水にちりうく櫻花を、牙骨螺鈿をもて鏤め、又枕膝琴の文字あり。是れ幸ひと取り下し、逢州が前に直し、今宵はいひ出す事毎に、胸つづれ涙こぼれ、遂に遊興の趣を失へり、先で珍らしき雅操を聞いて、鬱情をはらすべし。」といひければ、逢州は退きがちにて、更に手も觸れやらす、「争て妾琴弾く事をようすべき、願はくは君一曲を奏し、鳥も驚かせ給へ。」といふに、巴之丞につこと笑ひ、「御身花街に赴きてより、それくの師をむかへ、琴を調べ花をむすび、客を迎ふる興となすといひつるを、はや忘れしや。」と、言葉のとぢめに仕方なう、赧然たる顔をあげ、「よしなき事を言ひたるうへは爲便なし、遊女のあさましきは、たゞ燕なる曲のみつねとなり、雅音はいづちへかきえゆき侍る。そこは斯くせよ斯うせよと、をしへてだに給はらば、たどるくも調べ侍らん。」と、うひくしげに琴とりなほし、少し燈をそむけ、こゝろみに調子掻きあはせ、心にいれて弾きすさみけり。彼は原雅樂堪能の家に就きて奥義をきはめ、夫れを今やうにとりなし、入調したる新聲なれば、燕にして淫聲にながれず。巴之丞は高欄を背にしつ、

少時聞き惚れるたりしが、狂雲月をかくし、さらりと音するを、又雨や降り出でけんと、ふりさけ見れば軒近き、青柳の涼しきかぜにゆらめきて、板廂をはらふにぞありける。時に不思議や笛竹のおと幽にきこえ、漸々に近よりつ、柴折門の外に傍徨み、やがて琴と同じ聲に吹きあはせければ、笛は琴にしたがひ、琴は笛にしたがひ、清雅正に澄んで、音律よく合度ひ、清幽哀怨と、程拍子こまやかなり。巴之丞はつと身を起し、「あら訝しや昔唐朝玄宗皇帝、瀟浦といふ地の竹をきりて、遊仙笛を作る、我それに倣ひ、紀伊國和歌の浦なる弱竹にて、横笛を作らしめ、男波となづけ秘藏せしが、彼のふえの音によく肖たり。何人ならん心得ず。」と、軒にかけたる燈籠をとつて照らし見れば、二八ばかりと見ゆる手弱女、女童二人ひき俱し、笛に心をとゞめ、地摺るばかりの兩袖の、袂は夜風を含ませつ、紅裙翻つて飄々然たる形勢は、舞女などの媚かしき姿にてあらず。あな心憎やと目もはなたすまもり居る。折よく雲やぶれ月いと明く照りまさり、燈籠の火影を借らず、さやかに見ゆる美人は、おもひもかけぬ國に残せし時鳥にぞありける。巴之丞大いにおどろき、手にもつ燈籠とり落せば、はつとばかりに燃えあがる、火影に此方も見上ぐる高樓「時鳥にあらずや。」「さ宣ふは殿なるや。」「こは思ひもかけず。」と互に言ふ事をしも知らず。稍ありて、「やよ時鳥、御事はいかにして此の處へは來りしぞ、物語るべき事も多なり、先で此の樓に登るべし。」と、いふに嬉しみ見上ぐれど、名

のみなりけり時鳥、翼なければ仕方なく、月影隔つ見越の松、枝きるべしとや場師が、かけおく階子を幸ひと、雪なす腕を指しのべて、力も用るすいと軽々と、軒にうちかけするくと、巴之丞が前に來り、「妾不思議にも、九死を出でて一生を得、心地常にかへりしより、只管君に逢ひ參らせたく、瞿麥の御方にしかくの由聞えあけ、兔も角もとの命せをうけ、道はかゆかぬ女の旅も、片時もはやく健かに、わたらせたまふ御顔を、見まく思ひて足もすゝみ、過刻に御館へ到着せしが、君はこよひ此の花街に、わたらせ給ふと夙かに聞き、此の男波を持ち參りしを幸ひ、しただみたる音ながら、章臺を吹きありき、よそながら尋ね參らせしに、果して此の樓にて會ひ奉り、妾が喜び此の上や侍るべき。」と、よらまくせしが逢州がまへを恥ぢ、うち微笑みて手をつかへ、更に禮は亂さざりけり。巴之丞なのめによろこび「我國をいづる刻は、おことに力をつけまく思ひ、勇ましき事のみ聞え、ことばには出さねど、心のうちは陽世の、きたなき魂になりなんと、人しらす涙おとせし折もありしが、かく清々しくなるのみか、昔にかはらぬ艶なる顔となつたるは、優曇鉢華の盛りにや比せん、浮木の盲龜大空を見るにや譬へん、喜びの其の上に又悦ぶべき事のあるなれ、是れなる逢州といふ遊君は、元我が茶道の師、團一齋がむすめ忘貝といふにて、淀の夜船に別れたる、お事が實の姉なり。」と、聞けど不審ははれやらず。「扱はおまへが姉上か。」「妹にてありけるか。」と、側近く立ちよりしが、いとを

さなき時別れつれば、實の姉妹なりとは、姉も妹も思はざる形勢にて、笑ひもやらず泣きもやらず、少時まもりるしが、時鳥が嬋娟たる粧ひに、心中私かに怒りを生じ、巴之丞に對つて言ひけるは、「時鳥の方とやらんは、去年の秋より病に罹り、枕をもあけ難し、今ほどは死にやしつらんなど、宣ひしにはひきかへて、此の女郎を見侍るに、面瘦もし給はず、臞れしさまは更になし。思ふに妾に妹のある事を、杜鵑花ぬしに聞き給ひ、御側室のそのうちより、媚ざまよきを選び出し、君はしらぬ面振にて、此の處へよびよせつ、花にまじれば常磐木の、色も香もなき妾が姿、氣壓さる、はいとはねど、姉妹のなのりをなさしめ、後にて笑ひ給はんとは、戯れも品によれ、斯かる事は許させ給へ。」と、いと不興氣に見えければ、巴之丞は案に違ひ、「時鳥がやまひ頼に快くなつたるは、我も未詳しみおもふ處なり。」と、なほ審かに語らんとす袖を控へ、時鳥のいひけるは、「總て娼婦白拍子などは、別に計策をまうけ、男子の心をいざなふとか聞き侍る。斯かる條を怨ずるも、唐音にてれんつかふとか申す、手管にやはべりなん、淺ましの一夜妻、花の巷に小寝るより、魂も胡蝶と浮れては、彼の燈蛾燭をはらふ譬へにも近かるべし、いざ御歸館を催し給へ。」といふに、逢州うち腹たち、「夜毎にかはるまくらの數、淺ましの身なりとは、そなたがいひ給はずとも、よく心得ては侍れども、霜に機おる織婦も、浪に棹さす漁翁も、客も横陳の娼婦も、活計なればせんすべなし。心よりなす好色には侍

らじ、強ちに媚ひ笑ひを獻じ、色を以て權勢を、とらんと計る心よりは、娼婦なれど妾が心は、最清う侍るなり。」と、にべなき言葉を、時鳥は聞かぬ様にもてなしつ、急きたつ胸は鎮むれど、涙目にあふれ身ふるはれて、怒り面にあらはれければ、巴之丞今は言ひ諭すに言葉なく、有合ふ姿見の鏡をとつて、文車のうへにおき、逢州も時鳥も、「我がいふ事をよく聞くべし、計らざる對面ゆる、互に實とおもはざるも、理なり。此の鏡にお事らが顔をうつし、姉妹とてあらそはれず、其の顔の肖たるをもつて、二人が疑念はらすべし。」といふに、流石いなみもやらず、一雙の美人一時にたち向ふ、其のさま齊しくして異なり、時鳥は原蓬生の家に成長るといへども、既に良治が寵を得てより、蘭閨に花帳を垂れ、桂殿に珠簾を下し、車ならざれば外戸にゆかず、輿ならざれば傍門を出でず。されば二八の員はみつれども、よろづ臆し勝にて、世になれぬ未通女の如く、舉止爛冶なり。其の打扮如何となれば、海松房の黒髪を、深草流にゆりかけ、身には紫苑色の練衣に、菊流を摺箔したる袴を穿し、二ツ割の繻珍の帶脊高に結び、袖刀の隠しざし、手には珊瑚の蟹眼うつたる、泥繪の扇をもち、桃顔露はに咲みて、微しく皓齒のいづるを覆ひたり。惜しむべし膚は肥えたりといへども、枝おもけなる牡丹花の、一村雨の露をおびたるに似てなほ艶かなり。又逢州は計らずも、荆棘の林に身を沈め、艶色あるを以て遂に花魁のくらるに著き、名は殆ど三千の列をかね、情の海に沉魚を漁り、戀の山に落鴈

を狩す。されば二九の員にすぎざれど、事なれし様は、三輪ぐむ老女にもたちまさり、聲妙に質うるはし、其の打扮如何となれば、髪は假鬘の放髻結、鬘鬘にゆひあけ、身には當世やうの朧染、摘鹿子のあひだには、秋草の種々を、友禪繪にいろどり、紅襟おのれなりにしどけなう、下には白無垢黄無垢をかさね、黒紅の一重なるを、ひきしごきの貝むすび、しやうどけをつくろはず、あの人と彫りたる釵をとつて、こほれかゝる鬘の髪を掻きあけつ。憐むべし肌はすこし瘦せたりといへども、野面に生ひし女郎花、風にもまる、風情にて、なほおもむきあり。嗚呼かかるすがたを觀ば、何人か臭き皮袋の裏、三十六種の不淨物ある事をしらん、懼るべしつゝ、しむべし。さても逢州時鳥は、鏡にうつる顔と顔、熟とうちまもれば、實に巴之丞がいひしに違はず、肖たりやく、花菖蒲、いづれとわかぬかほよばな、さては實の姉妹かと、たがひにおどろき見合はずはすみ、時鳥の指櫛を、はたと鏡のうへにおとし、をさなき時のありさまを、おもひ出でていひけるは、「いかに逢州どのとやらん、おまへが實の姉さまならば、妾が三つの秋のころ、此の鏡見るやうに、井戸を覗いて遊びしとき、芥子坊主へさした塗櫛、おとした事のありけるが、夫れを覺えて居給ふや。」と、おもひがけなき問ひ事に、逢州少時思案なし、「妾はそなたに三つ増しゆゑ、いかで夫れを忘るべき、井戸は春戸の小高き處、團栗のなる大きな樹のした、然もそなたの落した櫛は、蛇田村の地藏尊、二十四日の市のとき、爹々と

連れ立つて、姉が買うて貰うたを、わたしもささねばならぬとて、やんちや言やつてひつたくり、形に似合はぬ大きな櫛を、芥子坊主へさしたゆゑ、おとした井戸の水の上、浮いては見ゆれど取る爲便なく、妾もともに泣いて居たを、切平が賺しこしらへ、其のかはりとして鬼灯を、七つもらうて姉がひに、妾は四つ其方は三つ、むいて見たれば四つながら、姉のは蟲が喰うてゐて、やくにたたねば其方のを、一つたもれたもらねば、明日よりは平生のやうに、負うて遊びに出やせぬと、喝しても聞きいれず、逃ぐる拍子に、濼、片足泥に踏みこみて、紅履絲の草履を汗し、又泣いたを覺えてゐる。」と、聞くに悲しく時鳥は涙さしぐみ、「其の春おまへは寺いりして、淺香山の手本をもらひ、手習なざるが羨ましく、まだ幼なき秃筆、わけもない事書きちらし、手本を墨でよごしたを、おまへが大いに腹立てて、妾は撃たれて額に瘤、泣いてゐたれば母さまが、妹のわるいは知れては居れど、をさなうても女子は女子、なぜ言葉では叱らぬぞ、夫れは姉も長しう、ないとおまへが叱られたを、妾は嬉しう思ひしが、今となりては勿體ない。」と、聞けばきく程逢州は、胸にこたふる物がたり、わつとばかりに泣き出し、「その事をおほえて居やれば、疑ひもない妾が妹、夫れ覺えても居たまはん、鄰村の二五作の兄人、都土産のおやま形、其方も妾ももらうたとき、美しく髪結うて、よい衣著たが羨ましく、妾やおやまになりたいたいと、由縁もしらずにいひつるが、遂に曲中の憂きつとめ、こまどりせしは昔に

て、今は此の身も籠の鳥、花車や遣手はその折の、鬼より強う逃げかくれ、淺まし身の果てや、思へば昔なつかしや。」と、口説き歎けば時鳥も、や、暫時涙にくれ、「其のおなげきは理ながら、をさなきときのしのばしきは、妾とてかはりはなく、鳩の車の手遊びに、三枝の禮は露しらず、反哺の孝もつくさぬに、烏萬度の月と日は、つい夢の間にすぎゆきつ、戀しくとおもひたる、其の姉上にあひながら、空言なりと思ふより、遊女よ白拍子よ、てれん手管の空言と、思ふさまにいひつるも、世界しらすの内鼠、心の狭き故なりと、思ひかへして腹たてず、此の上ともに時鳥、それは斯くせよさうせよと、たらはぬ事の侍らば、言ひ教へて給はれ。」と、いへば逢州顔赧め、「妾も嚮に腹たつま、不良き事を聞えしが、今となりては面目ない、連なる枝に咲く花も、雨露の恵みに開きしと、手折りて瓶に活したるが、水の力に咲きしとは、色香異なる事もあり。侍女にかしつかれ、國司の愛妾と、亡八がもとの遊女とは、などひと列に語るべき。心限なく此の上は、姉に禮儀を教へてたべ。」と、はじめのあらそひ引きかへて、言はれ難く姿は窈窕、或はよろこび、或はなげき、いつ果つべうも見えざれば、巴之丞いひけるは、「御身等さ歎くは宜なれど、是れ皆いひてかへらぬ練言なり。互にいひもし聞きもせで、叶はぬ事も多なるべきに、無益き涙止めてよ。」と言ひ諭すに、逢州漸く顔うちあけ、「女はよろづ言ひ甲斐なくて、涙もろきが常なれば、不意き對面を、喜ぶことは外になり、悲歎に時をう

つしたり、やよ時鳥淀の夜舟の一條は、父の物語にて聞きつれば、問ふにおよばず夫れより以來、いかなる里に身をよせしや、それ聞かまほし。」と、いへども涙に哽咽り、頓に回答もなしかねて、「さればとや妾を誘引ひ行きつるは、木の瀬といふ鏡師にぞ侍る。周く索ね巡りしかど、父上姉上御行方の知れざれば、泣き居る妾をさまざまに言ひ寛め、彼が古船丹波國、柏原といふところへ將て歸り、實の娘とあはれめど、妻は木の瀬に似もやらず、心ねぢけし性にて、母よと慕へど子と呼ばず、何國にか愛子を失ひ、素性も知れぬ他の子を、連れ歸るものやある、顔見るさへもうたてしと、撃たれたり叩かれたり、脊なかに痣のたゆるまも、なくく送る憂き年月、父の木の瀬は程なく死て、邪見の母のみ一人となり、なほ彌増に責めはたられ、死なんと思ふもいくそたび、その艱苦いふべくもあらねども、父上母上姉さまに、巡り逢はんをちから草、道ならぬ事と知りながら、夜に紛れて忍び出で、國々を流離ふをり、如此々々の由縁ありて、君の鴻思うけつるなり、思ひもかけず姉上には環り會ひつ、此の上の願ひには、はや雙親にあはせてたべ、今は何地に住み給ふ。」と取纏れば、逢州はよ、とばかりに泣きしづみ、「語り出づるも涙のたね、兒心にもおほえやせん、母上は元病がち、又その上に其方の往方、しれねばいと心氣もつかれ、思ひほそりて亡人と、なり給ひしは十年のむかし、又父上も妾が十三歳といふ春の中旬、筒様々々の事ありて、人手にかゝりて果て給ふ。」と、聞く時鳥は狂

ふが如く、「そは何と宣ふぞ、父上も母上も、はや此の世を去り給ひしとや。こは何とせん寒しや、して仇人は何方の孰、などとくには討ち給はぬ。いひがひなき心や。」と、諫め激ます心操、感ずる裏に猶悲しく、「その人を知る程なら、討ちえる事は稱はずとも、一太刀恨までおくべきや。命も身をも惜しまねど、在所はさらなり名をさへ知らねば仕方なく、無念の月日をすぐしつ。」と、ものぐるほしく語るにぞ、時鳥は涙搔拂ひ、「口惜しきその上に、又口をしき事やきく。此の身は奈落に沈まば沈め、悪鬼毒龍と生をかへ、父の讎我が身の仇、夫れ彼恨までやあるべき。」と、丈と齊しき黒髪を、右左へさとふり亂し、花の顔色朱を洒ぎ、すつくと立つて傍を顧み、竹器に挿したる瞿麥の、花熟とうちまもり、侘しげに莞爾とわらひ、「あら心憎くも咲きつるかな、おきそふ露と消えてはかなき、黄泉のおにのしこ草と、なるは誰ゆゑ此の花ゆゑ、恨めしの瞿麥や。」と、柳の眉ひきあけて、はたと目注に睨みければ、露を含みて生々したる、花も忽地色香をうしなひ、そよとの風も吹かなくなに、颯と許りに飛び散つたり。巴之丞逢州は、衿より水を洒ぐが如く、小夜風骨に徹つて、もの寥き事いへば更なり。や、ありて、「やよ時鳥、父が非命の死を聞きて、怒氣に堪へざるは、理あるに似つれど、御身にも讎ありとは心得ね。そは免まれ病愈えて程なきに、斯く心を苛だてなば、又病となりやせん、まづ心を定めてよ。」と、逢州ともく和むれども、たえて一言の應へもなさず、涙潸然と落し、項を

たれて泣き居たり。時に老杉板の杉は何おもひけん、廊にて首尾を聞きたるが、やをら障子を
おし開き、時鳥と顔見合はせ互におどろき、礮とたてきるひびきにつれ、あら怪しいかな時鳥が姿、
忽然ときえうせて、唯一管の笛となりぬ。折から逢州が鬘、阿呀と叫びて走り來り、「吾儕鶴に女郎
の連れ來給ひたる、二人の女童と打集會ひ、歌貝とりて居たりしが、兩團の鬼火となりしぞ、あな
怖や。」とて、息もたゆげに語るを聞き、逢州は何と思ひ辨ふ方もなく、「やよ妹は何方にゆきつる、妹
よ時鳥よ。」と呼びたつれば、外の方より一羽の時鳥、樓へ飛びいりて、不如歸々々と啼き廻り、
巴之丞が膝のほとりに落つると見えしが、白木の位牌となりける。慌はしくとりあけ見れば、葦實
結枯信女とぞしるしたり。扱は彼黄泉の鬼となるといへども、再び娑婆にすがたを理はし、逢州は我
が姉なりと、我にしらせしものなるかと、思ふよりまづ涙こほれ、惘然として酔へるが如し。まいて
逢州は夢現のさかひをしらず、少時は言ばも出さざりけり。浩處へ廊に人音して、喘ぎく走り
來るものあり、是れ則ち淺間の老臣、雪枝彌總太が一子、同苗小織之助といふ者なり。巴之丞聲をか
け、「あら心もとなや、汝は父彌總太と共に、國のまもりに残しおきしが、斯く慌しく來つるには、
必定ふかき縁故あらめ、語れよ聞かんするは。」と宣ひければ、「さればとや時鳥の御方、漸に病おもり
かになり給ひしが、ある夜何者ともしらす忍びいり、無残にも殺害なして立ち退いたり。君の寵佗に

異なる婦人なれば、等閑になりがたしと、夜を日に繼いで到著なし、君此の花街に漫行きし給ふよしは、故ありて聞き、尋ねまるらす折から、五郎藏とかいへる道往く若者、提灯に君の紋をしるしたるを視て、此の樓に忍び居給ふよしを、しらしたり。」とかたるを聞き、又もや悲涙袖をうるほし、「我國を出でつる時よりも、時鳥が爲體、なき命とはおもひながら、非命に死すべしとはしらざりし。やよ小織之助、時鳥が法號は、葦實結枯信女とはいはずや。」と仰するに、「君はやくもしろしめされ候、御位牌もこれに持てり。」と、手把を開きとり出でて、開けてくやしき亡靈は、手匣のうちの空しければ、うちかへし左み右みて大いにおどろき、出國の刻よりして、片時も身をなさず、封もそのま、ありながら、御位牌の見えざるは心えず、とばかりにては分説たたちがたし、尊慮にしたがひ、小子を罪なはし給へ。」と、最面なけに見えにける。逢州は嚮より涙にかきくれ居たりしが、「いやとよ小織の殿とやらん、あへて心な勞め給ひそ、其の位牌はこれなるべし。」と、彼の時鳥の化しつる位牌をさし出せば、小織之助は再びおどろき、更にいふよしもしらす。逢州又いひけるは、「妾は逢州といふ遊君にて、時鳥の方こそ、妾が實の妹にて侍る。箇様々々の縁故ありて、姉妹の名のりまでなしつるが、今おもひ合はすれば、此の世にきえて亡靈の、假にすがたをあらはせし、怨鬼にてや侍りなん。それと知りなばいふ事も、聞く事もあるものを。今よりしては且夕にあはる、事とおもひし故、夫れも是

れも言ひもらし、残り多さも彌増に、半熟顔を視もしたり、視られもせしは夢の間ぞ、ゆかしき悲しさ戀しさは、知らぬ昔に百倍せし。」と、いひかけて又泣き沈めば、いと理にこそと小織之助も、ともに涙にかきくれぬ。巴之丞は黙々として居たりしが、「嗚呼歎くは愚癡のなす處ぞ、生あれば必ず死あり、遅かれ速かれあだし野の、露になる身は如夢幻響、宿世の約束因果の道理、凡慮をもつて説くべからず、只此のうへは後世のいとなみ、追福こそ肝要なれ。」と、漸うにすかしこしらへ、ありあふ机に位牌をなほし、白牡丹となづけし名香を薫らせ、三人齊しく掌をうちあはせ、葦實結枯信女、頓生菩提南無佛々々と伏拜めば、怪しいかな枯骨に陰雨を注ぐが如く、最前散つたる瞿麥の、花はみるゝ猛火となり、竹器をすゑし花車に燃えつきて、彼の地獄の繪巻物にてみつる、火の車と言へるものの如く、忽地空中にまひあがり、飄飄として飛去りけり。人々はますゝ奇異のおもひをなしかけるが、程なく東方白を生じ、あや鶏の聲華やぎて歌ふに驚き、巴之丞逢州に別れを告げ、猶散華焼香怠るまじと、白牡丹の名香を、半ば分ちて逢州に與へ、小織之助を引俱して歸りける。嚮にもいふ如く此の樓は、奥まりたる處なれば、長を初め杜鵑花は、此の夜の様は知らざりしとなん。

淺間嶽面影 逢州執著譚 笛卷

種彦著

第三

瞿麥の方深夜に時鳥を殺害す

男波の笛鬼火に順つて飛びさる事

夫れ苦樂得失は惑ひによつて生じ、生死禍福は天の主るところにして、敢て言ふべからず。愚かなる眼よりみるときは、幸あると幸なきは、人の善惡によらざるに似つれど、邪にして樂しむは、椶の火の如く、一旦熾なりといへど消ゆるに速く、心さま正しくて苦しむは、泥砂に濁る水の如し。日を経ばいかでか原の清きに復らざらん。さても陸奥牡鹿郡淺間巴之丞が館において、如何なるものか側室時鳥を殺害せしといふに、彼の妬婦瞿麥が所爲なり。詳かにその緣由を問ふに、巴之丞皇都守護におもむきてより、頭踏まふる者なければ、瞿麥が猥りなる行跡日頃にいや増し、花の晨月の夕はいふも更なり、日夜酒宴遊興に耽り、自が居る高樓には、琴鼓弓の音の絶ゆるときなく、或は佛詣でに託け、漫行しばくなるに、老臣雪枝彌總太といへる者、心やすからずおもひ、折にふれ

諫め申せど、露承引き給ふ御氣色なく、一妾はときの朝臣師良が女なり、妾ありてこそ夫良治、上のおんおほえも目出たきに、かばかりの遊樂は、いかで苦しかるべき。」と侈りに罵り、心ねぢけし侍女のみ傍にをらしめ、その餘の人には絶えて對面もし給はず、己が隨意遊び給ふを見きく者、心あるも心なきも、此のする如何なる事やいでくるならんと、潛かに附囁きあへりとなん。

○作者種彦伏告

此の一條は巴之丞、皇都におもむきしあとに、却つて陸奥なる館の事を説きいづれば、一の巻にいへる花街の説話よりは前なり。前後二編を合はせてみ給ふ時は、前編第八回、巴之丞再度皇都に旅だつといふところに、此の條を次いで、同じく下冊後編發端を除き、後帙一の巻を讀み給ふべし。譬ふるも烏濤のわざなれど、源語に豎行横行あるが如し。此の巻半ばまでは、時鳥存命のうちなり、夫れ心得て看給ひぬ。

かくて後淺間家の妨々瞿麥の方は、牧山の長福寺なりける遠山尼公の御墓に、詣でんとて立ちいで給ひけるが、いとはなやかに物好みし給ふ本性なれば、侍女半女にいたるまで、花を折り紅葉を重ねし綺羅は、散り残りし花も恥づるばかり粧ひつ、北上川のほとりまで練りいでぬ。時は夏のはじめなれば、あさ緑なる空の氣色、いみじう霞みわたりたるは、春の眺めに異ならで、こほれて匂ふ櫻花

忍び音になく時鳥、さながら十洲三島夢中に在りといふなる、遊仙の枕に眠る心地なし、眼にふる毎に興なきものはなかりけり。此の所は則ち遠山尼公いまそかりしとき、佛詣での道ゆき振りに、終日櫻がりし、角彌杜鵑花に琴鼓弓を合奏させ給ひし、袖の渡りにて、相摸が「みちのくの袖のわたり」の涙川心のうちに流れてぞすむ。」と詠じたるふるき名所なり。さて瞿麥の方汀に暫く逍遙して、牧山の方に赴かんとし給ふときに、形窈々しき四方髪ほうかみの男「直々ちよく瞿麥くわくまの方に告すべきことあり。」と、おそれ氣もなく駕輿かりものに近づきければ、扈從こじゆうの侍さむらい立ち隔り「妨々たてまつに聞え奉る事あらば御館みたかに來り、それぞれの人についてこそ云ふべけれ、汝如き賤しき身をもて、御側おんわきに近づくは曲事まがことなるべし、疾くさがれよ。」と息まく折柄「やよ侍さむらい原さなひひそ、其の者に對面すべし。」と宣はするに、侍原は縁由はしらずといへども、「畏み候。」と應へて控へたり。ときに轎子の戸を静やかにひきあけさせ、扇さし挿頭かざしたち出で給ふ、おん姿のはなくと清けにて、ほとりも輝くかとおもはれ、さまざまの絲もて花鳥を繡したる、紅の裾ふみしだきたまふに、奇南の香さとこほれて、うつくしくうち笑ひたる面振、眉のかゝりの艶かなる、いへば更なり、畫の仙といひし紀金若、百濟川成たりとも、この粧ひをいかでか寫し得ん。嗚呼おそるべし、かく顔色花の如くにて、却つて心の荆棘を隠せり。さて傍には三五人の侍女を残し、其餘の從者は聲のとゞくまでに遠ざけ「近く來るべし。」と彼の男をまね

き給ひぬ。是れ何等者ぞと問ふに、往年農人奈古平に方人して、修行者に打扮ち、忘具寄居蟲の姉妹を感はせたる、鈍平太といふ者にて、近曾野夫醫を業として、四方髪となり鈍立と名をよびかへたる愚者なり。鈍立聲をひきくなし、「日外御頼みにまかせ、年ふる養の生血にて、調合なせし毒藥。」といひかけ、傍を顧みれば、瞿麥微笑み「さな驚きそ、從者は悉く遠ざけ、妾が心の底をもよくしれる侍女のみ側に侍れば、あへて憚る事なかれ。」と仰するに、鈍立も心おちなくいひけるは「さる秋とやらん月みる宴に、時鳥の方を招き給ひ、酒に和して彼の藥を喫ましめられし驗ありて、其の夜より惡瘡を發し、疥癩となりしよし詳に聞けり。事なりし上は賞金を給はるべき、證文まで與へ給ひ、音信なきは不審なり。」と問ひければ、瞿麥曰く「妾も疾くよりそのこと心にかゝりつれど、折なくていひもやらざりし。やよ侍女ども、手匣の内なる金の包とりいでて、彼に與へよ。」と宣ふにより、鈍立いよく笑壺にいり、「彼の毒藥を解すには、日に三度淨水に身を打たせ、如此々々の藥を服ます時は、頓に疥癩平愈して、原の姿となる事は、我が家法の祕中の祕なり、精しくは此の紙に寫したり。」と、證文にさしそへて、右の手にさし出し、左に賞金をうけをさめぬ。瞿麥又曰く「所詮死を待つべき時鳥が、奇病平愈なすべき、良藥の法は益なしといへども、又自來用るる處もあらんか、夫れは冤まれ汝窈々しき姿にて、數多の賞金をもち、人にな視咎められそ、從者の居らざる方こそよけれ、此

方の小逕より疾く〜と往きね。」と教へ給へば、「心得候。」と答へて僅かに行過ぐるを、折よしと瞿
 麥懐劔ぬきはなし、鈍立目がけ打ちたりけるが、的外れず項より、咽もとまでぐさと貫り、一聲叫び
 て息たえたり。侍女ども大いに驚き、「こは何の誤りありてか、鈍立を御手にかけられし。」と訝れば、
 「やよ音高し人や聞かん、潛かにいひそ。」と押留め、心靜かに棲かいつて、する〜と死骸の側に
 立ちより、手早く懐劔ぬきとつて、半彎月を雲の眞袖に押隠し、「彼原來妾に縁なく、又時鳥に恨み
 もなし、只賞金に管らんとおもひ、一旦方人なすといへども、妾にすぐれて賞金を與ふる者あるとき
 には、彼が口より發覺れんは必定せり。さる故をもて今手にかけ、向來の難を除る、なり。汝等も妾
 が計策を、若し外にもらすときは、此の鈍立が如くなるぞ、他事となおもひそ。」と、頓て留目を刺し
 をはり、死骸を岸破と前なる川へ突倒し、裾を蹴あけて小棲をとり、短刀の鮮血おしぬぐへば、侍女
 は身毛豎ち、何といふべき事をしも知らず。時に不思議や水上より、一團の陰火漸々と烘えあがり、
 瞿麥のほとりを飛び巡り、忽然として斑なる犬と化し、嚮に鈍立より戻したる證文、瞿麥が懐中より
 おち散りたるを口に唾へ、何方ともなく消えうせける。瞿麥なみならずうちおどろき、「あな口惜し、
 かの密書臚けにてはちらさじものを、何地行きけん。」と悔めど甲斐なし。兔角なす間に、日は申上刻
 ばかりとなり、風が傳ふる野寺の鐘も暮ちかきに、此の日は長福寺に詣で給はず、直に館にかへり、

又例の酒宴を催し、侍女どもをあつめて、歌ひつ舞ひつ遊び興じ給ひける。是れは扱おき爰に又良治
 が側室時鳥は、さる年の秋瞿麥の方にまねかれ、月みる筈に連なりてより、さしも窳窳なりし顔色、
 忽地惡瘡の爲に破られ、生まれもつかぬ不具となり、譬へば雨を洒ぎし花、風に賺かれし柳、紅の
 顔緑の髪、何地にやきえゆきけん、絶えて昔の人とは見えす。良治皇都に旅だちてよりは、別殿にひ
 き籠り、胡蝶舞振といふ伶俐氣なる女童、兩人のみ傍におき、他人には面をあはせぬる事をさへ恥
 ぢ給へども、其の昔良治が寵愛淺からず、殊に心さま正しきは、老臣もよく知るが故に、さまざまに
 いひ慰め、醫療手を盡しければ、漸く心地すが〜しくなるといへども、彼の惡瘡は養の生血をもて
 調じたる、鳩毒のなすところにして、風寒暑濕の外なれば、神丹華陀が術も盡き、日に〜重りかに
 なりゆくにぞ、かくては存命へても何かせんと、半熟死にもやらざる憂き身をかこち、歎きのもとに
 枝さしそへ、甲斐なき事のみいひつゞけ、夢のやうなりし夜なくは、泣くより外の所在もなく、爰
 に於て私かに思へらく、「自一旦良治に寵せられてより、深窓に在りて綾羅を身に纏ひ、幽閑に臥して
 蘭麝を衣に薫らせ、ほと〜幸あるに似つれど、不意奇病に苦しみ、かくおどろ〜しき顔色と變ず
 るは、過ぎぬる方の報いにやあらん、嗚呼天地は萬物の逆旅、光陰は百代の過客、自他生きとし生け
 るものやある、錦繡の飾りも冥途の境に益なく、珠玉の寶財も閻王の宮には何かせん。」と、頓に菩提

心を發し、朝夕念珠を爪繰り、唱名更におこたらず。しかりしより後は、蕙園の花を見ては、如來妙色心を觀じ、紅閨の月に臨みては、一切法常住を悟し、さながら心は沙門の如く、いと殊勝にも又あはれなりけり。かくてある夜雨しめやかに降りいでければ、時鳥は越しかたゆくするの事などおもひつゞけ、一人寝もやらず、例の如く數珠つまぐりて坐しけるが、程はなれたる樓には、翟麥が遊びと思しくて、琴の音のいと細う聞えければ、流石に妬くやありけん、耳を敏てつ、打涙ぐみていひけるは、「いかに胡蝶よ舞振よ、同じ館にありながら、其方等は妾に扈從するをもて、片時の暇もなくあれあの如く遊び興するを餘所に聞きなし、さぞをさなき心には、傾羨しとおもふべし。」と、自が憂身に比べて宣へば、二人の女童はうち泣きつ、「こは今めかしき仰せにぞ侍る、かく朝夕御側をたちさらで仕へ參らすも、宿世とやらんよりの、深き縁にぞはべるべきに、何條高恩を等閑におもひ候はん、かかる事に御心を勞し給はば、おん病の障りなるべし、吾儕は是れに侍るからに、心隈なくもいひ聞え給へ。」と涙おし包み、二人は障子の外にすべりいで、山入の草紙の繪讀して居たりしが、をさなきは寢きたなきならひにて、悲しむうちにも眠りを催し、其のまゝ音もなく打臥しぬ。時に風そよ吹きて、燈火屢瞬き、さら／＼と葎に懸る雨の音さへ寂寥しく、不圖枕方を視れば、怪しむべし斑なる老犬、朦朧としてかゝまり居れり。原來時鳥は男子に恥ぢざる勇ありといへども、病苦に心

や弱りけん、あな怖ろしと衣引被きて打臥さんとなすを、彼の老犬額つきつ、「さなき恐れ給ひそ、我は君に仇する者にあらず、申さん事のあるによりて來れり。」といふ聲いさ、か人間に異なる事なし。時鳥漸く心をさめ、やをら起き直り、眩近なる枕刀おつとりて、衣の間に押隠し、「汝獸身にてありながら、更に人語をなす、怪しむべきの甚しきなり、必定深き縁由あるべし、いふ事あらば疾くいへ、聞かんずるは。」と宣へば、彼の老犬潏然と涙を流し、「小子娑婆にありし昔は鈍立といふ醫師なりしが、我が家に傳ふる鳩毒あり、酒に和して喫ましむれば、忽地惡瘡を發して疥癩と變じ、又彼の毒を解すべき製藥、二つの奇法を得つるが、此の事いかにしてか漏れけん、翟麥の方きこしめされ潛かに調合なすべしと仰せを蒙り、われ貪欲深くして、何の思慮なく承引き、是れに加ふるに麤の生血を以て、不日に調へさしあけたり。君彼の藥を服する故に、鳥の片羽に似つる姿となり給ひし、是れ悉翟麥が、君を妬く思ふより起りし事にはあれど、其の罪人の原はそれがしなり。しかるに翟麥の方より、事なりし上は賞金を給はるべき證文を與へながら、かつて音信なし、我訝りつ、近會佛詣での折を伺ひ、北上川にて翟麥の方にあひ參らせ、かくと聞えたてまつりしに、心よく賞金をあたへ、やり過して脊中より、一刀に切つて捨てられ、水のあはれや果なくも、黄泉の鬼とはなり侍る。我が鈍きより謀られつるなれば、人を恨みん由縁はあらざれど、餘りに口惜しと思ひたる一念、又は年頃

さまざまの奸悪をなしつる報いにて、忽地畜生道に墮し、無量の苦辛を受くるといへども、娑婆にありし時だにも、愚癡なりし小子、盛んなる凡夫をいかで苦しむる事を得べき。瞿麥がさかゆくをみるからに、いよく三途の巷に艱苦絶ゆる間なし、此の紙にかきたるは、鳩毒を解す薬方と、賞金を約したる證文なり、彼をもて病氣平愈の期を催し、これをもて證據とし、おん身と我が讎敵たる瞿麥を討ちとり、地獄の苦患を助けてたべ、仇を恩なる報いをうけんすとて、悲しき姿にてまみえ奉り候ぞ。」と、後悔の涙しきりなり。鶉より時鳥は、黙々として聞きるたるが、今は怒りに堪へかねつ、すつくと立つていひけるは、「扱は我が奇病も汝が所爲にてありけるよ、互に妬しと思ひ寵を争ふは、なべて女の常にはあれど、毒薬をもて顔色を變ぜさせ、おのれ權勢をとらんとするは、武家の妻には似氣なく、卑性未練の行跡かな、人に報いはありやなしや、今におもひ知らせんず。」我は唯宿世の悪業報い來て、疥癩となりしと思ふより、せめて未來は極樂へ、到らせ給へと旦夕に、祈りし御佛讀みたる經文、今は何にか白露の、玉と賺く水晶の、珠數捏ぢ切つてかたへに投げすて、障子さす押しひらけば、月は隈なくさえわたり、翠簾かけわたせる樓に、たちまふ女の透影みえ、なほ小夜風につたふなる、琴の音色も心から、修羅の鼓と聞ゆべし。時鳥估度みやり、「あら口惜し腹だたし、縦ひ此のま、死するとも、靈魂忽地惡鬼となり、瞿麥はじめ恨めしとおもふ奴原、ともに奈落へつれ行か

ん。」と、塞上りたる顔色に、血筋は眞紅の網をはり、髮逆に立ちのほり、對慄はし齒をならし、「いかに鈍玄とやらんが靈鬼心安かれ、我が病愈ゆとその儘、妬婦瞿麥を討つてすて、其の場をさらす自害なし、三途の巷に再會せん、歸れや〜。」といふかと思へば、愕然として夢覺めたり。時鳥はたゞ惘然としてるたりしが、少時ありて吐息をつき、「無益き事を思ひ寢に、夢現とも辨へず、咎なき人を罵りしが、若しや思はず言葉にいだし、侍女共の間きやつらんと影護う、且は夢にもあれ御佛を、恨みし事の罪深し。」と獨言ちつ、空炷の煙にて雙手を淨め、水晶の珠數取出し、爪繰らんと脇息に引きならせば、怪しむべしいつの程にか珠數の緒きれて、斑々と膝の上にごほれかゝり、彼の鮫人の涙の如く、板間を漏れ来る丸雪に似たり。なにとやらん胸とゞろき、枕方を熱くみるに、犬の足あととところ／＼に印し、夢に鈍玄が持ちたりし二通の書簡あり。こは不審しといそがはしく開きみれば、果して賞金の證文と薬方なり。扱は正夢なりけるか、さるにても腹ぐるき瞿麥、いかにしてか恨みをはるべきぞと、つと立つて障子ひきあくれば、雲散り雨はれて、月皎々と互えわたり、程離れし樓に琴の調べの聞ゆるまで、夢に見つると露違はず。此の時胡蝶舞振の兩人は、次の間にありて時鳥が目覺めたるを知り、「何事をかし給ふぞ。」と、昏燭持ち出でければ、「蔀より影の漏れくるにて月の明きをしり、思はずも立ちいでたり。」といひ賺へ、何氣なき體にて其の夜は打臥し、時鳥心におもへら

く、「夢は元五臟の勞ひにて、信じがたしといへども、世にも人にも捨てられ、かくあやしの姿となりて、いつまでか居るべき、若し此の藥毒となりて、死すとも更に恨みなし、先づ服藥して試みんにかじ。」と、即時に醫師に仰せて調合なさしめ、庭に清水をひきたる掛樋を作らせ、且夕身を濯ぎなどして、總て夢に得つる藥法の如く、露洩らさず療養怠らざれば、奇なるかな雪と見し肌を埋みたる惡瘡も漸に愈え、姿の花も原の春にあへる心持となりぬ。さて瞿麥の方は、この由傳へ聞き給ひ私かに驚き、「抑時鳥が奇病は、蓋の生血にて調合せし毒藥によりてなれば、なみくの藥にて治すべき謂れなし、殊に掛樋の水に身をうたする由、彼の鈍玄がいひつる處に一點の違ひなし、若し彼の藥方時鳥が手に入りたるか、さあらんには我が身のゆゑ、しき大事たるべし、安閑と日を送る處にあらず、彼の書簡をもて良治に告げざるさきに、寧ろ殺害して後難を除くべし、彼いかに力量あるにもせよ、病に勞れし上なれば、何程の事かあらん。」と心にうなづき、或夜時鳥が閨房ちかき、前栽の村竹に隠るひるたるが、時に五月の初めなれば、こもりたる柳の梢蕭然く、青葉吹きまく高根おろしに、時雨めきたる雲ひきはへ、斗牛の星の影暗く、更に園の中とはおもほえず、氣疎き野らの心持して、夜も森々と深けわたるを、折よしとたちいでしが、流石に胸は轟きの、橋を踏みならず思ひしつ、頓にはたちもいらで、先づ板縁にのほり、障子の疎よりさし覗けば、時鳥は只一人、孤燈に向つて書をひら

き、さらに餘念なき光景にて、別に人影は見えもわたらず。折しも散り残りたる卯の花垣より、胡蝶三つ四つ飛びいでて、燈火の光を慕ふとおほしく、障子につきて翼をならし閃くを、是れ屈竟なりと己は簾のかけにかくろひ、腕を延し、やをら障子をひきあくれば、彼の胡蝶はさも嬉し氣に飛びいりしが、はしたなく吹く風に順れ、燈火にやあたりけん、内は烏羽玉の暗とぞなりぬ。原來時鳥は侍女ばらの勞を厭ひ、夜は遠く寝ねさせ、側には舞振胡蝶の童の外人氣なきに、障子うち開きは心得ず、若し盜人などの財をかどはしに來るにやあらんと、おそるくうかゞひ見るに、袖うち翳して傍徨める女あり。まづ心おちるて、「誰ぞや無益く障子開きし故に、蝶は燈火に焦れて死したり、妾に不意く殺生の、罪負はせぬるが憎さよ、何の爲にか其處に忍びをるぞ。」と立ちよる處を瞿麥は、鞆口早く抜きはなし、肩先四五寸切りさけたり。思ひがけなき事なれば、尻居に挫と倒れ臥し、又うち懸るを身を轉らし、手に當るを幸ひと、柳宮とつてうけとむれば、赤白の丹尺四方に飛び散り、春の手向の幣帛袋、風に亂すに髻鬘たり。時に風あれ雲散りて、山の端近く入りかたの、月の光に時鳥估度みやり、「御身は正しく瞿麥の方ならずや。言はずとも覺えあるらめ、妾もおん身に年月積る怨みあり、今日や聞えん明日やいひいでんと思ふうち、却つておん身妾が閨房に忍びきたり、賺し討ちになさんとなすは、武士の室には似氣なく、最卑怯なる行跡ならずや、いざ潔く勝負なせ。」と、微笑

つてたちなほるを、起しもたてず突込む白刃をかい挑り、扱ぎ取る力や餘りけん、撲地と顛ぶを瞿麥すかさず組みついたり。心得たりと時鳥は身を閃かし、頓て瞿麥を取つて引伏せ、只一突と懐劍ふりあけ、心ははやれど病に勞れ、殊に初太刀の手疵に苦しみ、手も痿へ痺れて懐劍を、おもはず庭に取落し、互に鬘を掴みあひ、裳の裾亂る、小夜嵐、縁より下へ轉びおつ、音はさながら火宅の車、姿は花なり紅葉なり、何れが先に散りて行く、夢又夢現や現空蟬の、羽におく露の命ぞと、知るや知らずや挑み合ふ、留奇南の薰は海棠に、比へし顔に香ひあり、蜀の錦の帯しめあけ、月は落つれど星の光にすかし視て、見えみ見えみ争ひしが、初めにもいふ如く、痛手にや弱りけん、時鳥は只退きがちにて、紫燕花の咲き満ちし、泉水を平地とこ、ろへ、片足水におちいつたり。瞿麥は事なりぬと喜びつ、落ちたる懐劍拾ひ上げ、起きなほる時鳥が左の腕を切つて落し、呵と叫ぶ間もあらせず、胸さかどつて白刃を顛につきつけ、「いまのおもひはいかにぞ。」と問ひぬ。時鳥は「はやなき命と思ひあきらめ、更にわるびれし氣色なく、微笑つて右の手をさしだし、「此の手をして君が珊瑚の枕に換へ、此の指をもてあはで過ぎにし夜半を數へ、衣をおほひ脊をうち撫で、總て左よりは憎しみ此の手にあり、いで右の手をも切りて心やりにし給へ。」といふに、「しぶとき女め。」といひさま切つて落す。時鳥は無念心骨に銘刻し、いまだ死にもやらず、いと苦しげなる聲をいだし、「妾が姿は後より見つる方こ

そ勝れたりと、君の戯れ給ひし事あり、茲をも切り給へ。」と、脊中を瞿麥が方に差向け、挫と轉びて遂に息絶え死に失せけり。「あら心持よし。」と、死骸を池の汀に蹴こみ、立ちさらんとする折しも、胡蝶舞振の女童は、此の物音に驚きて漸く起き出で、瞿麥が裾に縋りつき、「何人かはしらす時鳥の方を殺せしぞ、疾くいであひ給へ。」と呼ばはれど、松吹く風岩こす波の音に紛れて、はかなくしくも聞えず。瞿麥は人や聞くらんとうしろめたく、側を顧みつ、まづ手をのばして舞振が袷かい掴み、ただ一刀に切つて捨て、あはやと驚く胡蝶をとつて膝に引鋪き、胸もとをさし通せば、鮮血さつと潰り、汀に開きし紫燕花の、花にかゝると見えつるが、紫變じてから紅、不思議や紫色の陰火と化し、牀に飾りし笛に聲あること、さながら人のふきならず異ならず。見るく陰火は三團となり、彼の笛もろとも南の方へ飛去りける。かかる怪異を視てさへ、瞿麥更に惶る、色なく、又立去らんとなしける處に、程離れて直宿したる侍女ども、今胡蝶が叫ぶ聲の聞えしとおほしく、追々に出て來るにぞ、見つけられじと懐劍うちふり、持つたる雪洞右左に切つて落し、袖うちかざして廊下つたひに逃げさりける。扱侍女どもは、時鳥の方みえさせ給はずとて大いに驚き、頓て池の汀にて、胡蝶が死骸につまづき、こはなみくの事ならずと、家隸老臣を喚び會へ、庭の隈々残る所なく擇ねもとめしかど、時鳥が死骸は池水にゆられて、人丈ばかり生ひのびし、菖蒲のなかにかくれて頓には見えず、

天明の後漸くたづね出せしが、憐むべし昨夜梳りし黒髪も、池の玉藻と亂れあひ、雪辱かしき雙の手は、右左に切り落され、みるもいふせき亡骸に取纏り、侍女共は悉悲しとて泣く。時に雪枝小織之助父に對ひ、「時鳥の御方は日頃より、侍女さへも寢所近くは居らしめ給はず、我々はいふも更なり、さるからにかかる凶事もいでくるならんが、是れは今言ひてもせんなし、何は冤まれ主君の寵愛淺からざる側室を、人知らず殺害せられ、此のまゝには捨ておき難し、直宿の侍女原をはじめ、分明に詮議を遂ぐべし。」といひければ、彌總太頭を振り、「否々我思ふ仔細あれば、此の一事は深く秘し、人に語る事なけれ。」といひさとしけるに、流石に老臣の言葉といひ、一定深き謂れあるべしとて、其の意に隨ひ、「此の事人にもらす者は、曲事たるべし。」と侍女どもにいひ聞かせ、瞿麥の方には、「唯時鳥は病によりて、死去りぬと聞えければ、瞿麥の方も打驚きし體にもてなし給ひける。そもく雪枝彌總太、時鳥を殺害せし罪人を糺さざるは、瞿麥が所爲なるを推し、血で血を洗ふ世の誹りを憚りてなるべし。かくて時鳥が亡骸は、淺間家の菩提所長福寺へ葬り、葦實結枯信女と法號なしけり。夫れ大集經に、若しくは竹若しくは葦、實なるに及びて則ち枯れ、又任螺異譯は孕りて身亡ぶと説き給へり。既に良治國に在りし刻より、時鳥はけしきばみて見えけれど、俄に奇病をうけて其の事やみぬ。今法號に其の意を含むも、是れ又奇といふべし。さて時鳥が非命に死しつる事ども、良治公に告げ奉

らんと小織之助其の役に宛てられ、時鳥が位牌をば幾重かの箱に收め、既に用意調ひければ、父彌總太も病ある由きこえ、保養のため本國近江にたち越えんと、瞿麥の方に願ひ、其の事許されければ、小織之助と打連れて旅だち、往きくして近江路にもなりぬ。さて彌總太いひけるは、「我も頓て皇都にいたり、君の御氣色も伺はんずるあひだ、汝は暫く彼の地にとゞまり、君に扈從し忠義怠ることなかれ。」と、くれぐれも教訓し、勢田の橋より引離れ、小織之助は良治が旅館を志して急ぎける。是れ小織之助良治が旅館にいたり、その夜良治花街に漫行きな

第四 時鳥の亡靈種々の奇怪をあらはし
瞿麥狂死 まぼろしぎぬたの事

瞿麥は思ふ儘に時鳥を弄り殺しとなし、頃日の怨み一時に晴れしかど、若し此の詮議身の上に及ぶときは、いかにしてか分説かんと、安き心もあらざりしが、唯病重りて時鳥は死に去りぬといひふらし、絶えて其の沙汰に及ばず。扱は我が所爲と知る者あらじをと、初めて安堵の思ひをなし、夏もいづしか過ぎゆき、秋も半ばになりぬ。望の夜は例の如く、月見る宴をまうけんと、心がまへ残るところもなく、殊に其の夜は天に一點の雲なく、月ほのくときし登りければ、瞿麥晴の方に端居して酒宴を催し、詩を賦し歌を詠み、夜もいたく深け、酒もすがりになりける時、侍女の言ひけるは、「君去

年の今宵は、時鳥を此の處にまねき、琴を調べよ、歌よめよと、吾們さへ集會ひ、さまざまに弄りも
 のして、ほと／＼興に入りたりしが、其の人なくしてをかしからず。」と聞ゆれば、又一人が曰く、「そ
 れよ田舎同者の順禮歌唄はせんとて、あの水盤の柄杓持ち來りしは妾なり、あはれ時鳥もがな來れか
 し、又弄りて遊ばん。」など、いひの、めく聲のうちに、水盤より一團の陰火飛びいで、不如歸々々々
 と啼きわたるを、時にもあらぬ時鳥あな訝しと、聲の知方に見あぐれば、今まで晴れわたたりし月俄に
 朦朧として、風瑟瑟とおとしきたり、何とやらん蕭然く、衿より水を灑ぐ心持しつ。己が後をかへり
 みて、皆よしなき事をいひ出でしといふ面振なり。瞿麥も怪しと思へど、さもあらぬ風情に微笑みつ
 つ、「彼に手ぶりは及ばずとも、妾は時鳥の代りに琴一曲調べべし、誰ぞ持てこよ。」と琴二面を取出さ
 せ給へば、是れも時鳥を護りし、松風と瀧の絲なり。以上二つ、琴も多きに今宵にかぎり、此の二面を
 とりいだせしは、心よからず思へど詮すべなう、瓶に挿したる萩の露にて、指うち濕し琴かきならす
 に、絶えて音はいでやらず。こは不思議なりと琴取替へ、又一面調べれど、只板を打つが如く、絲に
 は僅かの聲もなく、何地ともなくかやくと打笑ひ、「怨みはまづ其の琴にあり、絲を妾が押へ居る
 は、眼に見えざるや、いか程汝が妙手に誇るとも、音のいづべき謂れなし、彈かば疾く彈けあな愚か
 よ、去年の秋汝等妾に投げのけられ、辛き目みつる事はいひも出でず、妾がみやび事をしらで、恥辱

をうけし事のみ誇りに言ふが胸悪し。」と、頓て瞿麥が膝元の二面の琴、右左に轉つて撲地と倒れ、
 さながら人の手をかけて投ぐるが如し。流石大膽なる瞿麥も、餘りの事に魂きえて、言ふべき事もし
 らず。侍女原は更に生きたる心持はなく、南無佛々々と唱へなどして、既に興盡き事醒めければ、
 今宵の酒宴はこれ限りぞと、瞿麥も座を立ちあがり、戦ひ居る侍女を言ひはけまし、件の琴をとりか
 たづけんとすに、恰も雨を洒ぎし如し。恐る／＼燈火照らし見るに、血に染みし手の形、絲の間に
 印し、水に散り浮く紅葉を畫きしに似たり。「あなや。」といひて打置けば、又かやくと打笑ひ、「みよ
 みよ今に思ひしらさん。」と、聲は耳の許に響き、妾は更にみえもわたらず、三團の陰火几帳のかけよ
 り轉びいで、雲居遙かに飛びさりける。さて次の夜は雨さへいたく降りければ、又いかなる怪事やあ
 らんと、侍女どもは心も更に心ならず。瞿麥とかく言ひこしらへ、徒然を慰めんと、十炷香を催し、
 遊びに紛れつ、怖ろしとおもふも少しうちわすれけるに、障子さら／＼とひらくを、誰ぞ來るにや
 と顧みれど、曾て人もあらず。いつのまにやらん侍女にうち交り、二人の女童あり。「妾をも遊びがた
 きにし給へ。」といふと、再び驚き熟みれば、時鳥とともに世を去りし、胡蝶舞振の兩人なり。侍女
 は一塊となり、袖うち翳してたれ答ふる者もなし。時に時鳥の聲宅上にあり、「やよ胡蝶と舞振よ、
 香聞きて遊ばんより、此の棟木を疾くきるべし、瞿麥初め侍女原の棟木にうたれて、あをち苦しむを

見んには、十炷香にははるか勝れて、をかしかるべし。」といへば、「應。」と答へて立ちあがらんとする處を、瞿麥懷劍拔きはなし、はつしと切りしが是れも兩團の鬼火となり、蔀をくゞりて飛び出でける。此の奇怪をみて人々は太いに驚き、逃げんとすれども足痿へて立つ事あたはず。三人の亡靈又宅上にてどよめき、其處を斷てよ此處を切れよとをしふるは、時鳥が在りし昔の聲に似たり。頓て鋸の音聞え、聲に順れて屑さへ斑々と零れかゝれば、こはいかになりゆく事ぞと、或は觀世音の御名を唱ふるもあり、或は守を額にあてて伏拜むもあれど、かかる邪なる者どもに、いかでか神佛の冥助あるべき、遂に棟木自來崩れ、拉然と響いて瞿麥が膝の前に落ちければ、侍女どもは棟木にしかれ、呵と喚んで息も絶えくになりぬ。此の聲遠く聞えて、何事にやと柄燭を照らして出で來る人あり。侍女ども漸く正氣つきてあたりをみれば、崩れたりし棟木もなく、又宅上にかやくと笑ふ聲、樹魂に響きて物すゞき事いへば更なり。冤角なす間に夜も明けはなれければ、總て館に崩れしところもみえざりける。さて次の夜は雨やみ、月いみじう互えわたりけれど、夜毎の怪事に物恟ぢし、何人あつて眺むる者もなく、蔀たれこめ鳴りを潛めてるたりしが、夜半ばかりに人の來るけはひして、「今宵は何して遊ばんぞ。」といふ。「頃日瞿麥が礎をつくり、侍女ばらにうたせて慰みしが、其の礎幸ひに此處にあり、まづ是れをうちて眠りを覺すべし。」と、庭先にて拍子をかしくうちすさみければ、これを

聞くもの更に寐もやらず、おそるく格子より差覗くに、人はなくて只礎のおのづから轉つて聲あるのみ。此の夜は亡靈もちかくは來らず、昨夜棟木の崩れしより、少しは恐ろしさも劣り、眠りを催す者もありけるが、忽地瞿麥が臥したる屏風のうちに、車の輾る聲あり。見るく美々しく粧ひたる、五緒の車人もあらで轉りいで、直宿せる侍女の前を徐やかにゆきすぐれば、大いにおどろき屏風引きのけ瞿麥をみるに、首なき軀ぞ打臥したり。「こは變化の御首をとりて往きつるならん、老臣にかくと聞えば、吾們が落度なるべし、いかにしてか分説かん。」と、おそろしさも忘れかの車を屹と見れば、又かやくと笑ふ聲して、あと方もなく消え失せける。時に瞿麥は物と吐息して起き直り、「あな恐ろし時鳥が亡靈、我が首を持ってゆくと夢みたり。」と、物語り給ふに再度おどろき、熟くみれば御首は原の儘にて、あへて異なる事なし。さては車の往きつるも夢にてやあらんとおもへど、輾はたゞしく疊に残りあり、是れ又奇怪といふべし。さて次の夜は風烈しく雲おほひて月さへいせず、庭に礎の音のきこゆる事昨夜に似たり。或は近く或は遠く、かやくと打笑ふ聲きこえ、家鳴りする事おびたし。既に夜も更たけて、風は林を倒すが如く、庭に湛へし池水より、鬼火もろとも時鳥が姿彷彿と現はれいで、怪しや雲を踏んで逆となり、漸々に瞿麥が閨房に近づけば、侍女共は、「あなや。」といひて打臥し、五體縮みて立つ事能はず。頓て時鳥は瞿麥が黒髪を手にからみ、「今の思ひはいかにぞ。」と

いひつゝ、ひきたてんとす。瞿麥生きたる心地もせで、漸く枕邊の刀抜き持ち切りはらへど、亡靈更に懼るゝ色なくかやくと笑ひ、「池水に溺れ兩手をきり落されつるに比べなば、いかに責むとも物數ならず、見よく今に思ひしらするわ。」と聲のみ残り、姿は煙のごとくきえうせける。や、音しづまりて後、侍女ばらは正氣つき、傍をかへりみれど、それとおもはん物もなく、たゞ鮮血淋々とした、り落つるに昏燭してみれば、血に染みし足のかたち天井にありくと残り、これより血のながるゝにて、方燈の油さへことごとく血と變じ、腥風颯然とおこり、ものすぎきこと、たとへんにもなく、瞿麥を見ればさらさらに人事をしらず、うちふし居けるにより、うろたへまどひ、さまざまに介抱なしけり。

既に夜明けてより、瞿麥は物狂はしくなり、一切のものいはで三五日打臥し、其ののちはさせる怪事もあらざれど、瞿麥が面に惡瘡を發する事、時鳥がありし姿に露違はず、いろくの亂言のうちにも、「今の思ひは如何にぞ、く。」と繰返し、いひつゝ、なほ瞿麥が眼には、時鳥が姿の見ゆるにやあらん、白刃をひらめかし空を切りなどなせば、侍女どもも近づきがたくて、日にく顔色憔悴し、今や命も旦夕にせまりし時、「言ふべきことありとて枕邊に、家隸をよびあつめ、まづさめくと涙を

流し、「汝等もおろく夫れと心づきけん、此の瞿麥を苦しむるは則ち我が靈なり。」といふ聲は時鳥に異ならず。暫しありて又曰く、「妾が身の賤しきを知り、さまざまに嘲弄し、剩へ鈍女とやらんいふ醫師を談らひ、毒藥をもて妾を大風となし、相公の寵をねとらんとはかりしを、鈍女が幽魂の告げによりて詳かに知り、如此々々の藥を服し、少しく病おこたりしが、情なや瞿麥早くも心づき、深夜我が閨に忍び來り、賺し討ちになしつるなど、總て此の女の所爲なるぞ。」と、瞿麥が姿を假り時鳥が身の上を、泄るゝ處もなく告げをはり、「見よく今の思ひはいかにぞ。」といひ、又「あな苦し。」と喚ぶは、瞿麥が聲なり。「見よく今に思ひ知らさんずるは。」と、庭先に立出づるを、人々周章て押留むれば、右左に突退け、なほ狂ひ狂うて走りゆき、池の汀に立つて衆人をさし招き、又時鳥が聲して、「妾を殺害せしは此の處にぞあんなれ、かくの如く手を打ち落しぬ。」とて、持つたる扇振上げて、我とわが左の手を礮とうてば、刃をもて斷つが如く、鮮血さつと潰りて、「あな苦し。」と叫び、「今の思ひはいかにぞ、いまの思ひはいかにぞ。」といひつゝ、池水に落ちいり、くるひ死にぞ亡せにけり。嗚呼因果觀面の理、これを聞くもの豈恐れ慎まざらんや。また瞿麥に従ひ時鳥を嘲せし、邪なる侍女どもは、かの棟木にうたれしと思へるところ漸に痛み、或は蹇となり或は短頸となり、みな惡報によりて、生まれもつかぬ不具とぞなりにける。しかりし後眞野の莊にて、更に人なき野邊に礎の

音をきくものあり、土人は是れを幻碓まぼろしぎねたといへり。又碓またぎねたを夜戸外よるごわいにおけば、時ときとして聲こゑありとて、黄昏たそがれにはかならずとり入る、事こととなん。これ時鳥ときすずが怨鬼えんききぬたに留とどまるものか、又狐狸またこりのこれによつてたぶらかすものか。今は其いまその事こともたえて、をさあいを賺すかす乳人おちが、伽あやものがたりのみ彼の地ちにはのこれりと、ある翁おきなのかたりし。

淺間嶽面影 逢州執著譚卷之二 終
草紙後帙

淺間嶽面影 逢州執著譚 琴卷上
草紙後帙

種彦著

第五 巴之丞菊が瀨の山莊に遊君を集會め
細太丸に命せて猿樂俳伎を興行なす事

却かへつて説とく淺間巴あさまし之丞しよ良治りやうぢは、時鳥ときすずが非命ひめいの死しを聞いてより、悲歎ひたんやる方かたなく、僧そうを供養くわうし經きやうを誦じゆまし、追善つゐぜん丁寧ていねいにいとなみ、とかくなす間に舊年ふるとしも見るくあらたまり、又來またくる春はるを迎むかへける。嗚呼あゝ去さる者は日々ひびに疎うとしといへど、眷戀けんれん愛執あいしゆ尙なほ忘れずやありけん、せめて其そのの人の面影おもかげに肖につるを視みて、心こころやりにせんと、折をりにふれ逢州あふしうが許もとへ訪とひよりければ、五郎藏ごろうざうは信まやかに、巴とら之丞しよが後邊あとへに副そひて道次みちぢを守護まもり、杜鵑つばき花はなは門首かどへにむかへいでて、主従しゆくの禮儀れいぎを亂みださず、眞心まごころをつくして仕つかへける。抑おさく巴とら之丞しよ逢州あふしうがもとへ通かよひしは、色いろをおもんじ傾國けいこくをおもふにあらず、たゞ亡なき人の慕したはしく、忍しのびかねつ、忍しのぶ草ぐさ、忘れ草わすれぐさてふ生おふる事こともあらんかと、心慰種こころなぐさに見みし花はなの、今はなかく色増いろまして、恩愛おんあい殆たんどあつく、逢州あふしうも又またなき妹いもの、色いろをねとる心こころにはあらなくに、此この君きみを憑たのみ參まらせ、仇人あだびとの往方ゆくへ

を擇ね、宿意をとげんと思ふ間、わりなくも語らひしが、女の心はいと淺くて、いつしか巴之丞が眞心に深くもおもひそみ、誰かしらん鴛鴦の食のうちに、偕老のちかひあらんとは。かかりしかば病にかこつけ、逢州は他の客をむかへず、巴之丞も彼が玉臂に就かざれば眠らず、歸らんとすれば艶梅露にないて、袖をわかつに憂く、ゆかんとすれば新柳風にまねいて、足の歩びも殊さらす、み、雨の且雪の夕のいとひなく通ひつ、も、田字草が長の巢守となりしが、なほ是れにあかず、俄に大工をあつめて、下河原雲居寺のほとり、菊淵といふ處に山莊をつくらせければ、きのふは煙草にうづもれ、閑寂幽凄なりし地も、けふは玉樓金臺連延と建て續き、蓬がなかの蟲の聲は、吹物の音色にかはり、松吹く風は玉の小琴と調べかへ、七十二間の渡殿、三十二間の釣殿、みな悉く紫檀、花欄、沉香、奇南の類をもてつくりなし、笑みを買ふ木の下には、錦繡の戸帳をひき、眉をそがく窓のまへには、水晶の簾をくだし、屏帳の綺麗言葉にもべがたく、珍寶のかざり畫にうつすともうつしえじ。園には谷川をひきいれて、廣らかなる池となし、頃しも秋のすゑなれば、紅葉の楓樹さわやかに、たる見る天地は蜀江にてはりなし、四方は錦にてつ、むが如く、谷にわたせる橋梁水に映する光景、更に人間の界ともおもほえず、正に是れ九天の畫堂ともいひつべし。さて巴之丞は日毎此の山莊にありて、五條坂より逢州をまねき、朝笑暮歡居るに起つに離れず。一日巴之丞戯れていふ、「我此の美人を得た

り、花の姿は終日にみれどもあかず、枕上の密語は夜もすがら語れども盡きず、彼の唐の玄宗皇帝、華清宮にありて、楊貴妃を寵愛せしも、我が宴樂には及ぶまじ」と、是れより浴室をつくり、井華洞とよびなし、貴妃がこのみし花なりとて、紅白の牡丹を絹を以て造り、假山にうゑみてぬ。嗚呼若しかかるとき、家に安祿山が如き奸佞の臣あらば、鞞鼓天にひゞき、鯨波地を動かすの騷擾、近きにあるべけれど、良治が近臣は悉恩を知り、義をおもふの輩なれば、欄を折るのいさめ屢なりといへど、かつて聞きもいれず。此の頃又細太丸といふものあり。彼は世に聞えし白藤太が孫にして、猿樂田樂獅子舞の奥妙をきはめければ、良治彼の細太丸をよびよせ、「數多の遊君をあつめて、猿樂或は今様の伎藝をまなばし、井華洞に場を構へ、酒宴の興となすべし」と命せければ、細太丸かしこみて檢行し、扮すべき役々をさだめ、既に説合はせ事と、のひ、其の目にもなりぬ。山莊の端殿に御簾をたれて棧敷をまうけ、臺をほどよくみおろし、絲竹琴鼓は幕のうちにそなへたり。さて巴之丞褥に著くと齊しく、紅顔緑髪の美人、廊をめぐり出でたるが、手にく海陸の珍味をさ、け出で、香醪佳饌所狭くおきならべければ、良治もおもはず數杯をかたぶけけり。さて猿樂は、

- 猿女君歌舞、吉士舞、久米歌舞、淺茅原曲、
- 廣瀬曲、小墾田舞、國栖歌舞、隼人歌舞、

齣劇八場と定めたり。これ等は神樂散樂の古風なる名をかりて、あらたに入調したるうたひものに、
 程拍子をあはせてたちまふ俳伎なり。人々は目をぬぐひ、いまやくと待つほどこそなけれ、容貌端
 正に音聲麗妙なる遊君、けふをはれと打扮ち、廻雪の袖をひるがへしければ、彼の青海にねりいでた
 るも、これにはいかでおよばんと、心ゆくまでの観ものなりけり。爰に雪枝小織之助が父彌總太は、
 病氣保養のため、本國近江にありけるに、主君良治下河原に山莊をかまへ、只管酒宴遊樂にのみ、あ
 かしくらす條ほのかに聞き、心さらにおだやかならず、急ぎ皇都に上り、此の日山莊にきたり、かか
 る光景を潛かにうかひみて大いにおどろき、たゞちに面前へいで、諫めをいれんと思ひしが、否ま
 づ俳伎はててのち、ころろしづかに意見のおもむきをいはめと、次の間にひかへ居て、日暮れて後通
 ひの女原にいひつがせ、小織之助をまねきけり。小織之助は何事やらんと御前を退き、父なりと見る
 よりも心おどろかれ、「こは何故に此の處へは來ませしぞ。」と、いひもはてざるにはたと睨まへ、「やを
 れ御側に冊きながら、君かくまで放佚無慙にならせ給ふを、暗然と眺めくらせし不忠者、とく／＼此
 の席を退出候へ。」と、聲ふりたてて罵りければ、小織之助おそる／＼いひけるは、「父君の怒らせ給ふ
 事、いと理には侍れど、老臣の諫めをすら、もちる給はざる良治公、若年の某が申す條、いかで
 聞きいれ給ふべき、さるゆるにこそよからぬ事とは思へども、君命黙止しがたく、かかる御宴にもつ

らなり侍る。」といひければ、彌總太いよく怒り、「數度諫言を奉り、聞きいれ給はぬ其の時は、な
 ど潔く切腹はなさざるぞ、か許りの事思ひあきらめざる汝にてはなかりしに、一定天魔のみいれし
 にやあらん、我が面前にて自害をとけ、君を諫めたてまつらざる、其の身の罪を贖ふべし。」と、老い
 の氣を焦燥て、思はず聲も大きやかなりければ、良治もかくと洩れ聞き給ひ、やがて彌總太を召さ
 れける。かくて彌總太はさらにおそる、風情もなく、良治がまへに跪き、「さていひけるは、君が學
 窓にのみ籠らせられ、繩錐のつとめおこたり給はず、自然と御心鬱滞し、御樂がちにてすぎ給ひし、
 さるからに折にふれての歌舞音楽の御翫びは、あらまほしき事には侍へど、斯く花鳥風月の御宴に
 そみ、剩へ數多の妓女をあつめられ候なんど、大内のきこえもよろしからじ、遠くは平の清盛白
 拍子を愛好し、近くは高時法師田樂を賞翫するの類、悉く不吉の祥なり。はやく御心を翻し、
 御館に歸らせ給へ。」と、憚る氣色もなく申しける。良治何思ひけん、一言の答へもなさず。なほ彌總
 太は小織之助をよび出し、今まで諫め申さざる罪をせめ、「すみやかに切腹なすべし。」といひけるが、
 良治も爛醉の上なれば、大いに氣色を損じ、「おのれ彌總太一轍なるは、老いたる者の癖ひとおもひ、
 一言の言葉も交へず、打捨ておけばよき事と思ひ、よし汝が一子にもせよ、我近臣として召仕ふ小織
 之助に、私に切腹いひつけし條、我に對して是れみよとの所業、奇怪なる老いほれかな、いで其の

願ねがひきりさけて、怒いかりをやすむべし。」と、玉散たまちりる白刃しらばね抜き翳かげせば、彌總やそう太少たうすしも身を惜おししまず、裾すそをか、けて玉殿たまどのを歩あゆみし例たとひ、「郊原かうげんとなるを見みんよりは、とく首くびを刎はねたまへ。」と合掌がつしやうなすに、小織おりの之助すけ大いにおどろき、「君きみの御怒おんいかりをひき出いだせしも、原小もとせがし子が過あやりなれば、我われをこそ御手おんてにかけ給たまへ。」と、走はせよるを彌總やそう太撲たはた地はたとつき退のけ、「嚮ききにもいへる如ごとく御側おんそばに冊かじづきながら、安閑あんかんとまもり居ゐたる程ほどの曲まが者もの、君きみの御手おんてにかけ給たまはば、御佩刀おんはかせのけがれなり。我われをこそ御手おんてにかけ給たまはれ。」「否いな我われをこそ。」「我われをこそ。」と父子おやこし死しを争あらそふ赤心まごころを、逢州あふしうも見みるに忍しのびず、樂屋がくやより立ち出いでて、「御短慮ごたんりよに候まうらひ。」とさまさまに止とどめまるらすれど、更さらに聞ききもいれず。あはや彌總やそう太たが首くびは、おちぬべく見みえたりしが、怪あやしむべし風烈かぜはげしくおとしきたり、燈火ともしび颯さつときゆるとひとしく、さら／＼と繪障子えしやうじのひらく音おとして、曾かつて人は見みえず、唯時鳥たゞほととぎす一聲せい良治よしはるが頭かうてのうへに鳴なきつるが、良治よしはるは酒氣しゆき忽たちまち地にさめて、ありし事は悉夢みたまゆめの如ごとく、「あな誤あやりぬ。」と、まづ白刃しらばを納をさめければ、彌總やそう太た小織おりの之助すけも大いに悦よろこび、道理だうりを盡つくして諫言かんげんをくはへければ、良治よしはるも漸やうやく心をあらため、遊君いうくんはのこりなく、五條坂ごじょうがの長ながのものとにかへし、雪枝ゆきえだ父子ふしを將みて、其その夜館よやかたにかへり給たまひける。嚮ききに燈火ともしびのきえつるをり、時鳥ほととぎすありし姿すがたにて、繪障子えしやうじをひらきいできたり、良治よしはるが佩刀かたなを抜きもちし、手にすがりとゞめしと、逢州あふしうが眼めには見みえたりとなん。さて良治館よしはるやかたにたちかへりしをりから、瞿麥なでしこの方かた狂死かたきやうじをはじめ、時鳥ほととぎすが非命ひめいの死しも、瞿麥なでしこの方かたの所爲しよるなるよ

しまで、注進ちゆうしんひきもきらざれば、巴之丞ともおのじやうも心こころさらにおだやかならず、嗚呼あゝ憎にくむべきは瞿麥なでしこ、憐あはれむべきは時鳥ほととぎすと、數回あまた歎息たんそくせしが、また心をひるがへし、否いなさきだつても業殘ごふのこるも業ごふ、順逆じゆんぎやく二門もん忘縁わうえんにあらざらんや、喜怒きど好惡かうあくは情じやうの動うごいてひかれやすき初はじめときく、不良さかたき事ことのいでくるも、藻もにすむ蟲むしのわれからぞ、傳つたへ聞きく蘭菊らんぎくの二女にじよ、わらひのうちに刃やいばをとぎ、綠髮くろかみ反鼻へびに化けすといふ、昔語むかしがたりも身のうへに、今不知火いましらぬひの筑紫つくしなる、刈茅かりかやにて道心どうしんを發願はつげんせし、人の心こころも斯かこそあるらめ、不便ふびんの事ことをしなしたりとて、一向ひたすらに後悔こうかいし、呀あかかると時近臣とききんじんのいさめをもちるす、淫酒いんしゆに耽ふけり宴樂えんらくにのみあかしくらさば、愈いよく恥はぢは巷ちまたにもれ、名なは後人こうじんの舌したにあそばん、止やみなん／＼と獨言ひとりごち、ありしことども玉章たまみにしろし、小織おりの之助すけに命おほせて、逢州あふしうが許もとへ送りて後は、たえて花街はなまちにゆかず、只一室ただひとむにとちこもり、忘わすれんと思おもふからなほ忘れやらず、愛執あいしやくの窗まどに曉あかつきの寢覺ねあをしたひ、炷たきしめし衣きぬの香かの薰くむるにつけても、すぎし別れわかれのしのばしく、繰くりすつる袂たもとの露つゆの数々かずかずに、佛ほとけの御名おんをととなへつ、亡なき人の追福つひくより他事たじなかりけり、是これはさておき爰こゝに又また、星影ほしかげ土右衛門とごゑもんは往いぬる年とし、隱形おんぎやうの術じゆつを以もつて、良治よしはるが兵士へいしの圍かこみをまぬがれ、難なんなくあすだ河原がはらを立退たちのいてより、周あまねく中國ちゆうごくを遍へん歴れきし、我われにひとしき惡棍あくこんをあつめ、なほこりすまにさま／＼の奸計かんけいをめぐらし、數多あまたの金銀きんぎんを掠かすめるといへども、幸さいひにして天刑てんけいいまだいたらず、頃日このころひ洛一條らくいちようのほとりに在ありて、一日あひひ蟹塚かじづか素兵五そへいご、穴生あなふた太九たいくといへる、放佚はういつ無慙むぜんの

愚者をしたがへ、清水寺のちかきあたりを徘徊せしが、時に二月下旬日よくはれて、空のけしき鳥の鳴く音もこちよけなりければ、貴賤老若のわかちなく、袖をつらね袂をまじへ、おのが心々に往來ふうちに、ひときは目だちし嬋娟なる婦人あり、これ別人にあらず五條坂の遊君杜鵑花なり。けふ宿願の事ありて、歌の中山清閑寺の觀音に詣で、清水越にてはしなくも、土右衛門に行きあひたり。夫れとはさらに心もつかで、往きすぎんとなしけるを、土右衛門はやくも杜鵑花なることをしり心に喜び、なほ見きはめんとおもふをり、素兵五が持ちたる扇を、櫻の枝にうちあてんとて投げたるが、杜鵑花の連れし女童の花弁に當り、鏢と音しておちければ、女童ふかくおどろき、「無正事し給ふな。」と、袖うちふるふを、杜鵑花はさないひそとて微笑み、扇は拾はせて素兵五にかへし、土右衛門なりとは夢しらず、棲かいとつてかへりけり。時に土右衛門、あたりの酒房にいり、上座にあぐみ居て、二人に對つていひけるは、「和主等は近曾の相識なれば、詳の事はしるまじ、今街上にて見つる、遊君と覺しき女は、我が古主淺間巴之丞良治の母遠山尼の侍女なり、我淺間の家臣たりし昔、不圖彼に戀し、さまざまに口説きしが、露うけひかぬのみか、頃崎角彌といふ扈從に密通なせしかば、我が無念やるかたなく、彼等が不義を見あらはし、縛首も刎ねんすものと思ひのほか、如此々々の事ありて我も國を追放されしが、嗚呼何等由縁ぞや、今において煩惱のきづな斷ちがたし、いかなる計策をほ

どこしてか、彼を手にいれんす。」と、うちひそみていふ。二人は聲をひとしくして、「そはいと心やすし、なかばばかりの事に心を勞し給ふ、元淺間家の侍女なりとは、尊客に聞きつるが初めなれど、我あ女の女はよくしれり、あれこそ五條坂の亡八、田守草が長の遊君なれば、彼の花を手折るには、何のかたき事かあらん。」と、誇りかにいふを、土右衛門呵々とうち笑ひ、「和主等さ思ふも理なれど、いまだ未通女のころよりして、顔に似氣なく心強にして、義氣をさく男子にはぢす、尋常の女ともひ諷らば、却つて辱めをうけん、そも何等の由縁によつて、遊女とはなりたるならん、彼當地にあるをおもへば、角彌も共に居らんな一定せり、まづ奸計をもて、角彌に自滅をとらせ、そのうへに杜鵑花を手にいれんか、否杜鵑花を手にいれて後、這奴を退げんな心やすし。」と、一人點頭き、猶兩人に密計を謀じ合はせ、家路をさして歸りける。斯くてのち杜鵑花ある夜、甲屋といへる茶房よりよびむかへられ、彼の家にいたりしが、田舎人の客にて、酒をひたと強ひつけられ、おもはずも酔ひを發し、席につらなるも物苦しく、人目をしのびて梯子をくだり、顧みがちに鶴歩して、行廊をあゆみゆきしが、斯くとは更に知る者なく、人目なければしどけなき、貌形をもつくろはず、胸のあたりうちくつろけ、疊紙にてうち扇ぎ、そよ吹く風をまち居たるに、元此の茶房は細々許なるながれを、庭にせきいれたれば、岩に咽ぶ水音いとすゞしく、小笹の露燈籠の火影にてりて、夏の夜の螢かとお

やまたれ、松が枝の蜘蛛の巢は、風の隨意吹きちりて、秋の野の尾花に似たり。かかるをりから障子さとおしひらき、杜鵑花が裾をとらふる者あり。打驚かれ「誰ぞや誰ぞ、不正事し給ふな。」とすかしみれど、たえて相識にはあらず。されど容貌何とやらん見おほえあれば、夫れか彼かとおもひまどひ、唯是れほかの遊女の客にて、我は知らざれど、彼方はわれをしるゆるの戯れならんと、わざと微笑みて、「いつの程よりか爰に忍び居て、人驚かし給ふ憎さよ。」と、あらはなる脛をおほひ、褻搔掴み裾をよせんとすれど、しかと握りてはなさず。「いかにも推し給ふ如く、とくより爰に隠沼の、底の下水隠れて、しられぬ戀のくるしきを、しらせんとてぞ訪ひよりし、はや六年七年あひ見ざれば、我が顔は見わすれつらん、かくいふは御身のゑに、浪々せし星影土右衛門なり。」と、聞いて杜鵑花は再び驚き、熟見るにはたして其の人なりければ、悪さはつかしさに、胸をどりておだやかならず。土右衛門かさねていひけるは、「往年袖のわたりの花見にて、御身と角彌が密通を、見あらはせし其の時は、さぞ無念とも思ひたらんが、よく理をわきまへ、角彌は其の席にて切腹なさしめ、御身は女の事なれば、切に命を申しこひ、我が思ひをはらさんとてなせしなれば、是れ悉御身を慕ふ心の實より出でたるにて、強ち我を惡み給ふ由縁もなし。」と、なほ身近くよらんとすを、杜鵑花は早くも退きて、傍によせもつけず、頭を衿にさしいれて、更に一言の答へもなさず。土右衛門なほ聲をひくうし、

「這奴何の容止ありて、此の處へ來りしと、嘲し給ふもとく心得て侍へど、あ、何等縁にや、御身のこと少時もわする、時なく、再度環り會ふをりもがなと、心の願ひ遂に叶ひ、此の頃歌の中山より、清水越しておもはずも、御身に往きあひ、此の花街の遊君となつたるよし、聞くとひとしく人の誹りもかへりみず、まうで來しは胸のおもひのやるせなき故ぞかし、情なきなさけをも、かごとはかけて給ひね。」と、うちつけに口説りければ、こはいかにしてか言ひとかんと、須臾打案じけるが、元來土右衛門は奸曲邪智の曲者なれば、強ひて辱めを與ふるときは、われのみか夫まで、いかなる奸計におちいらんも計りがたし、兔に角いひくろめて、此の場を逃れんにはしかじと、わざと言葉を和け、「田舎生ちのはしたなき、此の杜鵑花を空言にもせよ、斯く切に聞え給ふは、君ならで外にあるべきか、昔をおもひ出羽や、最上の川の稻舟の、いなといふにはあらねども、館にありしその頃より、君をつらくもてなせしは、御心を告げしらせ給はぬさきに、角彌主といひかはしつれば、彼方の志も破りがたくて、せんすべなき處なり。かく聞え侍らば、今は何人にか憚るべきと宣はんが、昔はひかれし袖を拂ひ、よし遊女となりくだればとて、又其の人に横陳しては、妾ばかりの恥ならず、實に戀を換ふるなり、君傾城となつたるゆゑ、遂には思ひをはたせしと、御身も共に惡名の巷にもれん、嗚呼浮世に憂きのかよひあり、世を経る程苦しきものはあらじを。」と、あとは言ひも果さず、まだ世に

なれぬ未通女の、よろづ臆しがちな言葉の文にとりなすうちも、外に人や聞きつらんと、傍に氣をくばり、酒氣發して顔は夕映のみみぢをちらし、立居に衣の香もれて、梅の木の間をすぐるかとおもはれ、強き心もしらぬさまにたをやぎたるを、土右衛門は猶忍びずもやありけん近くるより、「我ばかり聖だちし事聞きには來らじ、五郎藏と縁断ち給へといはんには、不諾給ふも宜なり。」と、言ひ出づるに杜鵑花重ねて驚き、「何その五郎藏と宣はするは。」「無益き事な包み給ひそ、須崎角彌變名して、御所の五郎藏となつたるは言ふもさらなり、我にしたがふ素兵五、太九六を聞者として、夫れ彼とくに聞きおきたり、さればや迎も節義は打捨てて、遊女と成りし御身なれば、終身を誓ふ事は稱はずとも、唯假のちぎりをむすび、一夜の情かけ給はば、明日は青道心となるとても、恨みとは思はじものを、我が佛たすけ給へ。」と、雪なす手をとらへ、ほとく猥りがはしきにおよばんとするに、杜鵑花今は怒りにたへかね、「御身も昔は淺間家の近臣なれば、聖賢の書の一條は見給ふらめ、斯く事をわけ道理をつくして聞ゆるに、露聞きわき給はぬは、いと愚かなる行跡にぞ侍る。夫れ女は大路を歩行むだに額に扇を加へ、袖几帳して羞ぢらふが習ひにて、兩夫にまみゆるをもて、二張の弓に比し、踐三庭の譏りいかんせん。しかはあれど憂川竹のながれに沈む身は、常の女とひとしからず、思ふ思はぬ隔てなく、白地にものがたり、身は千人の指にさされて、彼こそ何某といふ遊女なりと、言ひ

しらふを却つて喜び、名は飄客の舌にあそんで、仇しあだなみ婀娜めきたる言の葉の、末の世に傳ふるを響れとす、活きながら火坑に身を投じたりともいひつべし。爰をよく聞きわき給へ。かくまで罪の深縁、松のくらくらるといはる、身も、女はおなじ女にて、自他うきたる心より、異夫を重ぬるにはあらじ、貞をはなれて貞あり、操をすてて操あり、知らせたまふうへは、詳に言ふに及ばねども、丫角の頃よりして、いひ交したる其の人の、長の病著にせんかたなく、遊女とはなつたれども、夫に自滅を取らせんと計りたる仇敵に、小夜衣を重ねんか。」と、息まき荒く言ひけるを、土右衛門は目注にみやり、「口賢くもいひつるかな、斯くなる上は千々の金にその身を贖ひ、思ひを晴らさでおくべきや。」と冷笑へば、杜鵑花は眉じりひきあけて、「色と情を販ぐ身と、怒りを笑ひに紛らして、物和かに應へなすに、聞くに憂き非義非道、人の面獸の心、言葉かはすも穢らはし。」と、座をたたんとしけるに、土右衛門も怒り心頭よりおこり、裾を扇に突きとむる。杜鵑花はなほもうち腹たち、持つたる疊昏面にうちつけ、力をきはめて桂の、裾をはらへば煩惱の、犬つくばひに撲地と轉け、又起きたちて捕へんとする折こそあれ、軒にかけたる燈籠を、めあてに何人かは打つたる礫、燈火きえて翳々たり。杜鵑花はよろこび庭におりたち、木影に身をひそめけるを、土右衛門更にこゝろもつかず、急くも後堂に逃行きしとおもひ、何やら一人點頭き、一室の裏へいりにけり。時に柴折戸を剝喙と喧ふ

者あり。杜鵑花おそるくさし規けば、是れ則ち五郎藏なり。且おどろき且よろこび、「いつの程よりか爰に忍びて居給ひし、いま星影土右衛門に巡りあひし。」と言ふを止めて、「我嚮よりの様子は、垣の外面に聞き居たれば、再び語るに及ばず、又磔をもて燈籠の火を打ち消し、御身を密かに招きしは。」といひさし、邊に人やあると右左を顧み、縁側に尻うちかけ、尺八臂に突きもたせて言ひけるは、「頃日良治君、本國の御館にはさまぐの怪異あり、是れ悉時鳥の方を殺害なしたる怨魂のなすところに、遂には瞿麥の御方も、狂ひ死をなし給ひしと夙かに聞けり、杜鵑花は然いふ事を知れりや。」と、問へば聲を密め、「其の事は君より玉章に言ひ越し給ひしとて、逢州主の物語に聞きぬ、夫れより逢州主も只管におもひ屈して、唯いねがてにてすぎ給ふ。」と應ふれば、五郎藏は吐息して、「爰に一つの難儀あり、其方も豫てしりつらん、逢州主の揚代、それかれ百兩あまりの負債あり、田字草の長我をはたる事厳し、原來溫柔に生ひ立ち給ふ良治君、さる事には心づき給はず、さればとく御館も謠かならざる折柄、斯くと聞えんも近臣の手前憚りあり、と許りにては事果てじ、憂きが中に又憂き事を聞ゆるは心なきには似つれども、恩惠厚き君の御爲、我にともぐ力を添へ、小金才覺してたべ。」と、うちしめりていひければ、杜鵑花はまづ胸塞がり、「妾もとくより小金を調へ、負債を長に償はんとは思へども。」と言ひけちて潸然と泣く。五郎藏も噙しばだ、き、「嗚呼負めの事のみ苦にやみて、勞うて給

はるな、命ぞ人のもの種。」と、涙拂うてたつ袖を暫しとひかへ、「まだいふ事も多なる。」と、ひき止むれど心強く、「否人めに懸らば悪しからん。」と、立ち出でしが又立ち戻り、「やよ杜鵑花いと々さへ、思ひほそりし逢州主に、負債の事はしらせ給ふな、近きに忍びて來らめ。」と、立別れんとしける折、庭の小笹の茂みより、曲者二人あらはれ出で、ものをも言はず拔打に、はつしと切れば五郎藏は、飛鳥の如く身を轉らせ、右と左に投げ退けたり。「あなや。」と杜鵑花が聲たつるを、五郎藏は手をもて止め、「とくく行きね。」と奥に追ひやり、優々として立ち出づれば、曲者は怖るくおき上り、白刃を引提げ、五郎藏が背後について往くぞとは、知るかしらぬか尺八を、心にいれて吹きすまし、顧みもせず歸りけり。

第六

五郎藏杜鵑花と思ひ違へて逢州を殺す

土右衛門再び隠形の術をほどこす事

世の中の憂き事はみな身の上に、ふりかゝりたる春の雨、身をしる雨にくづをれし、杜鵑花は一人樓に、思ひわびつ、侘びしらに、煙草の煙雲となり、胸のおもひはれやらす、人氣なければ吐息をつき、「鴻恩うけし主君の御ため、天に齊しき良人のたのみ、此の身は何等憂目にあひ、命に及ぶ事ありとも、露厭ふ氣はあらねども、操をまもる心から、心の下紐うち解けて、小寝る夜もなき川竹の、

流れに沈むは名のみにて、何人に黄金の才覺を、いひよる方もあらし吹く、貧しき宿は春ながら、花もさかざる憂身やな、嗚呼兔に角に經がたき物は世の中。」と、いひかけて唯濟々と泣きにけり。斯かる折柄一室より、「その金御身にあたふべし。」と、立ち立つるは土右衛門なり。杜鵑花は聞くもうたてしと、立上る裾の上に、百兩あまりもあらん、小判をいれし財布を、はたと投げ出しければ、杜鵑花も金の才覺に、おもひ屈したる折といひ、黄金の鎖にゆきかねて、「御身のために怨みこそあれ、恩もなき妾夫婦、多なる黄金を給はらんとは、よも實とは思はじ。」と、おそろくいひければ、土右衛門む、と打笑ひ、「女の淺き心より、さおもふも尤もなり、其の身は憂目にあふとても、良人のためには厭はじと、御身が今獨言ちしを聞くに忍びず、此の黄金を參らすあひだ、五郎藏が當難を濟ひ給へ。」と、信だちていひければ、杜鵑花は不審ながら先づうれしく、取りあけんとする其の手をはらひ、財布をとつて膝のほとりへおき、「いかに杜鵑花、袖の渡の花見のとき、遠山尼公の御身にいひしをおほえあるらめ、落花心あれば流水また情ありと、御身に落花の心なくて、我何ぞ流水の情あらん、この黄金を得んとおもはば、一筆すらくと書きながし、我に與へ給ひね。」と、思ひがけなき土右衛門が言葉に暫しうち案じ、「妾に書けと宣はするは、其の黄金を借りうくる、券書とやらの事にやあるべき。夫れなればいと心安し。」といへば、土右衛門頭をふり、「否券書にはあらじ、五郎藏へ離狀かき、

我がこゝろに従はば、千々の金も惜しむにたらず。」と、聞いて杜鵑花は物をもいはず、座を立ち奥へゆかんとす。土右衛門は敢て留むる氣色もなく、「答へもなさずたち去るは、此の金を得んといふ、心はなきにやあらんすらん、此の金なきときは、御身夫婦が淺間家へ、鴻恩を報ゆべき其の期を誤つべし、さればとて用なき金を、與ふべしと我はいはじ、そは御身が心任せなり。」と、財布を取つて懐に納めければ、杜鵑花は千に百に念じ侘び、少時答へもなさざりしが、心に思ふは、まづ彼にしたがふ姿にみせ、假に離狀を書いて良人へ送り、彼の金をもて負債を償ひ、その云説に自害せんとおもひさだめ、さて土右衛門が傍に立ちより、「今となりて妾が恥を、君に聞ゆるも便なければ、かくまでに實ある君が心に心とけ、こゝろのうちを語りまらせん、妾疾くより五郎藏が、赤貧となりしを疎んじ、縁を斷たまくおもへども、富めるにつき貧しきに離れなば、人の誹り我が身の上にあふべしと、いまだ言葉には出さず。君若し其の金を妾におくり給はる時は、五郎藏に與へて主家の用に宛てて、夫れを功に五郎藏と縁をたち、君に終身をまかさん事いと易かるべし、愈金を與へ給ふや。」といひければ、土右衛門は事成りたりと心に喜び、「御身此の場をさらす、五郎藏へ送るべき離狀書いて我にあたへ、今宵田字草が長に誘引ひのかば、いかにも金を與ふべし、いざとくく。」と催して、金は財布のまゝ、杜鵑花がまへに差出しければ、美しくうち微笑み、「君にかくまで實あり、妾も何ぞ實なか

らんや、これ見給へ。」と違棚より、硯の箱をとりおろし、流石面なくやありけん、うるはしくは見えぬまでに遠ざかり、少し燈火を背け、手もとたゆげにすり流す、墨はゆがめど真直なる、女の心一條に、夫ゆるる、命毛や、鹿のまき筆とりあけて、山鳥の尾のながくと、くり返したる巻紙に、書き流せしが熟見て、あなをさなしと引破き、又書きくだし讀み下し、戒刀に換へて切れどきれぬ、筆の叢さへよしや世は、短き蘆のかりぶきと、涙かくして差出せば、土右衛門は莞爾とうちるみ、「よくも書けり。」とて受け納め、金を杜鵑花にあたへ、いそがはしく梯子をくだり、暗號と覺しくうち嗽けば、庭の隈より太九六素兵五あらはれ出でて、土右衛門が前に跪き、「さても命せにしたがひ、庭の木陰にかくろひるて、五郎藏が歸りをまち、唯一うちと切りつけしに、這奴も強者、何の苦もなく投げ退けられ、思ひの外に辛き目見て、われくが命既に危かりつるが、何おもひけん後をも見ずしてかへりしかば、怕るく背後につきてうかッひゆけども、這奴が勇氣烈しきゆるにや、たえて打掛るひまもなし、首領彼をうち取るべき、手段をめぐらしたまへ。」といひければ、土右衛門呵々と打笑ひ、「あら言甲斐なき奴等かな、彼如きに惶れ戦き、逃げ歸りし臆病を、白地に物語るは、直なりとや賞むべき、鈍しとや笑ふべき。」とほとりを顧み、彼の杜鵑花が玉章を取出し、「是れこそ杜鵑花より、五郎藏におくる離狀なり、我杜鵑花を言賺きてかかせつれば、二人は急ぎ五郎藏が家にいたり、這奴

が怒りをひき出し、門邊に待ち受け討ち止めよ。」と渡しければ、太九六は受け納め、「五郎藏にこの離狀をわたさんは、いと心やすき事にはあれど、我は嚮に投退けられ、腰痛みてたへ難し、討ち取る役は素兵五に、命せ給ひね。」といふに、素兵五大いに驚き、「投げられしは和主のみにあらず、我は流れの中に落ちいり、岩に吐をうちつけたれば、眩きて、歩行くだに心に任せず、我は其の玉章をもてゆくべし、和主門にまちうけ給へ。」と、争ひ果つべうも見えざれば、土右衛門は氣を焦ち、「さまで五郎藏を懼るゝとなら、汝等の手はからじ、とくく玉章を持ちゆきね。」と二人を追ひやり、扱元の樓に登り、「いざとく田字草が長にゆくべし。」と急がしたつれば、杜鵑花は答へもなし兼ねて、掌を帶の間にさしはさみ、「妾常に癩聚のやまひあり、時も時とてひたと鳩尾を塞ぎ、言ふさへもいと苦し。かくては程近き、長が家にも歸り難からん、少時まち給はれ。」といひつゝ、も、又打伏して息もたゆげに見えけるに、土右衛門は心得ぬ面持して、なほさまなくに賺しければ、杜鵑花憂氣に起きあがり、「往かで叶はぬ事あらば、君ばかりゆき給へ、妾は病愈えて後、心閑かに歸るべし。」と、鬱結として更に人事をしらす。土右衛門は大いに怒り、「我ひとり長が家にゆく程なら、言葉を盡して離狀をかかしめ、何ぞ黄金を與へんや、是非に我を誘引ふべし。」と、惱める杜鵑花が手をとって、引立てんとする其の折から、「やよ少時待ち給へ。」と聲かけ、昏門さと開き、徐ら二人が中にわけいり、手に持ちた

る團扇をもて、土右衛門を押し止むる者あり、誰ぞと見れば是れ則ち逢州なり。脂粉の妍は雲を鬢に起し、綺羅の艶は茶の秋を摺る風情あり。唯是れ乙織女の下界にくだるかとあやまたる。さて逢州驚の囀る如き聲を出していひけるは、「星影主とやらんには、妾をばしらし給ふまじ、杜鵑花主とは姉妹の如き、逢州と云ふ遊女にぞはんべる、妾も頃日病に苦しみ、枕をもあけざりしが、遁れざる事ありし、嚮に此の茶亭にきたり、事の一二は昏門のあなたにて聞き侍ふ。互に答の頃よりして、言ひかはしたる其の人に、離狀書いてわかる、とは、よく／＼深き由縁ありて、否、よく／＼深き君と杜鵑花主の、縁にやはべりなん、今夜を千よのはじめとして、龜鶴の契りを結び給はん其のをりから、杜鵑花主の持病の瘡、嚙本意なうもおほさんが、ゆく末ながき諸白髪、今宵にも限るまじ、僅かの黄金を與へしゆる、病に臥したる其の人を、誘引ひしと言はれんには、却つて君の恥ならずや、妾をよくおほしあきらめ給ひね。」と、さまざまに言和めければ、土右衛門も言葉をやはらけ「兼て聞き及びたる華魁逢州主の、さまで事をわけいひ給ふを、聞き分けぬにはあらねども、田字草が長に誘れゆかんす契約にて、金まで渡せしに、俄の病は心えず、杜鵑花が事は吾にうちまかせ給へ。」と、又立ちよらんとなしければ、逢州はなほおし隔て、「さおほさば波風たたぬ計らひあり、見給へよ妾は髪もとりあけず、臥したるま、の身馴衣、白綾の此の小袖と、杜鵑花主のはなやぎたる、自結の衣とぬぎかへて、

藻蒲黄に霞水、たれしらぬ者もなき、杜鵑花主のあの提灯をもたせなば、夜目にはそれと人も見ん、殊に桂は一對に、胡蝶を縫ひしも時の幸ひ、妾を假に杜鵑花主と思ひ給ひ、長が許にいたり給はば、程なく主の病もおり、後よりきたり給ふべし。」と、流石に里なれし逢州なれば、杜鵑花が心をはやくも推し、土右衛門を此の處にあらせじとて、言葉をとくみに賺しこしらへければ、土右衛門も逢州が辯舌にいひまはされ、しぶ／＼に承引きけり。杜鵑花はいと侘しけに、物もつやく／＼言はざりしが、過刻に離狀を書き誤ちたるさまにもてなし、調へおきつる玉章を、袂より取出でて、逢州が耳に口を寄せ「密かに五郎藏どのに、おくり給はれ。」とわたしければ、逢州はさらぬ面もちしてとり隠し、是れぞこのよの別れとは、しら綾の衣脱ぎすて、杜鵑花が胸の火燒草、我が身の上に着かへたる、紅蓮の炎の緋鹿子に、雪の肌の消えてゆく、ともしらすして下りたつは、三惡道の段梯子、日わたる駒の駒下駄も、一足宛に死を急ぐ、いざさせ給へと鬼々しき、火車は地獄の使にて、無常風に吹きかへし、蹴かへす月日の風裏、命の種の根や食まん、星影といふ毒龍あり、さきに猛虎のかくる、ともひもかけず逢州は、さまざまに言慰め、杜鵑花をば甲屋に残し、土右衛門と打連れだち出でけり。是れはさておき素兵五太九六の兩人は、御所の五郎藏が隠家に尋ねゆき、嚮の手なみにや驚きけん、門首に傍徨みて内にはいらす、「何やらん杜鵑花主が、これ送り給ふ。」とて、かの玉章を投げ出し、足

ばやに逃げさりけり。此の時五郎藏は家に歸り、唯一人あぐみ居て、來しかた行末の事など思ひめぐらし、手を叉きてるたりしが、何の心もつかず、杜鵑花が文を手に取りあけ、燈火のもとに繰りかへし繰りかへし讀み終り、且怪しみ且おどろき、これ正しく離狀なり、過刻に會ひつる其の時は、常に變りし事もなく、うつて替へたる彼が胸中、女の許より男のもとへ、離狀おくる例もなし。あな不審しや若しくは土右衛門、我が怒りをひき出さんとて、然はからひしにやあらん。」と熟見れど、杜鵑花が筆蹟に紛ふべうもなければ、少時默然として、左往右往に思ひめぐらし、や、ありて忿然として怒りをおこし、最前星形土右衛門、甲屋にて杜鵑花をとらへ、言葉をつくして口説りしを、彼は厭ふさまなりしが、定めがたきは人心、我赤貧となりしを疎み、其の身を彼にまかせつるか、否、夫れも我が潔白なる心にくらべつる推量といふべし、今こそ思ひあたりたり、とくより杜鵑花土右衛門に隣くといへども、嚮には我垣の外面にしを知らず、わざと難面くもてなすさまを見せ、心をゆるませ這奴が手下にいひつけ、我を害さんたくみよな、運強くも脱れし、あなおそるべし。」と、數回歎息なせしが、なほ怒りに堪へずやありけん、ずんと立つて押入をあくる番門の闔みさへ、焦心れてとり出す脇差、鞘にふせたる蝶鮫も、浮世を夢としら絲に、歪まぬ菱の雙索り、腰にほつこみ走せ出でける。かく恰惻人に勝へたる五郎藏といへども、火性短氣をいかんせん、玉の瑕にや比せん、錦の破

れとやいはん臆々。却つて説ふ逢州は土右衛門を誘引ひ、甲屋をたち出でしが、此の夜も春に似もやらず、空さへ曇りがちにて、そよ吹く風衣さむく、花の吹雪は雲よりや、こほる、かと覺ゆめる。子刻鐘も告げわたり、「魚鮮めせく。」「按摩肩癖。」とよびありくのみ、軒守る犬の吠ゆるるるに、打ちまじりてものさみしく、甲夜のにぎはひにはひき替り、花街寂寥として夜色又幽々たり。禿火車は、逢州がさきにし、み後にさがり、夜もはや更闌けたれば、「大夫主急がせ給へ。」と催せど、逢州は杜鵑花がおもひ勞ふを見るに堪へかね、當難をたすげんとて、土右衛門を誘れきたりしなれば、田字草が家に歸りて後、免やせん角やいはんと、心も心ならず、「あれ見給へ雲のたえまの星あかりに、櫻の白くのみ見えたるも、何となく風情あり。」と、様ありけに物語り、寛かに詠め徐かにあゆみ、聞あらせんとて、屢行きを止めければ、土右衛門は氣を焦燥ち、「長が許にいたりなば、疾く杜鵑花をよびむかへ給へ、斯くほど近き路を、往きなやむといへる病にもあるまじ。」と、流石逢州がうち上りたる、たち行跡に恥ぢやしけん、其の外の事は言はず、既に田字草が家も近づきけり。さても御所の五郎藏は、手巾にて面をつゝみ、はやくも逢州よりはさきへまはり、辻方燈の影に身を潛め、いまやノと待つをりしも、藻蒲黄に霞水、おほえある杜鵑花が提灯、嚙き來る其の客は、まがうべうもなき土右衛門なり、不法の大賊水性の淫婦、這奴兩段となして、怒りをやすめんと思ふから、氣逆のほり眼く

らみ、衣の色あひにのみ心をとめ、逢州が面は見も定めず、往く先へつと現はれ出でて、腰刀閃かして提灯撲地と切り落せば、「あなや。」と禿が叫ぶ聲、火車は白刃を見るよりも、足なへて起ちもあがらず、逢州は豫てより、仇を討たんす願ひありて、心男々しき女なれば、若しや吾が仇の餘類、反討にせんとて来りしか、さるにても便宜あしと早くも心づき、駒下駄脱ぎすて、善悪もしらぬ暗を幸ひ、三間ばかり逃れゆく。衣にとめたる炷物の、薫を知方に追ひゆく五郎藏、板金剛にて背後より、裾をしかと踏み止むれば、桂ひらりと脱の空、聲さへたてぬ虚蟬の、また逃げ出せば又追ひゆき、切りこむ白刃は冷りと、顚にさはつて空を突く、はつとばかりに飛び退く逢州、衿よりこぼる、紅の、肌著をおもはず踏みくゞみ、撲地と轉べばおこしもたてず、臍四五寸切りさけたり。呀と叫ぶをこころよけに、衿髪とつてひきまはし、氷の刃胸に突きつけ、「己ゆゑにこそ鴻恩受けし、御主君の勘氣をかうむり、今となつて讎敵たる、土右衛門に身を任せ、榮利を計る老野狐、我に恥辱を與へしは、此の胸に覚えあるらん、怨みの刃うけとめよ。」と、聲たつる間もあらせばこそ、力を究めてさし通せば、雪の膚も紅の、鮮血に染みて魂きはる、玉の弁地におちて、今仙境にや歸らん、花の姿を見すてつ、いまはの鴈も空に啼く、聲もろともに息たえたり。「あなこ、ちよやさるにても、土右衛門はいかにしつらん。」と、見廻らす折ふし、風あれ雲破れ、二十日あまりの月山の端にさし登り、皎

皎として白日の如し。五郎藏倍度打見やれば、いつの程にや逃げ去りけん、側に人氣なく唯土右衛門のみ自若として傍徨みるたり。「這奴不敵の曲者退しはせじ。」と、白刃打振り切りか、れば、土右衛門は莞爾とうち笑み、「おのれ来つて虎の鬣をとらんとするや、嗚呼危し。」と、廣言はなつて抜合はせ、丁々と戦ひしが、奇なる哉妙なる哉、朝日向ふ霜の如く、土右衛門が形忽然ときえ失せ、唯白刃のみ虚空に閃き、撃てど拂へど手ごたへなく、霞を切り煙を突き、又陽炎を握るに似て、いかんともせんすべなく、ほとく危く見えけるが、五郎藏不圖心づき、眼をとめて熟見るに、姿こそ見えね土右衛門が壁人、月影にありくと、街上へうつりければ、扱こそ彼が幻術も、大陰の徳には勝つ事あたはずと覺ゆれ、是れ天の助けなりと、影を的に空をきる。土右衛門も五郎藏が勇氣はけしきに、敵し難くやありけん、又も八重雲吹きとちて、月をかくせる雨曇りにまぎれて、遂に逃げ失せけり。かかる處へ花街の雑戸、手にく棒を引提けつ、提灯ともしつれ走せ集まりしが、五郎藏が白刃を引提けたるを見て近くも進まず、あれ取逃すな。」とよばひ、遠く圍みて夫れ彼と罵り居たり。五郎藏も今は力なく、逢州が首うちおとし、袖ひきちぎつて腰に結び、鬮の離狀をうしなひければ、威の白刃うちふつて、遙かのあなた辻行燈を取り來り、心徐かに尋ねめぐり、逢州がとりおとせし、杜鵑花が後の玉章を、彼の離狀とこゝろえ、拾ひ上げて懐に確と納め、仇もなき雑戸に、疵を負

はせんも罪深しと透間を窺ひ、何地ともなく逃去りけり。さて花街の雑戸等は、逢州が死骸の傍にたちより、「藻蒲黄の縫紋衣の色あひ、切り落したる提灯の印まで、疑ひもなき田字草が長の、杜鵑花なるべし。」と言ひしらふ折から、杜鵑花は甲屋にありて、かくと聞くより夢の浮橋渡る心ちして、走り來りて亡骸を見るよりも、餘りのことに涙も出でず、惘然として傍徨みしが、身には逢州が白綾の小袖を著なしたり。嚮より瘡に苦しみて、髪さへも亂れつれば、雑戸は一め見るより、「あなや。」と喚び、「やよ杜鵑花主の幽霊、非業の死は是非もなし、あと殷勤に弔ひ進らせん、はやきえ給へ南無阿彌陀佛なむあみぶつ。」と、異口同音になへけり。

第六 後 條

田字草が長にては、花の司とたのみたる、逢州を殺害なされ、剩へ其の人をさへ取逃し、何者なる事をしらす、濕りがちにて次の日も、既に暮れなんとす。取りわき杜鵑花には、姉妹ともたのみつる、逢州が非業の死を深く歎き、病といひたて己が閨房にたれ籠めて居たりしが、若しや敵の手懸にもなりなんと、昨夜死骸の傍にて、拾ひ置きたる玉章を、取出し開き見るに、思ひがけなや五郎藏へ、送りたる離狀なり。杜鵑花も心驚き、左往右往思ひ廻らし、「扱は昨夜の離狀を、送りたるを實と思ひ、良人の怒りをひき出し、妾を害さんとなし、謬つて逢州主を殺害なし給ひしならん、こは如

何せん。」と少時涙に暮れるたるが、屹度心を定め、「主君と敬ふ良治公、夫れに因縁ある逢州主を殺したる云説には、五郎藏殿切腹し給ふに疑ひなし、無益き繰言はんより、妾先に自害して、人を殺せし悪名も、我が身の上に著ぬべし。」と五郎藏に送らんとて、縫ひおきたる綿入を取出で、桂の上に着なし、手篋の内に隠しおきし、懐劍をぬき放し、左の小脇に突立てたるが、流石女の心弱く、鮮血さつと漬るに、暝眩きてたまりえず、撲地と顛び、間の昏門を打覆せば、此の物音に打驚き、於杉は周章て走り來り、「こは杜鵑花主狂氣ばしし給ひしか、死なで叶はぬ事ならば止めはせじ、由縁を聞かせ給ひね。」と、勞り起せば眼をみひらき、「於杉殿様子と言うて外にもあらじ、昨夜逢州主を殺せしは、斯くいふ杜鵑花に侍るなり、さ驚き給ふも理なり、情人を逢州主にねとられしが恨めしく、人しらす殺害せしが、閨室の裏に不善をなせば、鬼得て是れを誅すとやらん、遂には此の身も罪せられん事思ひとり、潔く自害して冥途に赴き侍るなり、哀れ此の事五郎藏殿に、傳へ給はれ。」といひすて、刀を引廻さんとなしければ、於杉携り止めて曰く、「逢州主の最期の一條は、妾も心に徹せし事あり、死は一旦にして易しと聞く、まづ少時待ち給へ、いひ聞かすべき事あり。」と、様々に勞りける。

淺間嶽面影 草紙後帙 逢州執著譚 琴卷下

種彦著

第七

寄居蟲袖乞して四ツ竹の曲子を唄ふ
於杉が懺悔物語暗に母子再會の事

さても御所の五郎藏は、柳巷の雑戸には瘻も負はせず、難なく圍みを逃れたち歸り、逢州が首級とは曾てしらず、袖にひき包みしま、佛壇の下にかくし、次の日はさらぬ風情にてるたりしが、原逢州が殺されつる一條は、田字草の長も深くつゝみ、人々の口を留めければ、程近き五郎藏が隠家なれど、其の事は風説するものもなく、今は漸く心おちるて、梶原平平、秩父重助をはじめ、數多の手下をあつめ、終日酒斟みかはし、日暮におよびて、己が志々に別れたり。五郎藏唯一人となりければ、つくづくおもひめぐらすに、我が身赤貧となりしを疎み、富めるにつきて榮利をはかるは、惡みても飽きたらぬ杜鵑花なれど、あだめく花街の風俗ゆるゑ、斯かる不法の志もいできしならん、我長の病著に貯録つき、せん術なきところなれど、遊女となせしは我が罪にて、彼のみ惡むも由縁なきに似たり、昔は一つ衾により、憂きを語りし其の人を、一旦の怒りに乗り、仇敵の如くおもひしは、われながら偏屈なり、せめては首級を人しらず、寺院へ葬り亡きあとを、丁寧にも申はんとおもひ定め、流石は恩愛すてがたく、門口丁と鎖しかため、居よりて徐らひきあくる、昏門に畫く武藏野の、つまはこもれど花房を、ちぎりし如き死貌を、今はなかく見るに忍びず、ありあふ調度にするて、佛壇の前に直し、燈光か、け鈴うちならし、「南無幽靈頓生菩提、なむあみだぶつく」と、唱へつ、つくづくみれば、こはいかんせん杜鵑花にはあらで、逢州が在りしに變らぬ顔ばせなれど、血に塗れたる口もとより、嚙みしめたる齒の少しあらはれ、目は半ば開いて怨めし氣に睨むに肖たり。五郎藏は一目みるより、なみならずうち驚かれ、惘然として酔へるが如く、怪々として、夢に似たり。稍ありて獨言にいへるは、「あな訝しや引きちぎりたる片袖は、おほえある鹿子目のひ、杜鵑花が衣に疑ひなし、又昨夜見たる提灯の紋といひ、それと思ひ究めしに、これぞ正しく逢州主の首級なり、もしくは老狸野干の、我に憑いて障礙をなすにやあらん、たゞしは心の迷ひか」と、燈火を近くよせ、右み左みれど逢州に、紛ふべうもあらざれば、こは如何にせし錯ちぞや、まづ長が許に行き、よそながら問ひ究めんと、走せ出せしが又たち戻り、冤やせん角やせんと氣を焦燥ち、たちるる間に袂より、杜鵑花が王章うち散りて、風にうち開くるを克くみれば、昨夜の離狀にはあらで、假名も文字もしどけなく、行

逢州執著譚卷之四

亂れて書きなしたり。心せかる、其の間にも、手にとりあけて讀みくだす、その玉章のおほむねに曰

御ものがたりなくとも、田字草の長の負目は、妾あがなひ申さんと、さまざまに心をくだき侍れど、風をもまたで散る、ひと花ご、ろのかたのみにて、井手の玉河いひ出でんよすがもなく、いはぬ色なる山吹の、花の黄金はいつかもとめんと、まだ春わかみ谷蟻の、鳴かぬに思ひ彌増すをりから、星影の佞人妾に言ひより、君の御許に離状をおくりはべらば、金百兩與へんと聞ゆるも、いと苦しくは侍れど、路の柳垣の花、手折る人しまつ遊女と、身のあさましきをかへりみつつも、風に柳の吹くまゝに、まかするさまにもてなし、道ならぬ事としりつ、も、空言の離状をかき、その金にて長に負目を贖ひ、わらはは自害して浮世の夢を見はて、蓮臺とやらんを半ばわけてまち参らすからに、幾百とせの壽も過ぎ給はば、此の世にははらぬ水魚の契りこそ、心だのめに侍るなん、かしこ。

と讀み下して再びおどろき、斯かる杜鵑花がこゝろと知らで、一旦の怒りに堪へかね、討ち果さんとせし愚かさよ、我何の顔ありてか、再び彼に見ゆべき、加之人違へとは言ひながら、主君良治公寵愛他に異なる、逢州どのを殺害なし、若し此の事巷に泄れなば、良治こそ逢州が艶色にまよひ、淫

酒に耽り宴樂にのみあかしくらすが故、止む事を得ず五郎藏彼を殺害せしなんど、いひしらふも測り難し。瞿麥の方狂死より、おもひたえて柳巷にも到り給はず、仁義徳化ある御主君に、わが短慮からなき名を負はせてまつるに似たり。噫高山の高きに譬へ、蒼海の深きに比すとも、なほあまりある鴻恩うけし良治君、其の恩を露むくいたてまつらず、却つて御名の巷にいづる、不良の事をしなせしは、我ながら鈍しとやいはん、愚かとや言はん、神にも佛にも見放されしや、無念口惜し。」とて、袖を食ひ捌き疊にひれ伏し、女めかしく歎きしが、少時ありて兩肌押肌ぎ、氷の刃抜きはなし、逢州が首にうちむかひ、はらくと涙をながし、「夫れ人は定業不定業非業非業のほかにいえず、小笹の丸雪草の露、遂には消ゆるいのちなれども、嗚呼御身ほど薄命の者はあらじ、かくいふ五郎藏が短氣ゆゑ、はかなき最期をとけ給ひ、さぞな無念とも思ひたらんが、斯くなるも宿世のやくそくとあきらめ給ひ、心残さず成佛あれ、いで我も切腹して御身に罪を贖ふべし。」といひもあへず、脱ぎかけし袖に白刃を押し、左の小脇に突立てて、右の傍腹まで、一文字にひき廻す折こそあれ、お杉は痕負ひたる杜鵑花を竹駕にかき乗せ、喘ぎく走り來り、五郎藏が門にたちより、扇屨も破る、許りにうちたたき、「爰あけてたべく。」とよばはれど、たえて答ふる者なければ、力をきはめて押しかへし、鏝はづれてひらく扉に、力餘りて合破とこけ、五郎藏が自殺せしを見るよりも、「やれはやはり給ひし。」

と言ひさし、いそぎ外面に出で、杜鵑花を竹駕よりいたはり出し、門はもとの如く鎖しかため、五郎藏が傍に誘引ひぬ。さて杜鵑花は苦しき息の下より、「我が夫には何等故ありて、生害はし給ふ。」と問はれて、五郎藏莞爾とうち笑み、「それ我がいふべき事にこそあれ、我切腹なす由縁は。」といひつゝ、顔をもつて逢州が首をさし教へ、「言はずと御身等推し給へ、いと面なし。」と顔をそむけ、暫くは言葉もいださず、「いかに杜鵑花つゝ、むとすれど、御身も顔色例ならず、殊に衣より鮮血のしたゝるは、一定深き由縁あらん、疾く語りてよ。」といふさへも、いと苦しげなり。其の時お杉近く進み、「杜鵑花主はけさより、心持つねならずと、物も一切いひ給はず、閨房にこもりて只管に、ものおもはしき面もちを、心得ずと思ひし故、さまざまに言ひ慰め、物と、のへる其の暇に、呀と一聲魂消えて、はせよりみれば無残やな、雪の膚を搔破り、杜鵑花ぬしも此の自害。」と、つほ折りし衣袂ねのくれば、膚著に通る鮮血の紅、見るより五郎藏大いに驚き、「なほ仔細あるべし。」と、うち潛まりて聞き居たり。お杉重ねていひけるは、「妾も周章て抱きおこし、「何恨みありて生害には及び給ふ、様子を聞かし給はれ。」と、問へば答へて、「此の杜鵑花は、逢州に情人をねとられ、その怨みはれ難く、暗にまぎれ殺害し、人知らずとは思へども、天道いかでみ許し給はん、遂には逃れぬ罪咎と、心より思ひ諦め、腹切つて死し了んぬ。」と、涙一滴おとしもせず、潔ういひ給ひしぞや。噫素姓とて争はれず、流石は武

士の妻なりと、おもふからなほ悲しくて、せめては息あるそのうちに、御身に會はせ餘波をも惜しませんと、病氣といつはり竹駕に乗せ、いたはり來たる甲斐もなく、五郎藏どのも此の切腹、よくく淺き縁にや。」と、悲歎の涙袖を潤し、「いかに杜鵑花ぬし、戀故人を害せしといひなし、實はこれなる五郎藏殿の身にかはりて、死なんとこそおもひ給ひしならんに、さぞな本意なく思ふらめ。」と、心の底をいひあてられ、杜鵑花も漸く膝行りより、「喃五郎藏どののお杉どのも、斯く知らせ給ふ上はつゝ、むも益なし、女の心はいと淺く、星影土右衛門を言ひ賺き、金と、のへんとおもひこみ、加之筒様筒様の由縁ありて、逢州ぬしと小袖を脱ぎかへ、咎なき人ははかなき最期、其の場におちある離状を拾ひあけ、君の怒りの刃にふれ、人違へなる事を諷り得て、何等おもひ廻らせども、伶俐しだてせし此の身は罪人、悔の八千たびくゆれども、かひも渚に海士の刈る、みるめを忍ぶ閨房のうち、君の綿入を身に著なし、女めかしく自害して、吭のくさは搔切らず、御身にかはる心にて、腹切つて死ぬ此の杜鵑花を、少しは不便と思ひ給はば、未來は變らぬ夫婦ぞと、いうて聞かせて給はれ。」と、絶えいるばかり泣きにけり。五郎藏も涙搔拂ひ、「我とても今となりて、お杉どのはいふも更なり、御身に會ふさへ面目なし。僅かの金にさしつまり、物語りしが仇となり、こゝろを千々に碎くなる、金を得てん謀みとは、淺き心にしら絲の、染むればそまる人心、憎しくと思ひこみ、我が妻ながらも大恩あ

る、御身を討ち果さんとせし冥罰は、忽地此の身に報い來て、假にも主君の褥をとりし、逢州殿を殺せしは、主を討ちしに齊しきぞや、極重惡人無他方便、唯生彌陀ときく時は、唯念佛こそ頼もしき、さらば生死の雲を消除し、偕老の華臺同穴の寶地にて、再會せん。」と絶え入る息を吻とつき、苦痛をみせじと眼をみはり、やよ杜鵑花「御身はさまで深痕とも覺えず、殊にいさ、か罪なき身ぞ、何卒疵の養生して、ながらく跡を弔ひてたべ、いふべき事も是れ限り、さらば。」と言ひ捨て、刀を引廻さんとする、其の手にお杉は縋りつき「愚かの事をいひ給ふ、松の二葉は常磐にて、一本芒枯れ易し、野中の案山子滯標も、獨りはたたぬ世のためしぞ、御身が死去給ひなば、何條ながらへ居給ふべき、杜鵑花ぬしを助けんとおもひ給はば、御身もともく養生して、壁生草のいつまでも、添ひ遂げんとは思さずや、言ひがひ無の心やな。」と、激す詞の嬉しくて、杜鵑花は痛癢うち忘れ「お杉どのよくとどめては給はりし。五郎藏どのに會ふときは、言ひも懲し給はんとこそおもひしに、さもなくして親しき今の言葉聞き、死にて嬉しき命なり。冤にも角にも我が夫は、活きながらへて給はれかし。雪に折けし弱竹や、水にかけそふ藤波の、逆さま事には侍れど、思ひ出で給ふをりもあらば、一杯の水一枝の花、手向けて給はれ我が夫。」と、いひかけて又よ、と泣く。五郎藏はお杉をして、側の屏風にかけし小袖を取りおろさせ、さて言ひけるは「我御所の五郎藏と、畧々人にしられし身が、兼ての覺

悟も最期に亂れ、心急かれしといはれんも面なし、氣をおとさせじとおもふから、嚮のやうに聞えつれ、御身も我も此の瘵にては、存命ふべしとおもほえず、此の小袖は我が下著にとて贈りたる、燕子花の百色ぞめ、御身も綿入の其の下に、著なしつるは幸ひなり、これを著替へて一對となし、先や最期を潔くなすべし。」と、深痕に屈せず徐ら身を起し、小袖をとつて肩にうちかくるも、いと苦しけなれば、於杉は視るに忍びず、涙隠して傍にたちより、帯ひき結びつ介抱なす。杜鵑花も漸く身をすりよせ、「在りしに變らず逢州ぬし。」と、三人面は合はせながら「軀の無きぞ寔し。」と、首級を袖にうけもちて、又繰りすつる千行の涙、お杉は不圖心つき、夫れにこそ屈竟のものありと、腰につけたる風呂敷包とり擴げ、是れぞ昨夜逢州主の著給ひたる桂なり、幘幡につくりてある蘭若へ納めんと、嚮に做衣裳のもとへ、持ち行くべしとおもふ折から、杜鵑花主の此の爲體、おもはず此處へ持て來りしも幸ひなり、これを逢州ぬしの軀の、形代とも見給へ。」とさしおきぬ。五郎藏もつくづく見るに、昨夜逢州を殺しつる折、桂ははやく脱ぎすて、更に鮮血に染まず、たゞ板金剛にて踏みとめたる、泥のあとの残りしを見るより、「其の刻は氣もきえ心も亂れ、苦しくもありつらん、唯一聲叫びたらば、斯く無残には殺害もなすまじきに、心雄々しきも却つて其の身の仇となりし。」と、數回歎息なしけり。時に初更の鐘聲鏗々と響き、芭に植ゑたる一樹の櫻、爛漫と咲き亂れしが風に誘はれ、はらは

らと落ちそふを信度みやり、「いかに杜鵑花、我いまだ須崎角彌といひし昔、御身と密かに通ぜしを、土右衛門に見顯はされ、既に刑罰におこなはるべかりしも、永和三年三月中旬、北上川袖の渡の花のときなり。所と日は異なりといへども、遂には花下に命を果す、是れ宿生よりの約束と思ほゆれ。かかる緯は末の世に語り傳へ、男も女も行狀正しからざれば、淺ましき死をなすといふ、人の教へになすべし。」といふに、杜鵑花もいと苦しげに眼を見開き、「忘れもやらじ其の時は、牧山の長福寺よりの歸り路、遠山尼公の命せをうけ、むかし結城莊七郎景氏が娘、千世能姬がつくりたる、浮世わすれといふ今様をうたひ、御身の鼓弓と妾が琴を合奏せしは、縁を結びしいとぐちなりしが、浮世の夢を見はてつ、消え往く身にはいと似合はし、此の世の名残に彼の今様を朗詠せん。」といひかけ、壁にかけたる鼓弓をとり卸させ、漸うと膝にのせ、先づこゝろみに清攪きければ、五郎藏もうち微笑み、「それにてこそ我が妻なり、おくれはせじ。」とこれも又、尺八をとり出し、吹き合はすれど息洩れて、傳ふ涙は露きりに、きれどつながら妹と春や、戀慕ながしの徒し名も、鼓弓呼吸の絲たえて、魂は虚空に海老尾、梓の御子にあらねども、鼓弓の弓の音にぞよる、一世の親子二世の夫、三世の主の三つの絲、絲まきしめて調子ほどよくひきならし、

まづ春は花の本、夏は涼しき河ぞひに、夜よし月よし秋たちて、雪の朝のなよ竹に、止るすめ

の千代となく、浮世わすれておもしろや、うき世わすれておもしろや。

千世能姬浮世忘れの今やうをうたひし事、本朝二十四孝に見えたり。

と唄ひけるが、日頃好むところの妙手なれば、音色も清み渡りて興ある事とは聞ゆれど、いと憐れはまさりけり。斯かる折から袖乞とおほしく、四十ばかりの男と二八許りの娘と、門の外に傍徨み、彼の男恭しく嗽きして、「これは風流新口説、四ツ竹のうち合はせ、昨夜の事を今日すぐに、唄ふ處を興じ給へ、小歌は世にしろ魚屋梅露草子がさく、三絃は奥山桃雲が手を下したれば、拙からざるは聞きての後しらせ給へ。」と、ことばには似ず板廂に、霞のはしる如きおとして、三絃をいとさわがしくひきならしければ、娘は愛敬つきて四ツ竹を、雙の手にうち合はせつ、うたひけり。

是れより袖乞の娘の歌、爰に哀れな説話がござる、まだき蕾の頃ほひよりも、水を洒ぎつ小枝をたわめ、臥具の錦の室咲に、さけば色香のいと隠れなき、花の都の柳巷の名とり、時に逢州自他毎に、愛でつみほれつ錦木よりも、門にたつ人身もくづをれて、男たやしよ緒絶の橋の、君をあこやの松甲斐もなく、外に出羽いづると栢植の、小櫛とる間もしき波よせて、茶屋がむかひの提灯は、星を連ぬる宵々毎に、忍び逢瀬のそのもつれにて、端手な柳にするとき松の、葉越々々の月ならなくに、あはや閃く劍の霜に、ありてゆく身は血汐のみぢ。

勢州間山にて唄ふ小歌は、同國山田川崎町に住みし、魚屋梅露草子といへる者の作なり。踊の音頭小歌もおなじ作者なり。梅露川崎町に住むがゆゑに、川崎音頭とも伊勢音頭とも言へるなるべし。三絃は奥山桃雲といふ者手をくだす。此の桃雲は本師職なるよし、予が藏する或人の隨筆に見えたり。其の時代は異なるべけれど、此の小歌の作者にも、梅露草子が名をかりもちひたれば、因にしるしつ。

唄ふ聲に五郎藏は耳を敬て一時もときとて物をが、唄ふ小歌は逢州ぬしの、果なくきえし身の上を、何地の何人か作りけん、浮きたる心もありし如く、言ひ傳ふるこそ恨み多し、嗚呼善しといへ悪しといへ、其の人の名を巷にもらせしは、我が短氣より起りしにて、怨むべき人もなし。」と、又後悔の涙にくれ、袖打絞るを物乞は、他處の時雨と星あかりに、あやしの本を繰り廣げ「さあ聞き給へ是れからが、逢州の最期物がたり、一しほ憐れなところに侍ふ。」と、大聲に呼ばはり又三絃を弾き出せば、娘は聲もうら悲しく、斯くぞうたひいだしける。

歌詞逢州苦しき聲をあけ、是れ喃少時まち給へ、妾に何の咎ありて、かかる憂目は見せ給ふと、節「いへど叫べとつゆ聞きわけず、何の由縁とは事あたらしや、我とおん身はY角よりも、變らじものといひ交し、仇し浮名も憂事とせず、共に憂世を諸白髪まで、渡りくらべんものとし誓ひ、

阿波の鳴戸のあひ見ぬ暇に、よそに浪風々々たちつ、他の眺めと散りゆく花は、爰にちらして此の身も共に、死してうきたる名を流すのは、詞まだ思出と言ひつ、も、氷の刃胸をつらぬき、あをち苦しむ光景をみるよりも、流石命の惜しまれて、節「かへす刀に首かきおとし、往方しれずに落ち失せければ、未練者としてみな口々に、笑はぬ人ぞなかりけり。實に逢州が無残の最期、哀れなりとも中々に、申すばかりはなかりける。

「あれ聞き給へ五郎藏殿、かくもあらんと推量して、心正しき逢州とはしらず、私夫に殺されたりと唄ひなし、剩へその人を、未練と誹るも其の人の、門と知らねばせんすべなけれど、妾も今宵死にゆかば、明日はいかなる悪名をや、此の身の上に負すらん。あな聞くもうたてし。」と、聲の限り泣きければ、お杉もいと理なりと思ふより、はふり落つる涙を袖に打拂ひ、物とらせて追ひやらんと、帯につけたる巾著より、唐錢三錢とり出し、門引開けて「いざ物とらせん。」といひければ、娘は深く辱ぢらひて、編笠を後だかに被り、面は白地にあらはさず、白やかなる手に錢を受持ち、數回おしいたゞき立ちかへらんとなしけるが、何事か心に徹しけん、彼の男の耳に口をよせ打密語きて、小柴垣のほとりに身を潛め、内のやうすを聞きたり。とも知らずしてお杉は原の席に立戻り「嗚呼妾程頼む方なき者はあらじ、捨て果てし妾が身も、存命へあれば存る世なるに、惜しまる、身は留まらで、

かかる哀れを見る事よ、妾こそ自害して、死なで叶はぬ命なり、今となりていひ出づるも、面なき業には侍れど、懺悔に罪もきゆるとやらん、苦痛を凌ぎ聞き給はれ、妾は原丹波國氷上郡柏原にすみし、鏡師木の瀬といふ者の妻にて、良治公の側室時鳥の御方に、辛き目見せし繼母は、則ち此の杉に侍ふぞや、思ひ出づれば往んじ應安三年、夫の木の瀬宇の葉と名づけし、四歳になる娘を誘引ひ、都がたに赴きての歸るさ、淀川の夜船にて、喧嘩買とやらんの騷擾に紛れ、宇の葉と思ひて異人の娘を連れ歸り、何方の何人が子としらねば、せんかたなう後の宇の葉とよびなせしが、吾が頑なる心から、繼子々と惡みつゝ、夫の木の瀬世を去りて、いよくおこる貪慾心、遊女に賣つて金を得んと目算みしを、何人か宇の葉に告げたりけん、往方なうなりゆきしが、妾の邪見を疎みはて、親類血族も親します、身のおき處なきまゝに、此の都に赴きつ、田字草の長の老女となり、逢州主の物語を、熟聞き侍るに、淀より娘を誘引ひゆきしは、團一齋殿とかいひて、逢州ぬしの爹々とや、吾が邪みたるこゝろには似もやらず、名も寄居蟲とよびかへて、不便の者と養育み給ひ、姉妹のなからひもいと睦まじくすぎゆきしに、如此々々の由縁ありて、今は在所も知れずとて、言ひ出しては泣き給ふ、逢州ぬしの赤心は、此の身のための善知識、忽地惡念發起して、善心には立戻れど、我が方へ連れゆきし、逢州ぬしの媚女は、繼子々と疎みつゝ、あまつさへ行方しれずと、流石に妾もいひかねて、

心のうちにて手を合はせ、逢州ぬしを伏拜み、さらぬ體にもてなせしが、おもはずよ後の宇の葉は、良治公の側室となり、長がもとにて名乗をなしつる一條は、聞きもつたへ給ふらめ、妾も其の夜は心もつかず、歩廊にて聞き居たるが、悉身のうへの物がたり、胸のあたりへ燒鐵を、ささるゝよりも苦しくて、寧ろ娘に對面なし、只管賠話んと思ひこみ、障子ひらけばあら不思議や、妾はきて往方しれず、後に聞きぬ是れぞ時鳥の怨鬼なりと。妾が本意なきいへば更なり、さるからに恩を報ゆる心にて、逢州ぬしをいたはりつ、實の娘と冊きしに、夫れさへあへなき此の最期。」と、又も涙に咽せかへれば、手負も聞きて、「いと理なり。」と、悲涙袖を濕しけり。かかる折から外面に傍徨む物乞の娘、笠ぬぎすて、「許させ給へ。」と内にいり、首にかけたる守袋をとり出し、「是れ見覚えの候や。」と、お杉が前に差出しければ、訝し氣にすかし見て、古金欄の笹蔓形、「此の中には一寸八分の、正觀音の尊像はあらずや。」といふに、娘は猶もお杉が顔を熟守り、「妾は團一齋が娘、寄居蟲といふものに侍るが、此の守袋をしらせ給ふといひ、嚮よりのものがたり、疑ひもなき母上ならん、三歳の折淀の夜船に別れまるらせし、女子は妾に候ぞ。」といふに、お杉もうち驚かれ、「今もいとてしのぼしく、其方の事を言ひ出でしに、思ひきや外面に忍びて聞かんとは。よく見れば兒顔覚えあり、克くもたづねて來りしぞ。」さては母上なりけるか。「應娘が懐かしや。」と、抱きよせて歎きけり。扱

彼の男さし寄りて、「小子は切平と申す、一齋の奴僕なるが、往年奈古平といふ者に欺かれ、河内國に旅立ちし隙に、忘貝さまは往方しれず、寄居蟲さまをもち参らせ、國々を遍歴し、周く敵を尋ね巡るといへども、今において所在をしらず、近頃華洛に赴きて、此の處より程遠からぬ、長堤の下に蝸舎を設け、貯へつきてせんすべくなく、袖乞とは成つたるなり。寄居蟲さまにも日頃戀しとおほしたる、母上に回り會ひ、嘸歡び給はん。」といひければ、お杉答へて、「切平殿とやらんが赤心も、逢州主の物がたりにてよくも知れり、夫れは冤まれ最前曲子をうたひつるより、良久しく何等の由縁ありてか、外面に忍びて居つるならん。」と訝るに、切平又曰く、「おん身の帯に結び給ひたる巾著は、世に希なる笹蔓錦にて、此の守袋とおなじ襟なり。先に錢とらせ給ひしとき、寄居蟲さま眼ばやくみうけ、夫れゆるに小柴垣にそうて、一伍一什を聞きつるなり。先づ問ふべくはお杉どのの言葉、心得がたき事あり、寄居蟲さまおよび吾が身の事ども、逢州主に聞きおきたりと宣はする、その逢州主とやらんは、何等の人にや。」といひければ、お杉は涙堰きあへず、「逢州主とは異人ならじ、一齋どのの女、寄居蟲の姉と頼みし忘貝が、柳巷にてしか呼びつるなり。」と、聞いて寄居蟲小膝を敲とうち、「扱は姉上も此の柳巷に坐すとや、神ならぬ身の努しらで、近きに居をトせしめ、年來念する觀世音の冥助ならん、母上是れより直に妾を誘れゆき、姉うへに會はせ給へ。」といひつゝ、綴りたる衣の袖を打返し、「花街

は錦に花を添へ、姿つくるふ處と聞く、かく宴々しき姿にて、妹といひて訪ひ寄らば、姉上も面なかるべし、切平は立戻り、著替をもちて來るべし、さぞな其方もよろこびおもはん、など物は言はざるぞ。」懐中鏡とり出し、髪を掻きあけつ勇むほど、猶お杉は口ごもりて答へもなさず。稍ありて、「やよ娘、姉にあひたう思ふなら、花街に往くまでもなく、姉は爰に。」と涙ながら、逢州の首級を前にさしおけば、「あなや。」と叫び飛び退きて、袖打鬚し動ひる。切平は手を叉き、惘然として居たりしが、逢州が首級に眼を留めてうちまもり、「寄居蟲さま熱く心して見給ひね、此の首級こそ正しく忘貝さまに疑ふべうもあらず、今朝街説に聞きつる、人手に懸りて果てたりし、遊君の名も逢州とやらんといふなれば、あなきづかはし。」と傍を顧み、「燈火暗うして確と見とめがたけれど、夫婦と見えたる二人の手負、殊にこの首級、此の家にあるをおもひ廻らすに、一定深き由縁あらめ。」といひつる間に寄居蟲も、おそろく首級をとみかうみ、「切平の言葉の如く、此の首は姉さまの面さしによくも肖たり、いかなる事ぞ母さま切平、由縁を疾く聞かせ給へ。」と、餘りの事に涙もおちず、心みだれし如くなり。お杉も涙にかきくれて、「切平どのの推量に違はず、逢州ぬしは昨夜甲屋といふ茶屋より歸るさ、人手にかゝりて死しつるなり、其方が最前曲子につくりて唄ひしは、姉忘貝の事にてあり。」といふに、寄居蟲よ、と許りに泣伏して、「そは姉上は何者が殺せしぞ、若しや敵に廻りあひ、返

討にはあらざるや。」と、なほ詳かに事を問ひあきらめんとしけるが、お杉も流石五郎藏なりともいひ兼ねて、躊躇ふさまに五郎藏は膝行り出で、「何寄居蟲女郎とやらん、御身の姉上逢州主を殺せしは、此の五郎藏といふ者なり、嚮に唄ひ給ひたる曲子には、私夫に殺されつると、浮きたる心もある如く作り給ひしが、全くさいふ事にあらず。」と、これを發語として、お杉杜鵑花三人かはるゝ、ありし事どもおちもなく語りければ、寄居蟲は何と思ひ辨ふ方もなく、少時涙に伏沈み、一切貌もあけざりしが、稍ありていひけるは、「年頃慕ひし母上姉上、回り會ひはあひながら、淺ましき此の光景、宣ふ事を聞くからに、何人を怨みん是れも又、宿世よりの約束ならめ、とはいへ昨日逢ふならば、笑うて三人此のやうに、顔と顔とをあはさんに、一日おそくてあぢきなや、是れ喃姉うへ寄居蟲が、尋ねて來り侍ふぞ、應妹よう來たと、一言いうて給はれよ、逢州といふ遊君が、昨夜人に殺されつと、路行く人のいふを聞き、曲子に作りて切平もろとも、家々の門にたち、しらぬ事とは言ひながら、姉の浮名を世に唄ふは、いかなる業か淺まし。」と、お杉が袖にとり継り、歎き果つべうも見えざれば、切平はさしよりて、「さ悲き給ふは宜なれど、姉上忘貝様といふ事を、知らせ給はねばせんかたなし、その曲子が媒して、母上に回り會ひ給ひしは、姉尊靈の導き給ふに疑ひなし、かかる上は一齋君の最期の緣由を、母上にきこえあけ、父の仇を討ち給ふこそ肝要なり。」と、いひ慰めければお杉曰く、

「一齋殿非命の死は、逢州ぬし淺間の君に物語り給ふを、番門を隔てて聞き居たるが、敵の名をさへしらすとや、いかにして索ね給ふ。」と、言葉の中たり寄居蟲も涙を拂ひ、「これぞといへる證據もあらねど、隠行の術とかいひて、形を隠す曲者こそ、讎敵なる由は、父の今般の物がたり。」と、聞くに五郎藏大いにおどろき、「われ昨夜土右衛門を討ちもらせしも、彼の隠行の術に依りてなり、あな訝し、若しくは彼が所爲ならんもしるべからず、心をつけて見給ひね、思はずも最期をのべたり。」と、刀を切目ながくひきまはす、杜鵑花も苦しげに額髪ふりわけつ、いと細き聲をふり立て、「絆に紛れて言ひもらせり、此の右の袂には、土右衛門より得たる百兩の金あり、妾夫婦が死に行かば、長も負債ははたるまじ、寄居蟲女郎に參らせて、身の貧しきを貢ぎ給へ、今は露塵おもひおく事侍らねど、空言にもせよ五郎藏どのに、離状を送りつるが、後世の迷ひとなりなん。」と、女の心一條に、思ひみだるる心の中を、お杉も不便とくみとりて、傍の銚子をとりあけ、手水鉢の水をうつして座になほり、「五郎藏どの間かる、如き、杜鵑花ぬしの實心、未來は一つ蓮葉に、二人寝るてふ結めの杯、又も此の場にとり結び、迷ひをはらし給ひね。」と、いへども物はいひかねて、唯打點頭くばかりなり。寄居蟲も信だちて、銚子たづさへ立寄りて、「いざ杜鵑花主よりさし給へ。」と、杯を手につせど、身も戦慄きてゆりこぼす、水の哀れや消えてゆく、浮世は夢の蝶花形、鳥臺ならで鶴龜を、法の燈に明日

は見る、經衫きやうかたじらの白無垢しろむくも、鮮血あざけにそまる色直いろなほし、三々九度さんくくどや九品くほんの蓮臺れんたい、靈棚たまごならでいつかさて、回鸞さとうへりせん冥途めいどの嫁入よめいり、切平せつへいもさし心得こころえ、燒くや門火かどびも春東風はるごちうに、煙けぶりは西にしに靡なくめる、時ときも違たがへず五郎ごろう藏ざう杜鵑つぎね花はな、眠ねむるが如ごとく絆絶こたえたり。かねて覺悟かくごも今更いまさらのやうに悲かなしくて、亡むなしき骸からを揺ゆりうごかし、二人ふたりは又またも歎なげきしが、お杉すぎ、寄居よどかり蟲むしに對むかひ、「やよ娘よすめ、馴染なじみのなき其方そなたさへ、あへなき最後さいごをみるからに、涙なみだにくる、は理ことわりながら、色いろも香かもなく老おいくだつ、此この老女らうなは存命ぞんめいへるて、貞操ていそうさへ端正てんせいさへ勝まさり劣おとらぬ梅櫻うめざくら、苔つばみの花はなを吹ふきちらされ、殘のこる妾めかけが心のうち、推おし量はかりても見給みたまひね、曉鐘あけしやうじ寺てらの九品くほん佛ぶつへまうでんと、唐錢たうせん句文くもんを選えり出し、巾著きんちやくへいれおきしが、先に三錢さんせんおん身に與あたへ、爰こゝに六文むもん残りしも、六道どうぜん錢せんとなるといふ、兆さざにやあらん。」と泣なき伏ふしければ、切平せつへいは勢いきり起おこし、「いと理ことわりには侍はんれど、此この世よに歎なげく涙なみだの爲ために、三途みつじゆ川の水みづ炭すすを増まし、往生わうじやうの妨さまたけなり、婚姻こんいんの杯さかづきを、末期まうごになせし杜鵑つぎね花はな主ぬし、五郎ごろう藏ざうどのと睦むつまじく、冥途めいどでそひとけ給たまはる爲ため、謠うたひに換かふる經陀羅尼きやうだらに、弘誓くわいせいの船ふねに帆ほをあけて、月つき諸もろ共に西にしへゆく、成佛じやうぶつ得脫とくだつの法ほふ養やうこそ、あらまほし。」といひければ、お杉すぎも漸やうやく涙なみだを止め、杜鵑つぎね花はなが袂たもとより金かねを取とり出とり、逢州あふしうの柱うちきにとりそへ、「姉あねの形見かたのともみるべし。」と、寄居よどかり蟲むしに與あたへ、扱さて五郎ごろう藏ざうが手下てしたを呼よび集あつめ、首尾はしめをりを物語ものがたり、かたの如ごとく野邊のへ送おくりを營いとなみ、かくて在あるべきにあらねば、曉あけの頃ときほひ、家路いへぢにこそは別わかれ去さりけり。

第八

非人ひにんの家に良治りやうぢ雨あめの小止こどをまつ
袖乞そでこひの娘茶むすめぢやをたてて良治りやうぢにまゐらす事こと

扱さても其そのの後のち淺間せんげん巴おん之丞のぢやう良治りやうぢは、春はるの餘波なごりもしらぬまでに、垂たれこめてあかし暮くれしけるに、一日いちにち小織こおり之助のすけ人ひとなきをりをうかゞひ、御前おんまへに進すすみ出でて申しけるは、「君きみしろしめさすや、頃日このころ御所ごしよの五郎ごろう藏ざう、何等なんらの恨うらみありてか、田字すもり草くさの遊君いうくん逢州あふしうを殺害せつがいせしと、巷ちまたの風説ふうせつあり、小子やつがれ彼處かしこに往ゆきて、詳つばらの事を聞き果はつべし。」といひければ、巴おん之丞のぢやうも打潛うちひそみて、「そは我われも夙ほかに聞きけり、今宵こゝろ潛ひそかに曲中くまわに到いたり、絆こたのやうを探たづね問とふべし。」とて、小織こおり之助のすけ一人ひとりを俱ぐし、忍しのびやかに館やかたをたち出いで、暮近くれぢかき頃ころ五條坂ごじやうざかの此方こなたなる、堤つみの下したに差懸さしかけるが、爰こゝにさ、やかなる流ながれに沿そひて、爛漫らんまんと咲さき亂みだれたる櫻さくらの大樹たいじゆあり。巴おん之丞のぢやう少時せうじ樹下じゆかに傍徨たふさみ、刀かたなの柄つかに扇あふぎうちかけ、遠近あそちちを眺ながむれば、新柳煙しんりゆうけいを含ふみ、春草雨しゆんそうあめを帯おびて寂寥じやくれうたり。時ときにそよ吹ふく風かぜにつれ、散ちり敷しく花はなの水みづの隨意まじく、流ながれゆくを打見うちみやり、良治りやうぢ殆たいていんど興きようにいら、前庭ぜんていの落花らくわは雪ゆきの如ごとくなれども、笠かさは重おもき事ことなし。」と、扇あふぎを持つて拍子ひらとり、朗詠らうえいなしければ、忽たちまち地背ぢせのかたに聲こゑあり。「山復やままた深く樹じゆは昏くる、に似たれども、日ひは未いまだ傾かたかず。」と唄うたふを聞きき、「あな心こゝろ憎にくや。」とみかへるに、二八にぱち許かりの少女せうじよ、澤さはゆく水みづを桶かづに汲くみとり、彼かれは花はなにみとれてイむなり。熟つち視みるに、紅粉こうふんを粧まはざれども、天性てんせいの美形びけい玉たまのごとく、絶たえて鬢びんくしもとらずと見みえ、海松みづのけの如ごとく亂みだれ

たる黒髪もにほひありて、何となくをかしけなり。思はずも巴之丞主従と顔のみあはせ、手にもつ竹笠を假に几帳して、堤を廻り立ちさりぬ。良治もあへて急ぐべき路ならねば、「何等ものぞ。」とて、彼の少女の後について、三町ばかり往きけるが、此の所は少し市中に遠ざかり、竹樹蒼翠にして沙石鮮明たり。思ひきやかかる閑静の佳境有らんとはと、猶わけつゝ行けば、いぶせく荒れにあられたる小家あり。小織之助曰く、「是れなん先の少女が隠家とおほしく、彼が手に持ちたりし竹笠、片折戸にかけおきたり。頃日往交ひたる道ながら、此の所に家ある事をしらす、何なる人の栖家にや、尋ねとふべし。」といふ折から、春雨俄にふりいでしに驚き、籬にそうて晴間を待てども、なほ八重雨袖笠に玉を散らし、所詮頼に晴るべしとも思ほえず。時に破れし窓より香煙細く立ちのほり、風暗香をおくりければ、良治邊をみめぐらし、「いかに小織之助、先に我花をみつるをり、賤の女に似けなく、朗詠の句をつぎ、今又伏屋に名木を薫らし、なにさまゆるある人の、世塵を厭ふ栖家とおほゆれ、折柄の雨やどりには、荒れたる軒も逸興ならん、しかくはからふべし。」と命せければ、「畏み候。」といひて、庵の扁屋ほとくと喧ひぬ。「誰ぞやく」と美しく答へて、此の時日色全く没しければ、昏燭して迎へ出で、折戸押開くは、是れ則ち先に見つる手弱女なり。小織之助丁寧に禮をなし、「小子が主君所用ありて、五條坂のほとりに赴かんとなし、かく俄なる雨にあひ、ほとく往きわづらひ候なり、是

れより長が許に程近ければ、彼處に走せゆき、傘持ちきつる間、少時少女の軒端をかり、主君を憩はせ申したし。」といひければ、少女打微笑みつゝ、二人が姿をつらくうちまもり、「君達は最前花の本にて見え奉りし貴人ならん、見給ふ如く内も外なる土生家、休はせ給ふ處も侍はず、と許りにて雨にそほち給ふもいと侘し。恥かしながら妾は往來の袂に携り、僅かの錢を得て飢を凌ぐ身にしあれば、その手にふれたる蓑笠を、まるらせんも憚りあり、無益き事をいふ間に、雨はいよく降り出でぬ、あ、何とせん。」と、深く思ひ勞ふさまなり。小織之助良治が前に立戻り、「彼が申す處を聞き候に、此の處は非人の家とおほえ候、片時にもあれかかる處に憩はせ給はば、人の誹り御身の上におよぶべし、とくく歸らせ給へ。」といふに、「否々非人にもあれ乞食にもせよ、姿の艶なる言葉の雅びたる、いかにも心ゆかしき處あり、強ひて宿を求めんず。」と、徐やかにあゆみより、「世の中を厭ふまでこそかたからめと詠みし、西行法師が江口の里の雨やどりにはあらねど、我も五條坂の某が長に通へる戀の奴にて、さまで心きたなきものにあらず、曲けて須臾休はせ候へ。」と、打通るにより少女もせんすべなげに、佳文席鋪きまうけて上座に移し、遙か退りて手をつかへ、更に禮をみださず。座さだまりて後良治、四壁をみ廻らすに、外より見つるとは事かはり、こぼれたる壁、傾きたる軒端ながら、家は風流につくりなし、釜のたぎりの松風潔く、炭の形花のさしぶり、悉く法に叶ひ、なにさま盧同

陸漸のあとを慕ふ、數寄者と思はれければ、はたせるかなと心のうちに稱讚なし、「女性は茶道を嗜むところ見ゆれ、爐の切りかた自在のか、り、我が學びしに露違はず、俗塵をはなれし風雅の茶寮、おくゆかしき住居かな。」と仰せければ、「こは面なき事を聞え侍る、草露の窓に眩をしき、蓬草の許に眠り、蘆の簾草の筵、荒れて侘しき賤が家も、紫殿紅樓を眼馴れ給ひし貴人は、却つて興ありとも見給はんが、元來身貧にして山菓庭に落ちず、柴火爐に盡きて夜薄の衣いと寒し、袖乞とまでなり下り、似氣なき事とは知りながら、亡父の若かりし時よりして、嗜みたる道なれば捨てもやらず、霞を憐み露をかなしみ、數寄者を學び候なり。」といひつるにより巴之丞益嗟嘆なし、「孝心といひ美形といひ、勝り劣らぬ手弱女を、埋木となすぞ口惜しき、さればこそ先により、故ある人とは見うけつれ、一樹の陰に雨を防げ、一河の流れを汲むさへも、ひとかたならぬ縁と聞く。いで其方の手まへにて、芳若一服所望せん。」と宣へば、少女なほも身をくだり、「重ね／＼も憚り多き仰せ事を聞え侍るものかな、賤の女の俚しきてまへ、いかで君に奉らん、こは罪深しゆるさせ給へ。」と推辭むにより、良治重ねて言ひけるは、「夫れ茶は和朝の風俗にして、花車になるの一つなり、其の原は禪學に出でて、心を世外の閑境に遊ばしめ、維摩が方丈に倣ひて、四疊半を圍ひとする、何とて貴と賤を論すべき、強ひて乞ふ上は黙止す事なかれ。」と、再三の望みに少女も今はせんすべなく、裾らむ貌の緋服紗も、花に

紛ふや櫻炭、雪の白炭しるたへの、手もとたゆげに蘆屋釜、かゝる簾のよしや世は、夢と悟りて高麗の、錦のへりに替へて敷く、客疊さへ熊川の、茶碗取出し手品たてぶり拙からず、濃茶一杯調へ出す。主は非人客は貴人、珍奇なる茶會なり。良治たてぶりの事馴れたるを稱し、且服のよろしきを讚め、心よく喫みほすと齊しく、不思議や俄に眠りもよほしければ、溫柔の良治臂を曲けて枕にかへ、其のまゝ、眠り著きぬ。かくて少女は番門をひらき、一つの位牌をとり出し、茶を供じ焼香して、ねもごろに廻向なしけるを、小織之助不圖その位牌を見れば、俗名逢州と書きつけたり。「扱は御身も逢州主に由縁ある御方なりけるか、某が主君と申すは。」と、いひかけて言葉を止へたり。少女言ふ、「妾は則ち逢州の妹、寄居蟲といふ者に侍るが、君たちは又何等由縁ありて、姉上の事を問はせ給ふ。」と問ふにより、小織之助又曰く、「此の位牌を見たる上は、街説に違はず逢州ぬしは、非命に死せるものならん、無慙の事をなしたり。」と、悲歎やるかたなくはみゆれど、寄居蟲はふつに其の心を得ず。お杉がおくりたる逢州の、桂のいと清ければ、良治が裾にうちかけ、風を防ふ様もいと信だちてみえける。小織之助ちかく居より、「御身逢州ぬしの妹とあらば、言ひもし聞きもせる事多なり、此の處にて詳の事を語らんには、主君の眠りを妨げん、此方へ來るべし。」とて、次の間に誘引ひけり。

淺間獄面影 逢州執著譚卷之四 終
草紙後帙

淺間嶽面影 逢州執著譚 筌篔卷

種彦著

第九

逢州が幽魂巴之丞を清涼山に誘引ふ
石橋の物語 金色の獅子王牡丹に狂ふ事

時に夜風烈しくおとし來り、西北に雲起りて、東南に雨の脚いよく繁く、淺間の心凄さに、良治不圖眠り覺めて、枕のほとりを顧みれば、「怪しの女ぞ現はれたり。雨にぬれたる桃眼露はに咲み、嵐に亂れたる柳髪なだらかに垂れ、羅綾の袂鮮やかに、錦繡の裾斜なり。視るからに心おどろき、「女客には何人にてやおはすらん、更に現とも覺え候はず。」と、慎み畏れていひければ、女うちわらひ、「君には早くも妾を視忘れ給ひしか、あなうきたる御心かな。」と打恨む。良治尙も不審はれず、つらつらうちまもり大いに驚き、「さいふ其方は逢州にはあらずや、人手に懸りて死しつると聞きし故、思ひに堪へかね、此の處までさまよひきたりしが、健かなる其方の姿、あな訝し。」と一度は驚き、一たびは喜びけり。逢州はなほうらぶれたる面持にて、「妾は君に別れ參らせてより、不良くも人手にか、

り、憂きや浮世の夢かる、蝶の翼の白粉も、風に亂れて草隠れ、淺ましき身になり侍る、たゞ忘れ難きは互の戀路、戀しゆかしにもゆるなる、胸の煙をくらべなば、淺間の山も數ならず、闇浮にありし其の昔、綾羅を切つて方茵となしては、朱房玉樓のうちに眠り、錦繡を截つて衣を重ねては、紫殿寶閣のうへに遊び、且に酒の泉を汲み、夕に肉の林に歌ふ、夏の夜の稻妻は、雲に文ありとのみながめ、秋の夕の白露は、玉と賺くをもて、心ゆくみものとはすれど、假にも無常迅速のことわりをしらざれば、穢土の迷倒を離れて、淨土の快樂を受けん心もなく、榮耀に飽き充ち三寶を信せず、さるかに永く八寒の氷に纏はれ、いよく焦熱の佛鼎に溺るべかりしを、聊か孝順の志あるを以て、忽ち五障の雲を消除し、南方無垢の月を眺め、覺藥西刹の寶池に遊ぶ身とはなりぬ、君と妾が縁には、一席に盡しがたき物語あり、まづ此方へきたらせ給へ。」と手をとれば、良治も更に夢現のさかひをしらず、白雲に乗じて蒼天に登るが如く、霞を分け霧をしのぎ、或は白雲花を帯びて、老松梢をならぶる高山にいたり、或は猿猴雲に叫び飛泉巖に灑ぐ高峯を過り、ゆきくいていと危き高嶺に憩ひぬ。さて逢州巴之丞に對ひ、「かねて音にも聞き給ふらん、此の所は唐土清涼山といへるにて、あれに見えつるが名にしおふ石橋なり、むかひは文殊の淨土にて、常に笙歌の華ふり、尊き事言葉には演べがたし。」といふに、良治答へて、「斯かる尊き靈場に、何等の由縁をもて、我を誘引ひ來りし。」と問ふ。逢

州又曰く、「君さきつ世には、參議左大辨濟光の息男、大江定基といひし人なり、國務の間赤坂の力壽といへる遊君に馴れそめ、互に契り深かりけるが、無常の風防ぎ難く、遂に彼の力壽息絶え眼閉ぢぬれば、枕を雙べし面影、席を同じうせし移香も、替り終てぬる姿なれども、色欲の愛執未だ盡きず、七日を経て野外に送る、戀慕の火は哀傷の胸を焼き、別離の涙は愛著の身を浸す、是れを逆縁の善知識として、忽地に出家して、比叡山楞嚴院惠心先徳の室に入り、寂照法師といひしは則ち御身なり、四教三觀の翰藻を習ひ、佛知佛見の奥旨を得つるが故、今生は國司とうまれ給ひたり、妾の前生は彼の遊君力壽なり、されば君と縁を結びしは、宿世より定まりたる奇縁といふべし。往昔長保五年秋八月二十五日、御身の前生寂照法師入唐して、此の清涼山にいたり、大聖文殊の靈像を拜し奉る。さる因縁をもて君を再び此の處に誘引ひまらせたり。」と、首尾を物語るに、良治益奇異の思ひをなし、遠近を顧みれど、あまりに山を遠く來つるとおほしく、雲又跡を立隔て、樵歌牧笛の聲さへも聞えず。徐らたちよりて石橋を見わたせば、其の面僅かにして、昔なめらかに谷ふかく、したは泥犁もしら浪の、虚空を渡るが如くにて、雲に聳ゆる粧ひは、譬へば夕陽雨の後に、虹を渡せるかとあやまたれ、又は弓をひける姿に似たり。瀧津瀨は雲より落ちて、數千丈の瀧壺には霧暗うして、見るにさへ身の毛もいよだち、岷々たる巖石にいと危くかゝりたる石の橋なり。「さては是れぞ吾が日本まで

も、その名かくれなき石橋なりけるか、何れの代いかなる人の作りいだせる、語りてよ。」と宣ふに、逢州曰く、「それ天地開闢けてよりこの方、雨露を降して國土を渡る、是れ即ち天の浮橋ともいへり、其の外國土世界において、橋の名所さまざまにして、水波の難を逃れ、萬民富める世を渡るも、是れ皆橋の徳とかや。然るに此の橋は人間の渡せる橋にあらず、おのれと出現して、つゞける石の橋なれば、石橋と名をなづけたり。其の面僅かに尺よりは狭うして、其の長は三丈餘におよべり、上には瀧の絲雲よりかゝり、山河震動して雨塊を動かせば、そのかみ名を得たりし高僧貴僧も、こゝにて難行苦行捨身の行をなし、さうなう渡らぬ橋に侍る。されども君は前生に大徳の聞えあり、なにかはくするしかるべき、いざ石橋をうちわたり、文殊菩薩を御拜み候へ。」と、おちもなく演べければ、渡初めて寂照法師が再生なる事をしり、「起縁を聞くぞあり難き、いで文殊の淨土とやらんを拜すべし。」と、石橋にさしか、れば、昔なめりて足もたまらず、目もくれ心もきえ、神變佛力にあらざれば、渡るべうも覺えざれば、逢州の袂に携り、辛うじて向ひの岸に到りぬ。いまままで崎嶇しかりし山の形には引替へて、地平なる事掌の如く、吠瑠璃の砂をしきみて、玉の礎には梅檀の柱をたて、黄金の樓臺珠玉の殿閣、靈光赫々たる闕々連延として、莊嚴更に人界に比すべき物なし。孔雀鸚鵡は八功德の池に轉り、鳧鴈鴛鴦は珊瑚の寶沙に求食る。時に簫笛琴瑟、夕日の雲に響きわたり、歡喜信仰